

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XII

1992年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1999. 3

財団法人 大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XI

1999. 3

瓜破遺跡

1986年に発掘された飛鳥時代の官衙的な建物群に伴う大型の掘立柱建物をはじめ、これの東方で検出された集落の区画溝や遺物を報告している。

長原遺跡

おもに遺跡の東南地区で検出された後期旧石器時代から室町時代の遺構と遺物を報告しているが、中でも後期旧石器時代から、縄文時代初頭については石器製作址出土の接合資料の検討も行っている。また、長原式土器と遠賀川式土器が共伴した遺構をはじめ、東川辺川から出土した2点の石斧の柄を報告したほか、西日本出土の縄文時代晩期終末の斧柄の考察を取録している。

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XII

1992年度大阪市長吉瓜破地区

土地地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1999. 3

財団法人 大阪市文化財協会



NR903 (東川辺川) 出土斧柄 (斧身は別遺跡の参考品)

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XII

1992年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1999. 3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XII

1992年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1999. 3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本報告書は、1992年度の大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査の報告書である。

1981年から継続している土地区画整理事業に伴う長原・瓜破遺跡の発掘調査は今年で17年が経過し、その結果については年度を追って『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』として刊行してきた。シリーズの12冊目となる本書は92年度の調査成果を収めたものである。その内容は旧石器時代から江戸時代にいたる生活や生産に係わる遺構・遺物に関するものであり、多岐に渡っている。

本報告書が広く活用されとともに、文化財保護意識の高揚に幾分なりとも資するところがあれば幸いに思う。

おわりに関係各位に深く感謝の意を表して報告書刊行の挨拶とする。

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 佐治 敬三

例 言

- 一、本書は大阪市建設局長吉瓜破区画整理事務所が施行した、大阪市平野区内における1992年度土地区画整理事業施行に伴う発掘調査の報告書である。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長永島輝臣(現調査部長)の指揮のもと、現調査課長代理藤田幸夫・岡田中清美・同課現主任趙哲済・同課高橋工・平田洋司が行った。各調査の担当者・面積・期間などは、第Ⅰ章第1節の表1に記した。
- 一、木製品の整理および保存については調査課伊藤幸司・島居信子が行った。
- 一、発掘調査と報告書作製の費用は、大阪市建設局および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話株式会社・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。
- 一、本書の編集は調査課田中が行った。執筆は上記調査員と討議の上、田中が担当したが、第Ⅱ章第1節については土器類以外は趙が行った。また、石器遺物については調査課趙・絹川一徳・櫻井久之が検討の上、分担した。なお有蓋尖頭器AE2については[田島富恵美1993]からの再録である。巻末の英文要旨は調査課岡村勝行とRobert Condon氏が執筆した。
- 一、遺構写真は担当調査員が撮影し、遺物写真の撮影は徳永園治氏に委託した。なお、巻頭カラー写真は、奈良国立文化財研究所杉本和樹氏による。
- 一、地層名は第Ⅰ章に記した長原遺跡の標準層序[趙哲済1995]に従った。文中の表記については、NGO層を長原〇層としている。
- 一、遺構名の表記は、石器製作址などの石器集中部(LC)・自然流路(NR)・独立柱建物(SB)・溝(SD)・井戸(SE)・土壌(SK)・ピット(SP)・畦畔(SR)・用途不明遺構(SX)の記号の後に、各調査地区ごとの通し番号を付した。長原4層段階の遺構にはSD4〇〇、長原7層段階の遺構にはSK7〇〇のように表記した。なお、一部の調査地については調査時の通し番号を付している。
- 一、石器遺物番号、接合資料番号および剥離順序の記述の方法についてはシリーズⅨ・Ⅹを踏襲した。また、本報告では調査年度を省略した。
- 一、石蔵の型式分類の基準および各部位の名称は、[菅榮太郎1995]に基本的に準拠した。
- 一、遺物の年代観を示すに当って採用した既往の研究は、引用・参考文献の欄にまとめた。
- 一、調査時の測量は大阪市都市整備局設置の基準点・水準点を用い、国土平面直角座標(第Ⅵ系)の値に換算した。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中ではTP±〇〇mと表記する。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。

謝辞

本報告書の作成に当り、奈良国立文化財研究所蔵文化財センターの光谷拓実氏には斧柄の樹種の同定を、同センターの工楽普通氏、金子裕之氏をはじめ、愛媛大学田崎博之氏には斧柄についてご教示をいただき、京都大学山中一郎氏には92-13・18・34・46次調査地出土の石器遺物の器種・石材についてご指導いただいた。以上の方々に厚くお礼申し上げる次第である。また、発掘調査および資料整理には財団法人大阪市文化財協会長原調査事務所に所属する調査員や多くの補助員の援助を得た。ここに記して謝意を表したい。

本文目次

序文

例言

第Ⅰ章 調査の経過と概要	1
第1節 1992年度の発掘調査と報告書の作成	1
1) 発掘調査	1
2) 報告書の作成	4
第2節 調査の経過と概要	5
1) 長原遺跡東南地区	5
2) 長原遺跡南地区	8
3) 長原遺跡西南地区・瓜破遺跡東南地区	9
第Ⅱ章 長原遺跡東南地区の調査	11
第1節 92-9次調査	11
1) 層序	11
2) 各層出土の遺物	14
3) 遺構とその遺物	15
i) 飛鳥～平安時代の遺構と遺物	15
(1) 掘立柱建物	(2) 土器埋納ピット
ii) 弥生時代前期前半の遺構と遺物	18
(1) 流路	
iii) 弥生時代前期～中期初頭の遺構と遺物	23
(1) 用途不明遺構	
iv) 後期旧石器～縄文時代初頭の遺構と遺物	26
(1) 石器製作址	
第2節 92-10次調査	31
1) 層序	31
2) 各層出土の遺物	34
3) 遺構とその遺物	41
i) 飛鳥～江戸時代の遺構と遺物	41
(1) 江戸時代の水田址	(2) 平安～鎌倉時代の溝・水田址
(3) 飛鳥時代の溝	

ii) 弥生時代前期の遺構と遺物	46
(1) 溝	
(2) 土塙	
(3) 流路	
iii) 縄文時代の遺構と遺物	48
(1) 流路	
iv) その他の調査	52
4) 小結	52
第3節 92-24次調査	53
1) 層序	53
2) 各層出土の遺物	55
3) 遺構とその遺物	58
i) 平安時代の遺構と遺物	58
(1) 溝	
(2) 土塙	
ii) 古墳時代の遺構と遺物	60
(1) 窪地	
4) 小結	60
第4節 92-34次調査	62
1) 層序	62
2) 各層出土の遺物	65
3) 遺構とその遺物	68
i) 平安～室町時代の遺構	68
(1) 水田址	
ii) 古墳時代末～飛鳥時代の遺構と遺物	69
(1) 溝	
(2) 銅木痕跡	
(3) 土塙	
iii) 後期旧石器～縄文時代の遺構と遺物	70
(1) 流路	
(2) その他の遺構と遺物	
4) 長原15層以下の調査	71
5) 小結	72
第5節 92-47次調査	73
1) 層序	73
2) 各層出土の遺物	74
3) 遺構とその遺物	76
i) 平安時代の遺構と遺物	76
(1) 溝	
(2) 土塙	
(3) 柱穴	
4) 小結	78
第6節 92-51次調査	79
1) 層序	79

2) 各層出土の遺物	81
3) 遺構とその遺物	83
i) 弥生～古墳時代の遺構と遺物	83
(1) 掘立柱建物	(2) 土塹
(3) 水田址および溝	
4) 小結	84
第7節 92-62次調査	85
1) 層序	85
2) 各層出土の遺物	87
3) 遺構とその遺物	88
i) 平安～室町時代の遺構と遺物	88
(1) 土塹	(2) 井戸
4) 小結	96
第8節 92-81次調査	97
1) 層序	97
2) 遺構とその遺物	98
i) 弥生時代前期～中期初頭の遺構	98
(1) 溝	
3) 小結	98
第Ⅲ章 長原遺跡南・西南地区、瓜破遺跡東南地区の調査	99
第1節 92-13次調査	99
1) 層序	99
2) 遺構とその遺物	101
〈北区〉	
i) 鎌倉～江戸時代の遺構と遺物	101
(1) 溝	(2) 東除川
ii) 飛鳥時代の遺構と遺物	104
(1) 溝	
〈南区〉	
i) 江戸時代の遺構と遺物	104
(1) 溝	
ii) 奈良時代の遺構と遺物	105
(1) 畦畔	
3) 小結	106
第2節 92-18次調査	107
1) 層序	107

2) 遺構とその遺物	108
i) 江戸時代の遺構と遺物	108
(1) 土壇	
3) 小結	111
第3節 92-11・49次調査	112
1) 層序	112
2) 各層出土の遺物	115
3) 遺構とその遺物	118
i) 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物	118
(1) 掘立柱建物	(2) 溝
4) 小結	123
第4節 92-46次調査	124
1) 層序	124
2) 各層出土の遺物	125
3) 遺構とその遺物	126
i) 飛鳥時代の遺構と遺物	126
(1) 掘立柱建物・柱穴	(2) 土壇
(3) 溝	
4) 小結	133
第IV章 遺構・遺物の検討	135
i) はじめに	135
ii) 斧柄と部分名称	135
iii) NR901出土斧柄と共伴遺物	135
iv) 縦斧の系譜と時期	136
引用・参考文献	142
あとがき・索引	
英文要旨	
報告書抄録	

図 版 目 次

- 1 長原遺跡東南地区92-9次調査地
上：西区西壁地層断面(東から)
下：長原6-7層下面および8C層上位の
2層基底面遺構検出状況(南東から)
- 2 長原遺跡東南地区92-9次調査地
上：SB402(北東から)
下：SB701(西から)
- 3 長原遺跡東南地区92-9次調査地
上：NR901(南東から)
下：NR901(北西から)
- 4 長原遺跡東南地区92-10次調査地
上：1区長原4Biii層下面ウシおよびヒトの足跡群
(南東から)
下：1区長原8Cii層上面ヒトの足跡群
(南東から)
- 5 長原遺跡東南地区92-10次調査地
上：1区長原9A層下面SD901・902、SK901
(南東から)
下：1区SD901西壁地層断面(東から)
- 6 長原遺跡東南地区92-10次調査地
上：2区NR903(北から)
下：2区NR903茅鞘出土状況(北西から)
- 7 長原遺跡東南地区92-10次調査地
上：1区長原12A層上面NR1201-1203
(北西から)
下：1区NR1202内流水出土状況(東から)
- 8 長原遺跡東南地区92-10次調査地
上：1区長原12A層上面の旧地形(北西から)
下：1区NR1204(南東から)
- 9 長原遺跡東南地区92-24次調査地
上：南壁地層断面(北から)
下：長原6A層上面隅隅の足跡群(北から)
- 10 長原遺跡東南地区92-24次調査地
上：調査地東部長原4Biii層上面遺構
(東から)
下：調査地東部長原9A層上面遺構
(東から)
- 11 長原遺跡東南地区92-34次調査地
上：西壁地層断面(北塔付近)
下左：長原4Bi層上面水田址(南から)
下右：長原6-7層下面遺構(北から)
- 12 長原遺跡東南地区92-47次調査地
上：調査地南部西壁地層断面(東から)
下：長原4層下面遺構(北から)
- 13 長原遺跡東南地区92-51次調査地
上：1区長原7A層基底面遺構
(北西から)
下：2区SD701(北西から)
- 14 長原遺跡東南地区92-62次調査地
上：2区東壁地層断面(西から)
下：1区SK02-04、SE01(南から)
- 15 長原遺跡東南地区92-62次調査地
上：1区SE01北側井筒内遺物出土状況
(西から)
下：1区SE01南側井筒(西から)
- 16 長原遺跡東南地区92-62次調査地
上：2区SE03井筒(南から)
下：2区SE02井筒(南から)
- 17 長原遺跡東南地区92-81次調査地
上：長原1層基底面遺構(西から)
下：SD901(西から)
- 18 長原遺跡南地区92-13次調査地
上：北区北壁地層断面(南から)
下：南区西壁地層断面(東から)
- 19 長原遺跡南地区92-13次調査地
上左：北区東除川埋土跡土後の状況(北から)
上右：北区長原6B層上面遺構(北から)
下：北区SD607と断面(北から)
- 20 長原遺跡西南地区92-11・49次調査地
上：3区長原13層上面遺構(西から)
下：SD13・14・15(西から)
- 21 瓜破遺跡東南地区92-46次調査地
上：SB01、SD18(南から)
下：SB01、SF41、SK08(南から)

- 22 瓜破遺跡東南地区92-46次調査地
上：SK08遺物出土状況(西から)
下：SD18遺物出土状況(北東から)
- 23 瓜破遺跡東南地区92-46次調査地
上：調査地北端部長原4層基底面遺構(南から)
下：柱列A(北から)
- 24 長原遺跡東南地区遺構出土の遺物
- 25 長原遺跡南・西南地区、瓜破遺跡東南地区
各層と遺構出土の遺物
- 26 瓜破遺跡東南地区各層と遺構出土の遺物
- 27 長原遺跡東南地区各層と遺構出土の遺物
- 28 長原遺跡東南地区各層と遺構出土の遺物
- 29 長原遺跡東南地区遺構出土の遺物
- 30 長原遺跡東南地区斧柄
- 31 長原遺跡東南地区石器遺物
- 32 長原遺跡東南地区石器遺物
- 33 長原遺跡東南地区後期旧石器時代の石器遺物
- 34 長原遺跡東南地区石器遺物
- 35 長原遺跡東南・西南地区、瓜破遺跡東南地区
石鏃
- 36 長原遺跡東南地区、瓜破遺跡東南地区
石鏃・有茎尖頭器

挿 図 目 次

- 図1 土地区画整理事業施工範囲と調査地 4
- 図2 長原遺跡東南地区の調査地 5
- 図3 92-9次調査地地区割り図 6
- 図4 長原遺跡西南・南地区の調査地 9
- 図5 長原遺跡西南地区・瓜破遺跡東南地区の調査地
..... 10
- 図6 南壁断面模式図 12
- 図7 SX903付近、長原9A、12層出土石器遺物実測
図 14
- 図8 長原6-7層下面および8C層上位の2層基底面
検出遺構配置図 15
- 図9 SB402実測図 16
- 図10 SB402出土遺物実測図 16
- 図11 SB701実測図 17
- 図12 SP7191出土遺物実測図 18
- 図13 SP7191遺物出土状況図 18
- 図14 長原9A層上面~9A層内検出遺構配置図 .. 19
- 図15 NR901出土遺物実測図 20
- 図16 NR901出土石器遺物実測図 22
- 図17 SX902、SX903付近出土遺物実測図 24
- 図18 SX902遺物出土状況図 24
- 図19 SX903とその周辺の出土遺物分布図 25
- 図20 LC1301出土石器遺物実測図 27
- 図21 長原9-13AB層出土石器遺物分布図 27
- 図22 LC1301出土石器遺物分布図 28
- 図23 LC1301出土石器遺物実測図 29
- 図24 南壁断面模式図 32
- 図25 長原3、4Bi、4Biii層出土遺物実測図 35
- 図26 包含層とNR1201出土石器遺物実測図 36
- 図27 2区長原9A層出土遺物実測図 37
- 図28 長原12-13A・B層出土石器遺物分布図
..... 38
- 図29 長原13A・B層出土石器遺物実測図 39
- 図30 2区長原14層出土石器遺物分布図 40
- 図31 2区長原14層出土石器遺物実測図 40
- 図32 2区長原2層下面検出集落群配置図 41
- 図33 2区SD201・202・401・402ほか配置図
..... 42
- 図34 1区長原4Biii層上面検出遺構配置図 43
- 図35 1区長原4Bi層上面検出ウシ・ヒトの足跡群
..... 43
- 図36 2区SR401実測図 44
- 図37 1区SD601実測図 45
- 図38 1区SD901・902、SK901実測図 47
- 図39 1区SD901南壁断面実測図 47
- 図40 2区長原9A層上面検出遺構配置図 48

図41	2区NR903出土斧柄実測図	49	図75	南壁断面模式図、長原1層基底面検出遺構配置図	97
図42	1区遺構配置図	50	図76	北区北壁断面実測図	100
図43	南壁断面模式図	54	図77	南区西壁断面模式図	100
図44	長原4Bii、4Biii層出土遺物実測図	56	図78	北区遺構配置図	102
図45	長原4Biii、7層出土遺物実測図	58	図79	北区SD104～106出土遺物実測図	103
図46	調査地東部長原5A層上面検出遺構配置図	59	図80	SD201出土遺物実測図	104
図47	SD501～503、SK501・601、NR01出土遺物実測図	60	図81	南区長原6Ai層上面検出遺構配置図	105
図48	西壁断面模式図	63	図82	調査地位置図	107
図49	北・南区深掘りトレンチ西壁断面実測図、地区割り図	64	図83	長原2層下面検出遺構配置図	108
図50	長原4Bi、4Biii、7層出土遺物実測図	66	図84	SK05出土遺物実測図	109
図51	長原9A、9C、13層出土石器遺物実測図	67	図85	SK06出土遺物実測図	110
図52	長原4Bi層上面検出遺構配置図	68	図86	1・2区南壁断面模式図	113
図53	長原6～7層下面検出遺構配置図	69	図87	3区南壁断面模式図	114
図54	SD701実測図	70	図88	長原2、4層出土遺物実測図	115
図55	SK721出土遺物実測図	70	図89	長原4層出土石器遺物実測図	116
図56	長原12層上面検出遺構配置・出土石器遺物分布図	71	図90	1～3区長原13層上面検出遺構配置図	117
図57	西壁断面模式図	74	図91	1区SB01実測図	118
図58	長原4層出土遺物実測図	75	図92	1区SD03・06・07、2区SD12、3区SD14出土遺物実測図	119
図59	長原4層下面検出遺構配置図	76	図93	1区SD06遺物出土状況図	120
図60	SD07、SK01・03・04、SP01～03出土遺物実測図	77	図94	2区SD12実測図	121
図61	南壁断面実測図	80	図95	3区SD14・15実測図	122
図62	長原2、4Bi層出土遺物実測図	82	図96	3区SD15出土石器遺物実測図	123
図63	長原9Ci、9Ciii層出土石器遺物実測図	82	図97	西壁断面模式図	124
図64	1区長原7A層基底面検出遺構配置図	83	図98	長原2、4、6層出土遺物実測図	125
図65	2区長原7Biii層検出遺構配置図	84	図99	長原4層、SP35出土石器遺物実測図	126
図66	東壁断面模式図	86	図100	長原4層基底面検出遺構配置図	127
図67	長原4B、5、7A層出土遺物実測図	88	図101	SB01実測図	127
図68	1区SK02～04、SE01実測図	89	図102	柱列A実測図	128
図69	SK02～04、SE01出土遺物実測図	90	図103	柱列A、SP41、SK08・46出土遺物実測図	129
図70	2区SE02～04実測図	91	図104	SK08実測図	130
図71	SE02～04実測図	92	図105	SD18遺物出土状況図	131
図72	SE02出土遺物実測図	93	図106	SD18出土遺物実測図	131
図73	SE02出土遺物実測図	94	図107	掘立柱建物群検出状況図	132
図74	SE03・04出土遺物実測図	95	図108	概斧直柄の各部名称	135
			図109	斧柄実測図	138
			図110	斧柄実測図	139

表 目 次

表1 1992年度土地区画整理事業に伴う発掘調査 1	表2 長原遺跡の標準層序1995 2・3
-------------------------------------	----------------------------

写 真 目 次 (本文中)

写真1 SX902(北から) 23	写真6 SD901南壁地層断面(北から) 98
写真2 1区長原4Biii層上面水田址検出状況(北から) 43	写真7 SD201、SR601・602(北から) 105
写真3 SD601全景(南東から) 45	写真8 東壁地層断面(西から) 107
写真4 2区NR903斧柄出土状況(西から) 48	写真9 長原4層出土石器遺物 116
写真5 NR1001(北から) 71	写真10 1区SD06遺物出土状況(南から) 120

第Ⅰ章 調査の経過と概要

第1節 1992年度の発掘調査と報告書の作成

1) 発掘調査(図1)

1992年度に実施した長原・瓜破地区の土地区画整理事業に伴う発掘調査件数は14件あり、発掘総面積は2,983㎡であった。そのうち、長原遺跡東南地区が8件1,776㎡、長原遺跡南地区が2件185㎡、長原遺跡西南地区が3件812㎡、瓜破遺跡東南地区が1件210㎡である。

本年度の発掘調査は1992年4月23日から着手して、1993年2月27日に終了した。各調査とも基本的には現代の盛土および作土を重機で除去したあと、それ以下は人力で掘削して遺構・遺物の検出に努めた。なお、長原遺跡東南地区のように調査深度が3.5mに達するばあいは事前に鋼矢板による土留め支保工を実施した。

一方、調査で検出した遺構・遺物については、写真および実測図で記録して、木製品や鉄製品など保存処理の必要なものについてはそのつと処置した。各調査地の地番および調査担当者・調査面積などは表1に示したとおりである。

表1 1992年度土地区画整理事業に伴う発掘調査

発掘次数	面積	調査地番	担当者	調査期間
長原遺跡東南地区				
NG92-9次	420㎡	平野区長吉川辺3丁目	藤 哲彦	1992年4月23日～1992年9月30日
NG92-10次	630㎡	同 長吉川辺3丁目	田中 清美	1992年4月23日～1993年1月27日
NG92-24次	140㎡	同 長吉川辺3丁目	藤田 幸夫	1992年6月23日～1992年10月9日
NG92-34次	261㎡	同 長吉川辺3丁目	平田 洋司	1992年8月20日～1992年12月18日
NG92-47次	20㎡	同 長吉川辺3丁目	藤田 幸夫	1992年10月12日～1992年11月14日
NG92-51次	69㎡	同 長吉川辺3丁目	田中 清美	1992年10月19日～1992年12月25日
NG92-62次	180㎡	同 長吉川辺3丁目	藤田 幸夫	1992年11月9日～1993年2月10日
NG92-81次	56㎡	同 長吉川辺3丁目	田中 清美	1993年1月28日～1993年2月27日
長原遺跡南地区				
NG92-13次	155㎡	同 長吉川辺1丁目	平田 洋司	1992年5月19日～1992年7月29日
NG92-18次	30㎡	同 長吉川辺2丁目	藤田 幸夫	1992年6月2日～1992年6月25日
長原遺跡西南地区				
NG92-11次	520㎡	同 瓜破東8丁目	高橋 工	1992年5月13日～1992年7月21日
NG92-42次	65㎡	同 長吉長原西4丁目	高橋 工	1992年9月24日～1992年10月6日
NG92-49次	227㎡	同 長吉長原西2丁目	高橋 工	1992年7月22日～1992年9月12日
瓜破遺跡東南地区				
NG92-46次	210㎡	同 瓜破東8丁目	高橋 工	1992年10月7日～1993年1月12日

表2 長原遺跡の標準層序1995

層序	層相	層厚 (cm)	自然現象 自然遺物はか	おもな遺構・遺物	C14年代	時代
上層部						近代・現代
NG0層	現代変土	—				近代・現代
NG1層	現代変土	15-25		1 小溝・溝・溝 瓦器 (II~IV期)	(400)	近世
NG2層	含細砂質灰・黄褐色シルト質砂	6-34		瓦器・土器・土器・土器など 瓦器 (IV~V期)		室町
NG3層	含細砂質灰・灰色粘土質シルト	12-20	暗色帯	1 小溝・溝・溝・溝 瓦器 (II~IV期)	(800)	鎌倉
NG4A層	含細砂質灰・灰色粘土質シルト	8-15		瓦器 (II~IV期)		平安
NG4B層	暗灰色シルト	av.20		瓦器 (II~IV期)		平安
NG4C層	暗灰色シルト	av.5		瓦器 (II~IV期)		平安
NG4D層	暗灰色シルト	av.15		瓦器 (II~IV期)		平安
NG4E層	暗灰色シルト	av.20		瓦器 (II~IV期)		平安
NG5A層	灰色砂質シルト	10-40		瓦器 (II~IV期)	(1200)	奈良
NG5B層	灰色砂質シルト	2-8		瓦器 (II~IV期)		奈良
NG6A層	暗灰色シルト	av.20		瓦器 (II~IV期)	(1300)	奈良
NG6B層	暗灰色シルト	av.10		瓦器 (II~IV期)		奈良
NG6C層	暗灰色シルト	av.15		瓦器 (II~IV期)		奈良
NG7A層	暗灰色シルト	av.10		瓦器 (II~IV期)	(1400)	奈良
NG7B層	暗灰色シルト	av.15		瓦器 (II~IV期)		奈良
NG8A層	暗灰色シルト	av.35		瓦器 (II~IV期)	(1600)	奈良
NG8B層	暗灰色シルト	av.20		瓦器 (II~IV期)		奈良
NG8C層	暗灰色シルト	av.25		瓦器 (II~IV期)	(1700)	奈良
NG9A層	暗灰色シルト	av.15		瓦器 (II~IV期)	(2000)	奈良
NG9B層	暗灰色シルト	av.10		瓦器 (II~IV期)		奈良
NG9C層	暗灰色シルト	3-15		瓦器 (II~IV期)		奈良

地層名	地層番号	地層厚	地層色	地層構成	地層年代	地層位置	地層説明	地層年代	地層位置	地層説明
上 部 地 層	NG98層	1	灰オリーブ～黒褐色砂礫	灰オリーブ～黒褐色砂礫	500	1	地内第Ⅰ期式・礫片	2500	1	地内第Ⅰ期式・礫片
	NG99層	2	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	10-40	2	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	2	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG100層	3	灰オリーブ色シルト質粘土	灰オリーブ色シルト質粘土	3-14	3	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	3	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG101層	4	暗灰色～黒褐色シルト質粘土	暗灰色～黒褐色シルト質粘土	8-50	4	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	4	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG102層	5	灰オリーブ色シルト質粘土・砂	灰オリーブ色シルト質粘土・砂	10-35	5	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	5	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG103層	6	黒褐色～暗灰色シルト質粘土	黒褐色～暗灰色シルト質粘土	2-8	6	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	6	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG104層	7	灰褐色シルト質粘土・砂礫	灰褐色シルト質粘土・砂礫	2-10	7	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	7	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG105層	8	灰褐色シルト質粘土	灰褐色シルト質粘土	7-25	8	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	8	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG106層	9	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	9	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	9	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG107層	10	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	10	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	10	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
中 部 地 層	NG108層	11	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	11	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	11	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG109層	12	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	12	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	12	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG110層	13	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	13	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	13	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG111層	14	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	14	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	14	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG112層	15	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	15	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	15	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG113層	16	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	16	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	16	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG114層	17	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	17	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	17	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG115層	18	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	18	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	18	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG116層	19	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	19	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	19	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG117層	20	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	20	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	20	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
下 部 地 層	NG118層	21	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	21	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	21	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG119層	22	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	22	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	22	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG120層	23	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	23	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	23	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG121層	24	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	24	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	24	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG122層	25	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	25	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	25	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG123層	26	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	26	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	26	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG124層	27	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	27	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	27	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG125層	28	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	28	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	28	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG126層	29	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	29	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	29	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片
	NG127層	30	暗灰色シルト質粘土	暗灰色シルト質粘土	50-80	30	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片	2500	30	地内第Ⅰ期式・石炭の鱗・片

○: 炭 土 土 層

—: 上部炭土層 1: 下部炭土層 2: 中部炭土層

発掘調査次数は長原遺跡の略号「NG」のあとに調査年度と開始順の番号を付けているが、本報告書では土地区画整理事業に伴う調査についてはすべて「NG」を冠するため、これを省略している。なお、瓜破遺跡東南地区は遺跡地図の上では瓜破遺跡の範囲内に含まれるが、一連の土地区画整理事業に伴うため、「NG」を冠しており、また、本報告で記述した区画整理事業以外の長原・瓜破遺跡の調査については遺跡略号を付けている。

2) 報告書の作成

本報告書の作成に伴う図面・写真をはじめ遺物の整理作業は1997年度に実施した。これらの業務に関しては、各調査担当者が調査終了後に作成した資料を基礎にして1997年度に主として田中清美が当たった。なお、本報告では各地区の層序および遺構の層準については可能な限り最新の長原遺跡の標準層序[趙哲済1995](表2)に対応させて記述した。

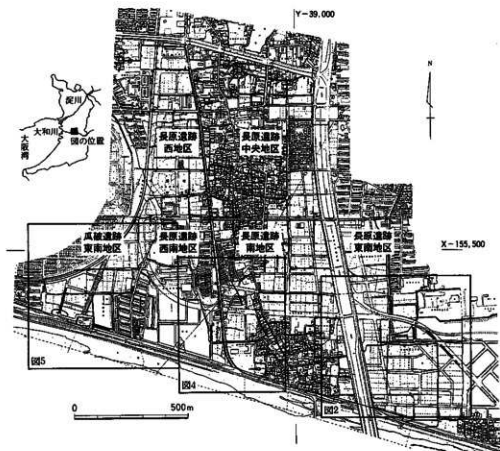


図1 土地区画整理事業施行範囲と調査地

第2節 調査の経過と概要

長原・瓜破遺跡の地区の区分は、[大阪市文化財協会1990]において6区分されており、本報告でも基本的にはこれに従い、第Ⅱ章以下は調査箇所を地区ごとに分けて記述する。

1) 長原遺跡東南地区(92-9、10、24、34、47、51、62、81)(図2)

本調査地域は1978年の地下鉄谷町線延長工事に伴う発掘調査(NG14次)以来、旧石器時代から近世にいたる複合遺跡として、継続して調査が実施されてきた。1981年に始まる長原・瓜破地区土地区画整理事業の事前調査は、1985年から当地域でも着手され、後期旧石

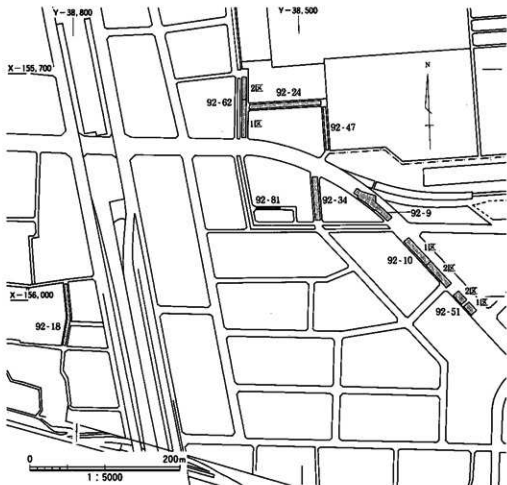


図2 長原遺跡東南地区の調査地(92-18次調査地は長原遺跡南地区)

器時代の石器製作址、縄文時代中期の土器、同晩期終末～弥生時代前期の生活址、弥生時代前～中期初頭の木田址、同中期・後期の方形周溝墓、古墳時代の方墳群、飛鳥時代の建物、中世の木田址など注目すべき遺構が発掘されており、多様な埋蔵文化財の包蔵地として周知されるにいたっている。

i) 92-9次調査

本調査は、市道川辺町線の拡幅予定地の長さ約60m、幅7mの範囲で実施した。調査地は当地域の標準層序が提案された1980年度のNG80-3次E調査地と一部重なっており、また、NG14、87-36、89-23、91-21次の調査がそれぞれ隣接して行われている。各調査の成果により、本調査地の地層と遺構・遺物の分布状況とその深度が把握でき、深くなることが予測できたので、調査を開始するに当たっては、全周に鋼矢板を打設し、また、NG80-3次E調査地と重なる部分には、軟弱な埋戻し土対策として、深度が深くなった期間途中で支保工(切梁工事)を行い、安全確保に努めた。調査を進めるに当たって、NG80-3次E調査地と重なった部分(約170㎡)を中央区とし、新規調査の東側約210㎡を東区、西側約40㎡を西区と便宜的に区分し、さらに、東区は東端から5m間隔でA、B…G区の小区を設定した(図3)。機械掘削後、東区と西区は長原2層基底面から下位を、中央区は未調査であった長原12A層から下位をそれぞれ長原15層まで人力掘削し、遺構・遺物の検出を行った。また、本調査と並行して実施された92-10次調査とは、相互に検討を行い、調査精度の向上に努めた。なお、本調査地の地表下4.5m以深には、シールド工法により下水道が既設されていたので、地表下3.5m以深の長原15・16層の旧石器調査はできなかった。

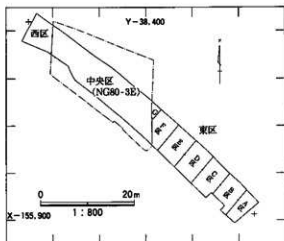


図3 92-9次調査地区割り図

た。本調査では、各層ごとに遺構・遺物を調査し、当地域における従来の考古学的知見を補強する多数の資料を得た。

1980年に八尾事業団の用地で始まった市道川辺町線の発掘調査は、長原遺跡の指標となる数々の層位学的・考古学的成果を蓄積し、今年度で終了した。

ii) 92-10次調査

調査地は92-9次調査地の東側

に位置しており、全長が86mと長いので、西側を1区、東側を2区に便宜的に区分し、さらに、西側から5m間隔に小区画を設けて発掘調査を実施した。また、川辺町線に接するため、南車道側に鋼矢板を打設して安全確保に努めた。

iii) 92-24次調査

調査地は縄文時代晩期終末から弥生時代前期前半の墓地をはじめ、飛鳥時代および平安時代の水田址や集落址が検出されたNG81-10、82-6次調査地の南側に位置している。東西方向の道路予定地内の全域を調査の対象としたが、当該地の西半分を駐車場の進入路として確保する事態が生じたため、長さ25m、幅4mについてのみトレンチ調査を実施し、鋼矢板を打設して安全確保に努めた。

iv) 92-34次調査

調査地は後期旧石器時代および縄文時代の石器製作に関わる場が検出されたNG91-20・21次調査地の南側に位置する長さ57m、幅5mの南北道路の予定地である。また、当該地の南西側には長原東南地域で最初にナウマンゾウの足跡群をはじめ、化石林の一部が検出されたNG91-1次調査地がある。本調査でもひとりの調査を終えたあと、旧人段階の人類の生活痕跡を求めるため、3箇所まで深掘りを行って、長原16A層上面の精査を試みたが、調査地のほぼ全域において長原15層に相当する堆積物によって削込まれていることが判明したため、今回はトレンチ調査に止めた。なお、調査地内には10mおきに地区杭を打ち、北よりS1～S5の記号を与え、遺物はこの杭間ごとに取上げた。

v) 92-47次調査

調査地は92-24次調査地の東端部から南に折れる南北道路の予定地であったが、南半分に面する工場および駐車場の進入路を確保する必要が生じたため、長さ10m、幅2mについてのみ調査を実施した。調査の結果、長原4層の下面で土壌が確認された以外は、調査地のほぼ全体が92-24次調査地から続く流路内に当っており、さしたる遺構・遺物は検出されなかった。

vi) 92-51次調査

調査地は92-9次調査地の東側、八尾市との市境に位置しており、東接する八尾市の八尾南遺跡では弥生時代終末から古墳時代前期にかけての集落址や水田址をはじめ、後期旧石器時代の石器製作の場などが検出されている。川辺町線の南側車道に面するほか、当該地の中央に南北方向の旧市境の擁壁があったため、これを境に調査地を長さ7m、幅5mの1区と、長さ7m、幅4.5mの2区に分け、周囲に鋼矢板を打設して調査を実施した。

vii)92-62次調査

調査地は92-24次調査地の西側で、北に流れる大正川の東岸に接する南北道路予定地である。調査着手時は長さ30m、幅6mが調査の対象地であったが、東面する水田への進入路を確保する必要が生じたため、1・2区と幅を幾分縮小して調査を実施し、調査地の周囲には鋼矢板を打設して安全確保に努めた。調査の結果、一部において長原式土器を包含する地層が確認されたが、調査地の大半が大正川の拡幅時の攪乱を受けており、全体に残りは悪かった。

viii)92-81次調査

調査地はNG91-1次調査地の北側に位置しており、周辺部の調査では江戸時代から飛鳥時代の水田址や古墳時代中期後半の方墳をはじめ、旧石器時代の石器製作に関わる場などが検出されている。しかし、調査地の周辺は地下鉄谷町線建設時に相前後して大正川の整備に伴う工事が行われていたため、調査の対象とした各時期の地層の残りは悪く、弥生時代前期にさかのぼる溝が検出されたにすぎない。

2)長原遺跡南地区(92-13、18)(図2・4)

i)92-13次調査

調査地は長原遺跡の南部に位置している。この地域ではこれまでに区画整理事業の施行に伴う調査が継続して実施されており、長原古墳群の南群の中心部に近いこと、飛鳥時代から奈良時代にかけての水田址が良好な状態で埋没していることなどが明らかになっている。また、周辺では水田址に伴う用水路が検出されているほか、開削および整備時期が飛鳥時代にさかのぼり、1704(宝永元)年の大和川の付替えまで北流していた東除川に近接している。当初は南北道路の全域が調査の対象であったが、近隣の住宅・工場の進入路の確保の必要が生じたため、北区30mと南区10mに2分して調査を実施した。また、北区については調査終了後にシールド工法による下水管の工事が予定されており、ここでは一部の遺構の深さを確認するための深掘りを実施した以外は、調査を地表面下2.5m以内にとどめた。

ii)92-18次調査

調査地は長原遺跡の南端近くに位置しており、当地域、特に北部では古墳時代中期の方墳群が検出されている。今回の調査は、調査の対象となった南北道路のうち、現道および水田の排水施設を確保する必要が生じたため、西南部の約30m²に限って実施した。現代の作土の以下に長原遺跡の標準層序に対応する各地層が確認されたが、江戸時代の遺構が検

出されたのみで、さしたる遺物も出土しなかった。

3) 長原遺跡西南地区・瓜破遺跡東南地区 (92-11・49、42、46)

(図4・5)

i) 92-11・49次調査
調査地は長原遺跡の西南隅に位置し、旧石器時代から江戸時代にいたる複合遺跡である瓜破遺跡に隣接している。また、飛鳥時代の大規模な掘立柱建物群が検出されたUR86-11次調査地の東南東約250mで、瓜破新池の南に当たる。

調査の対象は大和川沿いの東西道路で、幅6.5m、長さ80mの92-11次調査地と幅3.5m、長さ65m

の92-49次調査地に2分して、前者から調査を実施した。92-11次調査地については、40mずつに2分割して、西から1・2区とし、本調査の終了のあと、92-49次調査に着手した。調査の手順からいえば本来は個別に報告すべきであろうが、調査地が相接しているため、本報告では92-49次調査を3区とし一連の調査として記述した。

ii) 92-42次調査

調査地は古墳時代中期の一ヶ塚古墳の南側、馬池の東縁に位置する長さ70m、幅7mの南北道路の予定地である。調査に先立って行った試掘調査の結果、調査地の西半分では地表面下3m近くまで現代の盛土であることが確認されたため、北東部の長さ18.5m、幅3.5mについてののみ調査を実施した。調査の結果、地層の状況が試掘地区と同様であり、さら

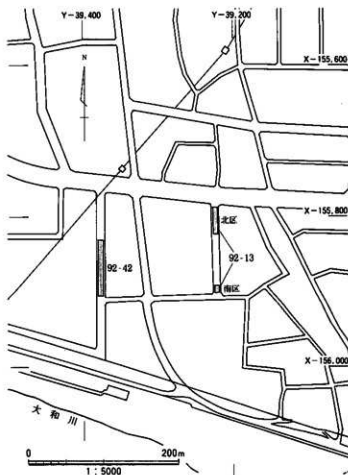


図4 長原遺跡西南・南地区の調査地
(南地区の92-18次調査地は図2に掲載)

に調査を行うことは危険と判断されたため、地層の柱状図などの記録を作成して調査を終えた。調査地は馬池の東縁部に当るものと思われる。ここでは報告を省略する。

iii) 92-46次調査

調査地は瓜破遺跡の南で、長原遺跡と瓜破遺跡が相接する地点に位置する長さ46m、幅7mの南北道路である。飛鳥時代の大規模な掘立柱建物群が検出されたUR86-11次調査地に西接しており、調査地東側のUR91-22次、北側のNG87-65次調査でも飛鳥時代の遺構・遺物が確認されていることから当該地も周辺部と同様な遺構群が検出されるものと予想された。調査は現道の通行を維持する必要から東西に2分割して実施したが、東西に位置する隣地の出入り口部分については調査を行わなかった。

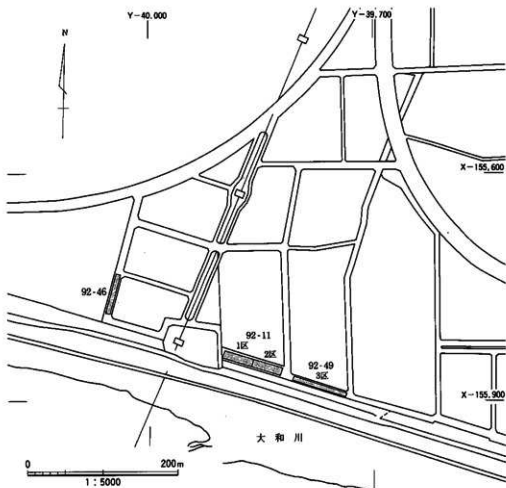


図5 長原遺跡西南地区・瓜破遺跡東南地区の調査地

第Ⅱ章 長原遺跡東南地区の調査

第1節 92-9次調査

1) 層序

本調査では、長原遺跡の標準層序1995(表2)のうち、長原1、2、4A、4Bi、4Biii、6-7、8Ci、8Cii、9A、9B、9C、10・11、12、12/13、13AB、13C、14、15層が識別された。以下、下位より記載する(図6、図版1)。

長原15層は下部が水成の緑灰色砂礫であり、上方で細粒化して灰オリーブ色粘土に移化した。層厚は170cm以上あり、下限は未確認である。

長原14層と長原13C層はともに西区で識別された。長原14層は水成の青灰色粗粒砂質シルト～シルトからなり、下位層を一部剝削して、TP+8.2m以下に層厚10～30cmで分布した。

その上位に最大層厚60cmで整合に重なる長原13C層は、明黄褐～灰色シルト質粘土からなり、中部と下部に層厚5～10cmのオリーブ黒色シルト質粘土薄層を挟んでいた。また、2薄層は著しく波うつ層内異常堆積構造を示した。従来の長原13C層の知見に対して、本層の層相は新知見であり、また層厚は最大である。

中央・東区では長原14層と長原13C層は区別しがたく、また、長原15層との境界も漸移的で不明瞭な粘土質シルトに側方変化した。

長原13AB層はほぼ全域に分布した。長原13AB層はやや暗い黄褐色粘土質シルトからなり、層厚12cm以下で下位層上面の浅い窪みの下部に分布した。ワンカケ法による観察では、扁平型火山ガラスと角閃石が多量に認められたが、標準層序のA・Bの細分はできなかった。

長原12層はほぼ全域に断続的に分布した。やや暗いオリーブ褐色シルト質粘土～シルトで、層厚は12cm以下であった。縄文時代中期以前の石鏃が1点出土した。

東区D、E、F区付近では長原13AB層と長原12層の間は漸移的で、地層の境界は認められなかったが、約10cmの幅で上・下の層相に共通するオリーブ褐色粘土質シルト～シルトの部分があり、ワンカケ法によって扁平型火山ガラスの中に褐色透明ガラスが比較的多

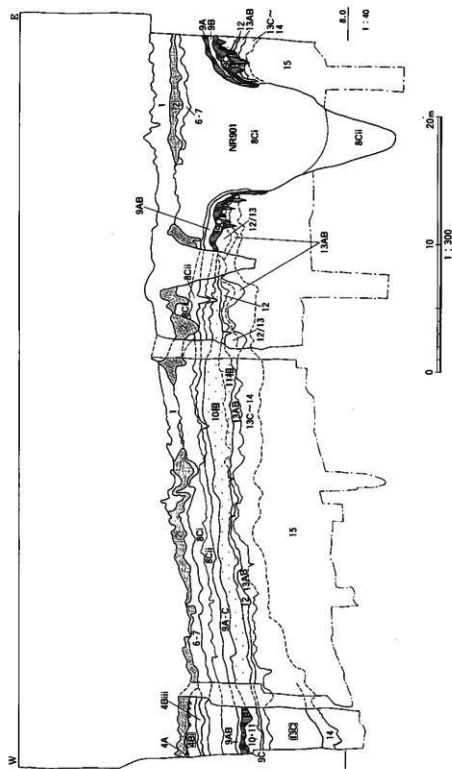


图 6 南壁断面模式图

く認められた。標準層序の長原12/13層漸移帯に相当する。他の地区では長原13AB層と長原12層は区別しがたく、また、下位層との境界も漸移的で不明瞭な粘土質シルト～シルトに側方変化した。A～E区にかけての長原13AB～12層から、旧石器時代の石器製作址LC1301に係わる遺物を含む18点のサヌカイト(サヌキトイド)製石器遺物が出土した。

長原11・10層は下位層の分布がTP+9.3m以下の、D・E区以外の地区に分布した。下部の灰黄褐色砂質シルト(11相)と上部のにおい黄褐色砂礫～シルト質砂(10相)とからなり、全層厚は中央区東部で最大30cmであった(註1)。両相はF区～中央区東部で明瞭な境界面があり、長原11層と長原10層として識別できた。

長原9C層はほぼ全域に分布した。黒褐色粘土質シルト～砂質シルトからなり、層厚は5～10cmであった。下限は下位層と漸移し、不明瞭であった。

長原9B～9A層はほぼ全域に分布し、A・B区で明瞭に識別できた。長原9B層はやや淡い黒褐色粘土質シルトで、層厚は8cm以下であった。長原9A層は黒色シルト質粘土からなり、層厚は4cm以下であった。他の地区では長原9A層と長原9B層とは区別しがたく、黒色粘土質シルト～シルト質粘土からなり、層厚5cm以下で分布した。

東区では、長原9B層中に弥生土器と盤状石が重なりあった遺構SX902が、長原9A層上面には上位層に埋積された流路NR901が検出された。

この地区の長原9B～9A層からは、多数の弥生土器片と、サヌカイト製石鏃2点、同剥片2点、砂岩製凹み石1点、サヌカイト細片1点(NR901肩部)、安山岩の石皿2点(SX902)、結晶片岩、焼土塊、長原式土器片(長原9B層)などが出土した。

長原8Cii～8Ci層は全域に分布した。長原8Cii層は水成のオリーブ褐～暗灰黄色粘土質シルトで、層厚は20cm以下であった。NR901内では細礫～中礫質砂礫に側方変化した、弥生土器、砂岩の叩き石1点・磨り石2点、安山岩の石皿1点・加工痕のある礫2点、サヌカイト製削器1点・石核2点・剥片2点と洗浄・篩別によって抽出した微細な剥片78点などを伴って、この下半部を埋積していた。また、NR901内の本層上面付近の粘土質シルトのラミナ上面には、偶蹄類の足跡が観察された。

長原8Ci層は水成の褐灰～灰オリーブ色シルト質粗粒砂が主体で、平均層厚は15cmあり、NR901内では細礫～中礫を多量に含有して厚く、この上半部を埋積していた。

A～C・中央・西区には、長原6層と長原7層とを区別しがたい地層(長原6～7層)が分布した。黒～黒褐色砂質シルト～シルト質粗粒砂で、層厚は8cm以下である。東区では本層構成物を埋土とする掘立柱建物SB701と、土器埋納ピット、その他多数のピット、土

墳が、土師器や須恵器を伴って検出された。

長原4Biii～4A層は西区で識別できた。長原4Biii層は暗オリーブ褐色シルト質粘土であり、層厚は5cm以下であった。土師器、黒色土器などが包含されていた。

長原4Bi層は暗灰黄色シルト質粘土からなる水田作土層で、層厚は8cm以下であった。瓦器、土師器、黒色土器が包含されていた。

長原4A層は水成の灰色粗粒砂で、層厚は3cm以下であった。主として長原4Bi層上面の水田面上の窪み内に分布していた。

長原4層準の遺構には、B・C区の長原6～7層上位の長原2層基底面で検出された掘立柱建物SB402がある。

長原2層はほぼ全域に分布した。灰オリーブ色シルト質粗粒砂からなる作土層で、層厚は20cm以下であった。この層準の遺構には土壌や水路があった。

長原1層は区画整理以前の旧水田の作土層である。

2) 各層出土の遺物

i) 長原9A層出土遺物

石鏃(図7、図版35) AC218はF区の長原9A層上面で出土した凸基無茎式石鏃である。切先および基部の先は使用時に欠損したと思われる。全体の形が木葉形を呈しておりG類に属する。残存する最大長43.5mm、重さ2.33gである。

ii) 長原12～13AB層出土遺物

剥片(図版32) A～B区から出土した3点のサヌカイト製の剥片である(図21)。比較的まとまって出土したが、母岩が異なるために、石器製作址のような集中部かどうかはわからないため、包含層の出土遺物として扱う。これらの剥片との関連は明らかではないが、周辺からは7点のチャートの亜円・中礫が出土している。

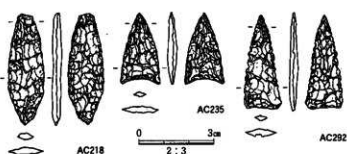


図7 SX903付近、長原9A、12層出土石器遺物実測図

AC286は流理構造がめだつ剥離面打面の剥片である。先端部はヒンジしている。表面には主剥離と斜交した剥離面があり、1側縁に原面を残す。最大長46mm、最大幅38mm、最大厚13

mmである。AC287は肌理の細かい粉砕打面の剥片である。表面は主剥離と斜交した2面の剥離面で構成される。最大長26mm、最大幅26mm、最大厚4mmである。AC288は原面打面の横形剥片である。片翼は折れている。表面は主剥離と逆方向の比較的大きな剥離面である。最大長16mm、最大幅31mm、最大厚4mmである。

石鏃(図7、図版36) AC292はF区の長原12層から出土した平基無茎式石鏃である。完形で、直線的な作用部は鋸齒縁となる。全体に風化が進んでいるが、E-1類に属するものと考えられる。最大長36.8mm、重さ1.37gである。

3) 遺構とその遺物

i) 飛鳥～平安時代の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

SB402(図8～10、図版1・2・24)

B・C区に位置し、桁行がほぼ南北に沿った東西3間以上×南北2間の長方形の建物で、長原6～7層上位の長原2層基底面から検出された。柱間寸法は東西1.9m前後、南北1.75m前後で、5.7m以上×3.5mの広さがあった。柱穴は長径0.25～0.3mの不整形な円ないし隅丸方形で、柱痕跡は直径0.16m前後であった。また、柱穴の深さは最

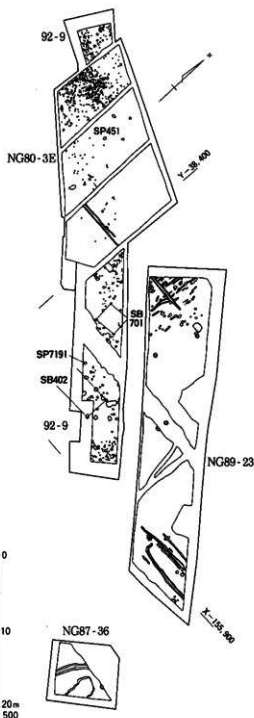


図8 長原6～7層下面および8C層上位の2層基底面検出遺構配置図

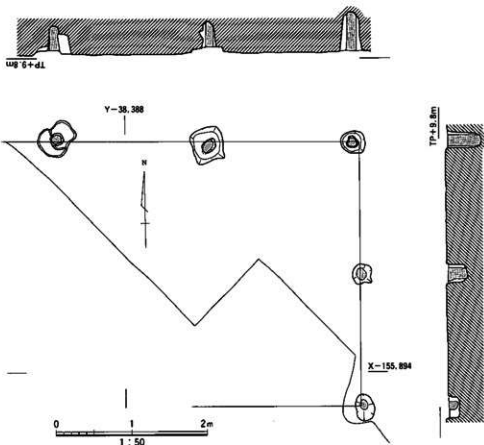


図9 SB402実測図

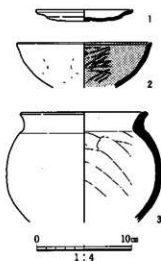


図10 SB402出土遺物実測図

大で0.32m残り、柱穴底の水準はTP+9.38～9.48mであった。検出した5柱痕跡とも、自重のためか、あるいは、たたき込まれたために沈み込んでおり、東北隅柱は最大で0.27m沈み込んでいた。

東北・東南両隅の柱痕跡から黒色土器碗、土師器甕・小皿、また、東北隅からは安山岩角礫の根石も1点出土した。

1は口径10.4cm、器高1.2cmで、「て」字状口縁を有する土師器小皿である。2は口径14.4cmの黒色土器A類碗である。口縁端部は内傾しており、内面にやや粗い暗文が見られる。3は口径13.6cmの土師器甕である。口縁部はわずかに開いており、内面を左上がりのナデで調整している。以上の土器

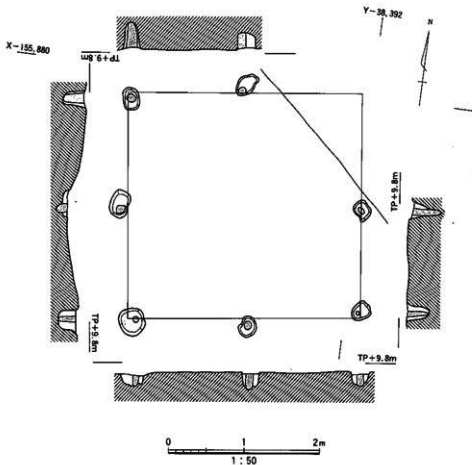


図11 SB701実測図

類は11世紀中葉に属するものとみられることから、SB402は平安時代中ごろに廃絶したと推定される。

SB701(図8・11、図版1・2) E区に位置し、ほぼ方位に平行する2間×2間、一辺が3m弱の正方形に近い建物で、長原6～7層内で検出された。柱間寸法は1.45m前後で、中柱は4本ともやや外側に位置した。柱穴は長径0.15～0.27mの不整形な円ないし楕円形で、柱痕跡は直径0.07～0.14mであった。また、柱穴の深さは最大で0.3m残り、柱穴底の水準はTP+9.44～9.63mであった。東・西中柱と南辺の3柱は、自重のために沈み込んでおり、東中柱は最大で0.25m沈み込んでいた。

柱穴から遺物が出土しなかったため、SB701の詳細な年代は不明であるが、検出層準から、古墳～飛鳥時代のある時期と推定される。なお、近接するNG14次調査地では同層準

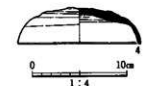


図12 SP7191出土遺物実測図

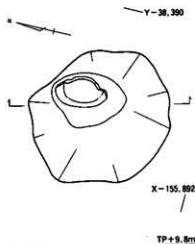


図13 SP7191遺物出土状況図

期前半の遺物を包含することが明らかとなっており、本調査地でも多数の弥生土器、石器遺物などが出土した。そのうち、後者はいずれもC～E区のNR901(西川辺川)を埋積した自然堆積層(長原8Cii層)から出土したものである。

西川辺川は当調査地北部では堤が築かれ、長原9A'層の水田への導水路が取付けられて

で同様の掘立柱建物群が検出されており、飛鳥時代と推定されている。

(2)土器埋納ピット

SP7191(図8・12・13、図版1・24) 須恵器杯蓋が埋納された長径0.38m、短径0.34mの不整形な楕円形の柱穴であり、D区の長原6～7層内で検出された。深さは0.25m残っていた。柱痕跡は直径0.16mあり、須恵器杯蓋は柱痕跡内に入っていた。

4は口径13.2cm、器高3.8cmの須恵器杯蓋で、口縁部と天井部の境界は丸い。口縁端部はわずかに内傾しており、天井部はへら切り未調整である。TK209型に属する。なお、中央区ではNG80～3次E区調査時にも土器埋納ピットSP451を検出しており、ほぼ同時期の土師器杯が埋納されていた。

ii) 弥生時代前期前半の遺構と遺物

(1) 流路

NR901「西川辺川」(図14・15、図版3・24) B～E区を南南東～北北西方向に流下した幅約6m、深さ約2mの自然流路で、長原9A層上面で検出された。NG89～23次調査地のSD801とNG80～3次E調査地のSD901に連続する。この自然流路を西川辺川と呼んでいる。また、西川辺川の東約200mにあり、NG82～41次調査で最初に検出され、長原9A～9B層準に形成された自然流路を東川辺川と呼んでいる。東・西川辺川はこれまでの調査で、当地域を蛇行しながら南から北に流下し、長原式土器および弥生時代前期前半の遺物を包含することが明らかとなっており、本調査地でも多数の弥生土器、石器遺物などが出土した。そのうち、後者はいずれもC～E区のNR901(西川辺川)を埋積した自然堆積層(長原8Cii層)から出土したものである。

おり、また、南部では杭が打たれているなど、人為による改造の手が加えられた流路である。西川辺川は長原8Ci～8Cii層堆積期に側方と下方が侵食されたため、当時の河川地形は損われているが、NG89-48次調査地の断面観察からは、当時は幅2m、深さ1m程度の小さな河川であったと推定されている。

5・6は口縁端部に突帯文を有する長原式土器深鉢である。ともに突帯のキザミメはD字形で、色調は灰黄色を呈する。胎土中に多量の角閃石・雲母を含むいわゆる生駒西麓地域の土器である。

7～16は弥生土器で、7は細いヘラ描沈線文を施しており、壺の頸部下端的の破片と思われる。8は壺の頸部および体部の破片で、最大径は体部の中ほどにある。頸部の下端と体部の境には4本のヘラ描沈線文が施された幅の広い削り出し突帯文がある。削り出し突帯文は上下をヘラ先で押さえるように施されており、突帯の高さは通常のものより低い。体部の器面の調整は外面の下半が横方向のヘラミガキで、上半はヘラミガキのあと粗いナデを施しており、内面は全体に横方向にナデている。9・12は壺の底部と思われるものである。9は底径5.8cmで、裏面は浅く凹んでおり、外面にユビオサエが見られる。12は底径8.8cmで、裏面はわずかに

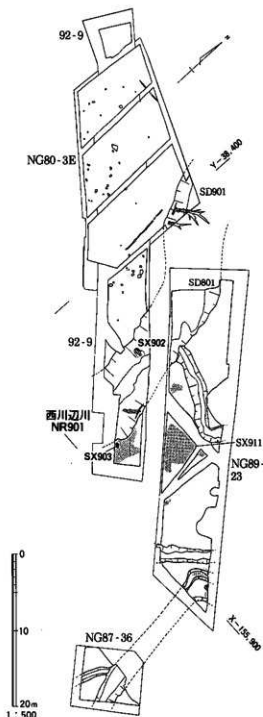


図14 長原9A層上面～9A層内検出遺構配置図
(網掛け部分は遺物密集範囲)

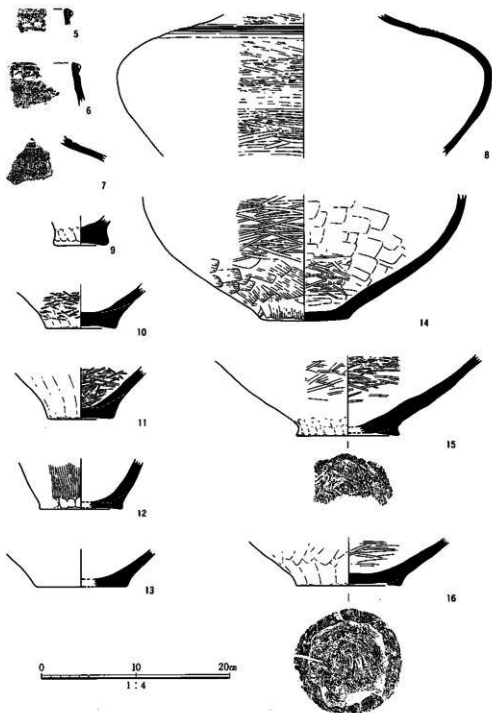


圖15 NR901出土遺物實測圖

凹む。器表面をやや粗いタテハケで、下端をユビオサエで整えている。

10・11・13・15・16は底径7.0～11.2cmの壺の底部である。器面の調整は10は外面を細かいヘラミガキで、11は内面をタテハケのあと、細かいヘラミガキで整えている。14は底径9.6cmの壺の底部から体部の破片で、器面の調整は外面が粗い左上がりのハケのあと横方向のヘラミガキ、内面は横方向のナデのあと底部の近くをヘラミガキで整えている。15は体部の下端に粘土紐をユビオサエで貼付けたあと、底部の裏面にヘラケズリを加えて上げ底状に形成している。器面の調整は表裏面とも横方向のヘラミガキである。16も15と同様に、体部の下端に粘土紐を貼付けて底部を形成しており、裏面は輪台状を呈する。器面の調整は表面が粗いナデで、内面はヘラミガキである。

以上の弥生土器の色調は7.5Y8/1～8/2灰白色を基調としており、胎土中に角閃石を含む9～13と、角閃石を含まない7・8・14～16がある。7～16は弥生時代前期の前半に属するものである。

削器(図16、図版31) AC215は縦に長い剥片素材の凸型削器である。表面の大半は四周から打撃された剥離面によって構成される。表面右側縁は主剥離面形成後に裏面最大の剥離面になんらかの打撃が加わった際に剥離された横形の剥離面であり、主剥離面の基部も同時に剥離されて、素材剥片の打面付近を欠損している。刃部は裏面右縁に表面からの細部調整によってつくられている。深形薄形の連続した細部調整である。最大長77mm、最大幅45mm、最大厚15mmであり、石材は後述するLC1301の母岩Aとすこぶるよく似ている。

なお、本資料はD～E区から出土しており、本資料の形態・細部調整・母岩の特徴および出土位置は、出土層準が示す年代とは異なり、LC1301の石器群と関連があるものと考えられる。

石核(図16、図版31) AC206はC～D区から出土した両極打法を用いて剥片を剥離した古い石核素材の石核である。実測図上端からの剥離面に不規則な稜や波状リングが顕著であることから、上端側が台石上にあつて下端側から打撃されたのかもしれない。なお、素材の古い石核は表面および4周に原面をもち、実測図左側縁と下縁に比較的大きな剥片が取られた剥離面を残している。この古い剥離面の風化状況は、後述するLC1301から出土したAC290の剥離面の特徴(母岩B)とすこぶるよく似ており、出土位置も近いことから、古い石核が弥生時代に再利用された可能性がある。

E区から出土したAC203は、写真右面が主として細かく剥離されたあと、写真左面が剥離され、最後の打撃は左面左下にあつて垂直割れを起している。右面は長軸の両側からの

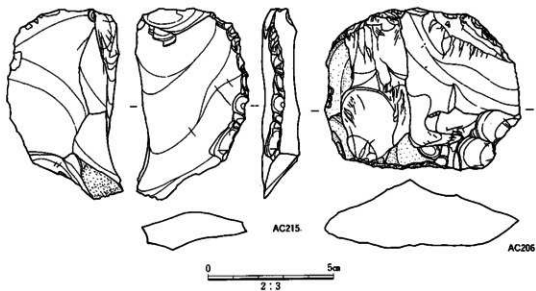
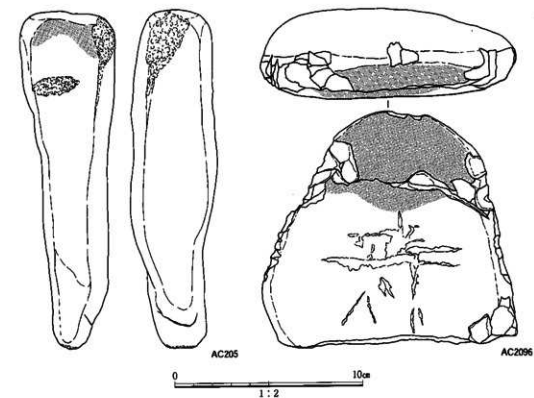


圖16 NR901出土石器遺物實測圖

複数の剥離によって長軸に平行な稜ができています。比較的大型の両面調整石器が意図されていたのかもしれない。単純最大長46mm、単純最大幅33mm、単純最大厚16mmである。

磨り石(図16、図版31) AC205はE区から出土した砂岩の亜円礫を用いた棒状の磨り石であり、握ると手によくなじむ。実測図左の幅広い上端部に磨り痕がある。磨り痕の直下および右上端、下端に打痕があり、叩き石としても使用されている。単純最大長17.5cm、単純最大幅4.9cm、単純最大厚4.5cmで、重さは507gである。

AC209bはC-D区から出土した砂岩の扁平な亜円礫を用いた磨り石である。実測図の上半部に顕著な磨り痕(網掛け部)があるが、下端を除くほぼ全面が滑らかな面をもっており、磨り面として用いられたようである。両縁には打痕および打撃による欠けがあり、扁平な礫を縦にして叩き石としても使用されている。また、平坦な2面中央には打痕と削痕があり、堅果類などの粉砕に用いられたのであろう。単純最大長14.4cm、単純最大幅14.1cm、単純最大厚4.4cmで、重さは1,021gである。

石皿(図版32) AC209aはC-D区から出土した鉄平石型普通輝石安山岩質の亜角礫を用いた石皿である。平坦な一面の中央に顕著な磨り痕がある。裏面の中央にも滑らかな面があり、磨り面として使用された可能性がある。単純最大長24cm、単純最大幅21cm、単純最大厚4cmである。

iii) 弥生時代前期～中期初頭の遺構と遺物

(1) 用途不明遺構

SX902(図14・17・18、写真1、図版24) D区のNR901(西川辺川)の左岸、長原9B層内で検出した東西方向に長軸をもつ長さ1.1m以上、幅約0.8m、深さ約0.4mの窪みであった。弥生時代前期前半の甕や壺の破片と板状の安山岩礫が折り重なるようにして出土したが、東端は西川辺川を最終的に埋め立てた長原8C層によって削られていた。遺構の用途はわからない。

17は口径20.9cmの弥生土器甕で、



写真1 SX902(北から)

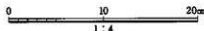
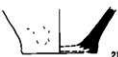
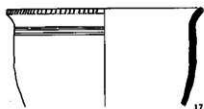


図17 SX902、SX903付近出土土遺物実測図

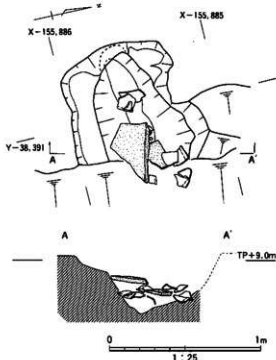


図18 SX902遺物出土状況図

口縁部は頸部から緩やかに開く。口縁端部をわずかに面取っており、外端面にキザミメを施している。頸部の下端に2本のヘラ描沈線文が巡る。器面の調整は内外面とも左上がりのナデである。口縁部を横方向にナデ整えており、器表面のほぼ全体に煤が付着している。弥生時代前期の前半に属する。

石皿(図版32) AC234a・bはともに板状節理の発達した熔岩体から採取されたとみられる鉄平石型の普通輝石安山岩際であり、2縁もしくは3縁が叩き

削られている。扁平な各1面の中央部に磨り痕がある。各磨り面は節理面の凹凸を残しており、石皿としては長期間の研磨作業は推定しがたい。ともにSX902の中で研磨面を上にして出土したことから、SX902がNR901の川底へ下りる階段として利用されたと仮定するなら、この磨り痕は昇降の際に足によって踏まれた摩耗の痕とみることも可能かもしれない

い。aは単純最大長42cm、単純最大幅30cm、bは単純最大長20cm、単純最大幅15cmであり、ともに3cm前後の厚みがある。

SX903(図14・17・19) A・B区の西川辺川の肩部の長原9A層上面～9A層内から、多数の弥生土器片、結晶片岩の破片、サヌカイト製剥片などとともに、焼土塊が出土した。また、土器片はE・F区にもまばらに分布した。

焼土塊はシルト質粘土を母材とする厚さ4cm程度、表面積数cm²の塊が直径約50cmの範囲に集合していた。いずれの塊も上半部が赤色化し、下半部が黄色化していた。長原9A層上面で火を焚いた痕と考えられ、地表に露出していた長原9A層が熱を直接受けた際に、塊状に破砕されたものと推定される。

隣接するNG89-23次調査地においても、この層準に多数の土器片・安山岩片などが分布していた(遺物群SX911)。住居がこの付近にあったものと思われる。

18～22はSX903周辺から出土した弥生土器である。いずれも器面が風化して残りが悪い。18は底径7cm前後の甕の底部で、裏面

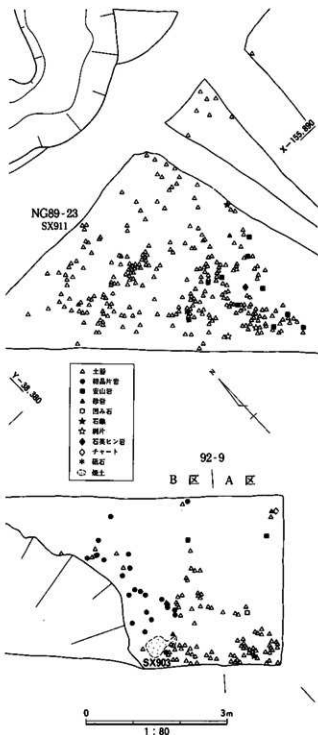


図19 SX903とその周辺の出土遺物分布図

にジャボニカ種と思われる初痕が見られる。19は底径8.6cmの壺の底部で、器表面を幅広いナデで調整している。20・21は底径7.6～7.8cmの甕の底部で、21は器表面にユビオサエが残る。22は底径8.6cmの壺の底部である。以上の土器の色調はにぶい橙色(2.5Y6/6)である19以外は灰白色(2.5Y8/2)を呈する。また、22以外の土器の胎土中には角閃石が見られない。これらの土器は既述したNR901から出土したものと同様に弥生時代前期の前半に属するものと思われる。

石鏃(図7、図版36) AC235は長原9A層下面で出土した凹基無基式石鏃である。完形で、作用部の側縁が緩やかに外湾し、基部の挟りは浅い。C-2類またはB-2類に属する。最大長27.5mm、重さ1.13gである。大きさの割に薄手である。

凹み石(図版32) AC234cはA区の長原9A層内(下底面付近)から出土した凹み石である。直径約8cmの砂岩からなる円礫の約1/2を用いている。重さは374gである。凹みの直径は約20mmで、頂部が円い深さ約5mmの逆円錐形である。

iv) 後期旧石器～縄文時代初頭の遺構と遺物

(1) 石器製作址

LC1301(図21・22、図版33) 長原12/13層漸移帯～13AB層の中にあつて、D区を中心に一部E区にかかるTP+9.08～9.30mの範囲で、北東方向に緩く傾斜する地層に沿つて出土した風化の進んだサヌカイト製の石器遺物16点を主体とする石器群である。これらと接合関係があり、または同程度に風化していて集中部に重なる長原9B～9C層から出土したものを含めた削器1点、剥片17点、およびD区の同層準の土壌から洗浄・篩別によって抽出した微細な剥片18点の合計36点から構成される。この石器群との関連はわからないが、集中部からはチャートの亜円・中礫が2点出土している。また、前述したように、削器AC215と石核AC206はLC1301の石器群と係わっていた可能性がある。

発掘したサヌカイト製石器遺物18点の母岩を[大阪市文化財協会1997]の基準で分類すると、剥離面の肌理：細、流理構造：粗・弱・細、剥離面の風化の特徴：小凹・少のもの(母岩Aとよぶ；以下同様)がもっとも多く14点(AC201・204・261・263～265・267・269・271～276)、母岩Aに似るが剥離面に微細な割れ円錐が密にあるもの(母岩B)が1点(AC290)、剥離面の肌理：粗、流理構造：密・強・中、剥離面の風化の特徴：小凹・全面のもの(母岩C)が1点(AC262)、剥離面の肌理：やや粗、流理構造：極密・弱・縮縮状、剥離面の風化の特徴：小凹・多いもの(母岩D)が1点(AC268)、剥離面の肌理：やや粗、流理構造：無、剥離面の風化の特徴：微細凹・全面のもの(母岩E)が1点(AC289)であった。

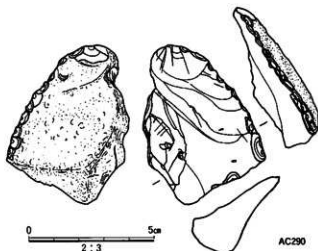


図20 LC1301出土石器遺物実測図

母岩Aには2組の接合資料があり、6点が接合した。接合率は43%である。NR901によって削られてはいるが、LC1301は石器製作址の一部であったと考えられる。

削器(図20・22、図版33) AC290は表面が原面の縦に長い剥片を素材にした母岩Bのやや凸刃の削器である。刃部をつくる細部調整は剥片の片縁に表裏両面から行われているが、表面左側縁が優位にかつ連続的に剥離されている。浅形平形で魚鱗状の細部調整である。最大長63mm、最大幅51mm、最大厚19mmである。

接合資料JAC-1(図22・23、図版33) 同じ打面から連続して剥離されたとみられる縦に長い剥片2点が構成する母岩Aの接合資料で、剥離順序はAC265-267である。AC265の表面は裏面と同方向の剥離面であり、先端部および左側縁に自然面を残している。裏面基端部の両側縁には主剥離面と並行する2面の剥離面があって、打面は欠損しているが同時割れによるものとみられる。AC267は線状打面であり、表面基端部には主剥離と同時割れをおこした剥離面があり、左側縁に原面を残している。ともに石核の整形時の剥離によるものかと思われる。AC265は最大長30

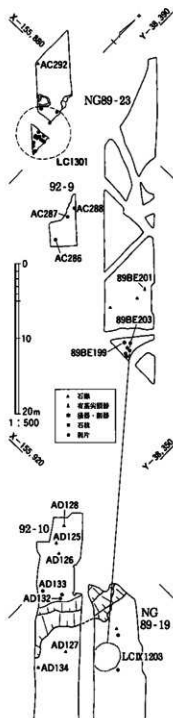


図21 長原9～13AB発出土石器遺物分布図

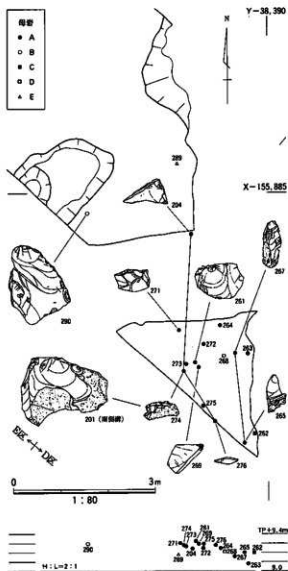


図22 LC1301出土石器遺物分布図

各剥片の残存値はAC204+276が最大長33mm、最大幅22mm、最大厚6mm、AC274が最大長14mm、最大幅28mm、最大厚6mm、AC201が最大長58mm、最大幅69mm、最大厚11mmである。なお、AC204は長原9B層から出土している。

使用痕のある剥片(図22・23、図版33) AC269は母岩Aの剥離面打面で有底の横形剥片である。表面に平坦な剥離面をもつ。裏面は一条のリングが発達した剥離面であるが、打

mm、最大幅15mm、最大厚7mm、AC267は最大長37mm、最大幅14mm、最大厚7mmである。

JAC-2(図22・23、図版33) 剥片4点が構成する母岩Aの接合資料で、剥離順序はAC204+276-274-201である。AC274・204・201はともに石核の同一縁から剥離されたものである。これらの剥離作業は自然面側から打撃された複数の剥離面を打面として行われている。AC204はこれに先行する表面の縦に長い剥片が剥離された打撃と並行してその少し左側を打撃された剥片であるが、打点が粉碎して縦折れを起し、先行する割れ傷に沿ってAC276が同時割れを起している。AC274は204の右横に打撃が加えられて剥離された表面が原面の剥片であるが、点状打面となり、かつ中央割れを起している。AC201は274のすぐ後ろを打点として剥離されており、板状の横形剥片が取られている。いずれも石核の整形時の剥離によるものかと思われる。

各剥片の残存値はAC204+276が最

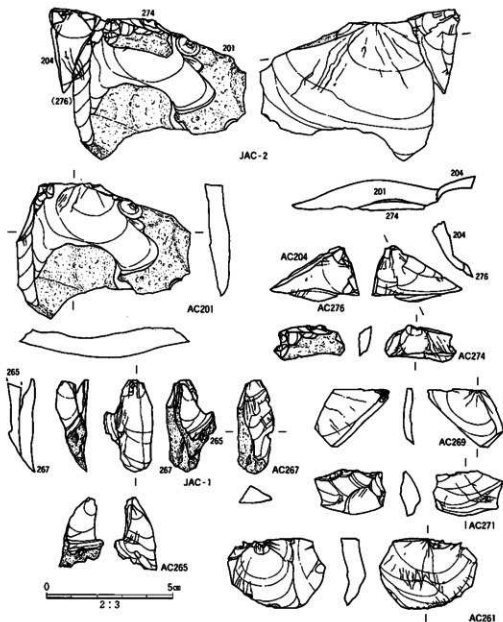


図23 LC1301出土石器遺物実測図

点から垂直割れを起している。打面と底面とが交わる鋭角な端部に使用によるとみられる微細な剥離が集中している。鏟として使用された可能性がある。最大長23mm、最大幅30mm、最大厚5mmである。AC261は長原9C層から出土した母岩Aの剥離面打面の横形剥片である。表面先端部に不連続の微細な剥離面があり、使用痕かと考えられる。最大長30mm、最大幅39

mm、最大厚10mmである。

剥片(図22・23、図版33) AC271は母岩Aの横形剥片である。基部に裏面側からの力によって剥がれた不連続の微細な剥離面があって、打面を欠損している。微細な剥離面が使用痕かどうかはわからない。最大長17mm、最大幅28mm、最大厚7mmである。その他、母岩Aの剥片には、原面打面、粉碎打面、点状打面、剥離面打面、打面を欠損した細片などがあり、材質に影響されて表・裏面にフィッシャーやステップがめだつ。

AC262は母岩Cの剥離面打面で有底の横形剥片である。最大長32mm、最大幅43mm、最大厚7mmである。AC268は母岩Dの縦に長い横断面三角形の剥片であり、剥離時に打面を欠損している。表面には原面をもつ。最大長62mm、最大幅16mm、最大厚16mmである。

註)

- (1)長原10・11層は、かつて上部の粗粒部と下部の細粒部がそれぞれ単層として区分されたが、相互に層相変化が著しく、両者の境界が追跡しがたいため、連続的な層理面とは認められないので一括している。また、両層相の部分を10相・11相と呼んでいる。

第2節 92-10次調査

1) 層序

本調査地は川辺町線の道路敷内に当たるため、道路建設時の攪乱を受けていたが、長原1層に相当する現代の水田の作土以下の各層は比較的良好に残っており、それらは長原遺跡南部の標準層序に対応するものであった。ただし、長原5層から長原7層については、後世の水田の耕作や客土によって攪拌されており、一部の遺構の埋土として見られた以外は連続した地層としては確認されなかった(図24)。

長原1層は黒色砂礫混りシルトで、層厚は10cm前後あり、現代の作土である。

長原2層はオリーブ褐色ないしは灰オリーブ色砂礫混りシルトで、層厚は10-20cmあり、上層水田の床土面を形成する作土である。1・2区とも本層の上面や下面で、鋤溝群や溝が検出された。2区では最下部よりサヌカイト製の剥片が1点出土した。

長原3層はオリーブ褐色砂礫混りシルトで、層厚は10-20cmあり、上面および下面で耕作の痕跡などが確認された。水田の作土と考えられる。

長原4Bi層は暗オリーブ褐色含砂礫粘土質シルトで、層厚は10-30cm前後あり、上面および下面でウシやヒトの足跡群が確認された。鎌倉時代の水田の作土である。1区では本層の上面で南北方向の溝が検出されている。サヌカイト製のクサビ剥片が1点出土した。

長原4Bii層は黄褐色砂礫-細粒砂を主体とする水成層である。1区の長原4Biii層準の水田作土上の足跡群内のみで確認された。

長原4Biii層は黒褐色含砂礫粘土質シルトで、層厚は10-20cmあるが、上層水田の耕作で攪拌されており、全体に地層が波打っていた。平安時代の水田の作土である。2区よりサヌカイト製の石鏃1点・剥片2点、結晶片岩製の石庖丁1点のほか、下部から石鏃が1点出土した。

長原6-7層は遺構内および調査地のごく一部で確認されたのみである。サヌカイト製の石鏃が1点出土した。

長原8A層は暗褐色含細粒砂粘土質シルトで、層厚は10cm前後ある。1区の西部から2区にかけて分布しており、一部で細粒砂のラミナが観察された水成層である。

長原8B層は黒褐色含極細粒砂粘土質シルトで、層厚は10cm前後あり、1区の西部でも確認された水成層である。

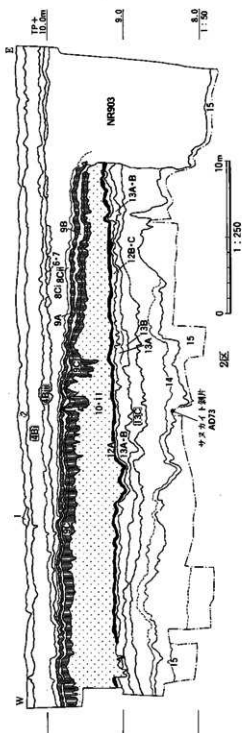
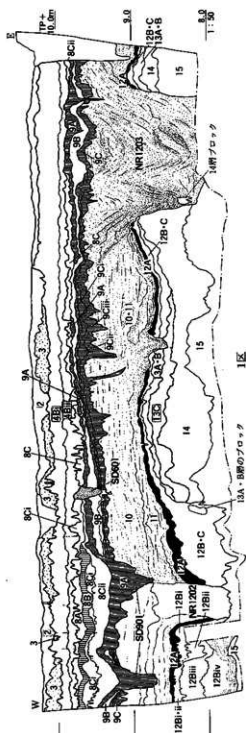


図24 南壁断面模式図

長原8C層は層厚10～30cmの暗灰黄色あるいは黄橙色砂礫層と、層厚5～20cmの黄橙色極細粒砂質シルトに2分される。ともに水成層で、前者は長原8Ci層、後者は長原8Cii層に相当する。1区の西部では後者の上面からヒトの足跡群が検出された(図版4)。また、本層は2区の東部に位置する流路NR903の主要な堆積物である。

長原9A層は黒褐色粘土質シルトで、層厚は5～20cmあり、調査地のほぼ全域に堆積していた。1区の西部に位置する溝SD901・902および土壌SK901は本層の下面で、2区の流路NR903は本層の上面で確認された。1区の上部ではサヌカイト製の細部調整のある剥片が1点、2区から剥片が1点・使用痕のある剥片が1点出土した。

長原9B層は褐色あるいは暗緑灰色シルト質粘土～粘土で、層厚は5～20cmあり、調査地のほぼ全域で確認された。

長原9C層は黒褐色シルト質粘土～細粒砂混りシルトで、層厚は15cm前後ある。本層は3層(長原9Ci、9Cii、9Ciii層)に細分され、上面および下面で、植物の根跡や乾痕が見られた。1区の下部から砂岩の搬入礫が1点、2区から石鉄が1点出土した。

長原10層はオリーブ褐色シルト混り細粒砂・黄褐色砂礫を主体とする水成層で、層厚は40～50cm前後ある。本層は下層の長原11層とともに、1区に位置する流路NR1201～1203の主要な堆積物である。

長原11層は緑灰色シルト混り細粒砂～極細粒砂質シルトで、層厚は20～30cmある。砂粒のラミナが顕著に見られる水成層である。

長原12A層は黒褐色極細粒砂混りシルトあるいはオリーブ黒色粘土質シルトで、層厚は5～15cmある。1区では本層の上面から流路NR1201～1203が検出されたほか、調査地のほぼ全域で、樹木の根跡や乾痕が確認された。また、縄文時代中期とみられるサヌカイト製の石鉄が2区から1点、1区の乾痕内から1点出土した。

長原12B層は黄灰色極細粒砂質シルトを基調とする層で、1区の西部に分布する下層の長原13A・B層や長原14層を浸食しながら南から北に流下する流路NR1204内に堆積したオリーブ黒色シルト混り極細粒砂・灰色極細粒砂混りシルト～極細粒砂は本層に相当する。本層は横大路火山灰を起源とする火山ガラスを含む。なお、1区の西部に位置する微高地は調査時点では、長原12B・C層の堆積によって形成された地形と認識していたが、今回、周辺の層序と比較検討した結果、長原12Bi、12Bii、12Biii、12Biv層に相当することが確認された。したがって、本調査地においては、長原12C層は2区のごく一部で確認された以外には単一の地層としては堆積していないようであり、既述した微高地は調査地の南方か

ら水流によって運ばれた長原12Bi～12Biv層準の水成層によって形成されたものと思われる。

長原13A・B層は灰黄色含砂礫粘土質シルトを基調とする層で、層厚は15cm前後ある。本層の上面はTP+8.8～8.9m前後あり、1区の中央部では微高地状を呈する。1区ではサヌカイト製の石鏃が1点、2区では石鏃・削器が各1点と剥片が4点、乾痕内からは有茎尖頭器が1点出土した。

長原13C層は明黄褐色含シルト砂礫・シルト混り細粒砂および暗オリーブ灰色シルト質粘土で、層厚は20cm前後あり、2区では多数の亀甲状の乾入が見られた。

長原14層はオリーブ灰色シルト質粘土および灰色シルト混り細粒砂～砂礫で、層厚は30～50cm前後ある。本層は砂粒のラミナが顕著な水成層で、2区では下部からサヌカイト製の剥片が1点出土した。

長原15層は緑灰色シルト混り極細粒砂～シルト質粘土で、層厚は100cm以上ある。本層は水成層であるが全体によくしまっており、上面には多数の乾痕が確認された。

2) 各層出土の遺物

i) 長原3層出土遺物(図25)

24・25は口径9.4cm、器高1.2cmの土師器小皿である。口縁部はともに短く開く。

26・27は口径28.3～33.0cmの瓦質土器鉢で、口縁部は体部から大きく開く。ともに口縁部をヨコナデしており、26は体部を横方向にヘラケズリ調整している。撞目は粗い。15世紀の前半に属するものである。

23・28は口径8.9～9.5cm、器高1.95～2.2cmの瓦器小皿である。23の口縁部は丸みもち、28は内面がわずかに凹む。ともに内面のみヘラミガキが施されている。12～13世紀ごろに属するものであろう。

ii) 長原4Bi層出土遺物(図25)

30～32は口径9.5～10.2cm、器高2cm前後の土師器小皿である。31・32は口縁部に2段の強いヨコナデを施している。胎土は砂粒を含まない精良なものである。12～13世紀ごろに属するものであろう。42は口径が14.6cmの土師器皿で、体部から口縁部の調整は31・32と同じである。

33～35は口径9.2～10.0cm、器高1.6～2.1cmの瓦器小皿である。口縁部はヨコナデ、体部の外面をユビオサエで整えており、いずれも体部の内面に粗いヘラミガキが見られる。

38～41は口径14.8～16.6cmの瓦器碗である。口縁端部にはぶい沈線が巡る38以外は丸く

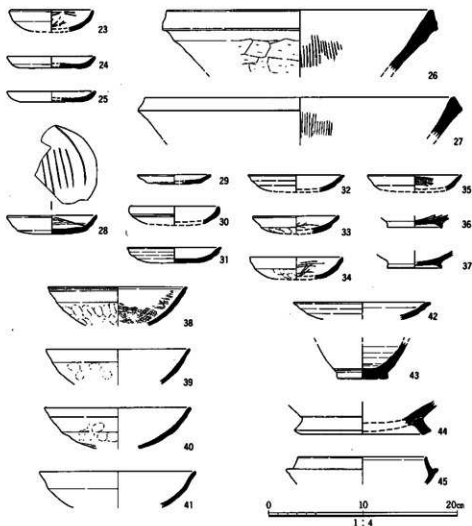


図25 長原3、4Bi、4Biii層出土遺物実測図

おさめており、体部の外面はユビオサエで整えている。38の内面には粗いヘラミガキが見られる。36・37は瓦器碗の高台である。

43～45は須恵器で、43は底部の裏面に静止糸切り痕が残る壺である。44は壺の高台、45は口径13.8cmで、口縁部の立上がりわずかに内傾する杯身である。

以上の土器類のうち、土師器は12～13世紀、瓦器は13世紀の前半ごろで、43・44は9世紀初頭、45はMT15型式に属するものであろう。

iii) 長原4Biii層出土遺物(図25)

29は口径7.8cm、器高1cm前後の瓦器小皿で、口縁部は底部から外上方に開く。13世紀

の後半ごろに属するもので混入品と思われる。

石庖丁(図26、図版34) AD49は2区から出土した磨製石庖丁の破片である。体部の大半を欠損しているが、残存長50mm、残存幅37mm、厚さ5mmである。刃部は片刃で、背および体部の形態からみて、直線刃半月形態に属するものと思われる。素材は淡い緑色を呈する結晶片岩である。

石鏃(図26、図版35) AD56は2区から出土した凸基無茎式石鏃である。切先は使用時

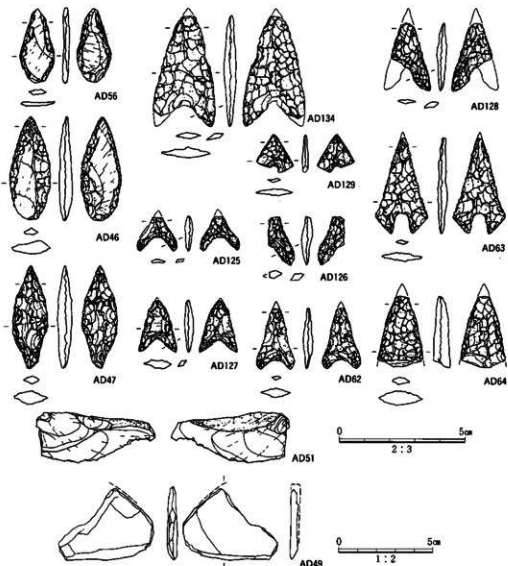


図26 包含層とNR1201出土石器遺物実測図
(AD49のみスケールは1:2)

に欠損したものと思われ、基部もわずかに欠損する。全体の形が木葉形を呈しており、G-1類に属する。両面に先行剥離面を広く残し、小型で薄手の石鏃といえる。残存する最大長28.8mm、重さ0.95gである。本来は長原9A層に属するものであろう。AD46は2区から出土した凸基無茎式石鏃である。完形で、基部は円基となる。全体の形が木葉形を呈しており、G-1類に属する。両面に先行剥離面を広く残す。最大長40.3mm、重さ2.98gである。本来は長原9A層に属するものであろう。

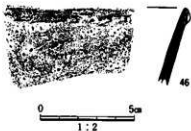


図27 2区長原9A層出土遺物実測図

iv) 長原7層出土遺物

石鏃(図26、図版35) AD47は2区から出土した凸基有茎式石鏃である。基部の先端を欠損する。横断面形が變形を呈しており、厚手である。残存する最大長40.1mm、重さ2.69gである。本来は長原8B層に属するものであろう。

v) 長原9A層出土遺物

46は口縁端部に細い粘土紐を貼付けた長原式土器の細片である。突帯のキザミの形態は小型のD字で、色調はにぶい黄橙色を呈しており、胎土中に角閃石を多く含む(図27)。

使用痕のある剥片(図26、図版34) 2区から出土したAD51は、打点付近からのたて割れを起した横形の有底剥片である。表面は裏面と同方向の打撃による剥離面と、その後の小さな剥離面、および自然面で構成される。自然面を取込んでいる。底面は比較的大きな凹面である。裏面先端縁に使用時の歯こぼれとみられる複数の小さな剥離面がある。最大長20mm、最大幅48mm、最大厚7mmである。

細部調整のある剥片(図版34) 1区から出土したAD112は横形剥片である。基部の裏面から表面に深形厚形～平行平行の細部調整が施されている。最大長17mm、最大幅24mm、最大厚3mmである。

剥片(図版34) AD61は2区の長原9C層の深度にある乾痕内から出土した剥片の一部である。先端部裏面側に複数の小さな剥離面があり、使用時のものかもしれない。単純最大長30mmである。

vi) 長原9C層出土遺物

搬入礫(図版34) AD122は1区の長原9C層下部から出土した中粒砂岩の少し扁平な亜円礫である。1個所に割れ面があるが、風化しており意図的に剥離されたかどうかはわから

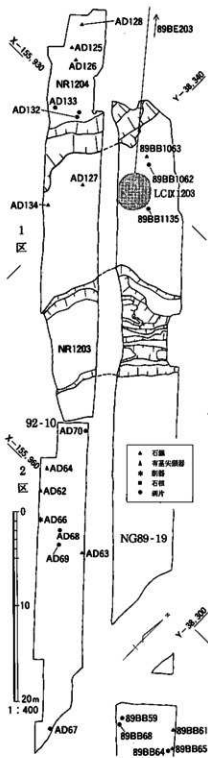


図28 長原12～13A・B層
出土石器遺物分布図

ない。単純最大長106mm、単純最大幅78mm、単純最大幅42mmである。

石鏃(図26・28、図版36) AD62は凹基無茎式石鏃である。切先が折れており、使用時に欠損したものであると思われる。作用部の側縁が緩やかなS字状を呈し、基部の挟りがやや浅めであることから、D-2類に属する。残存する最大長24.2mm、重さ0.89gである。本来は長原12層に伴うものであろう。

vii) 長原12A層出土遺物

石鏃(図26・28、図版36) AD134は1区の長原12A層の乾裏内から出土した凹基無茎式石鏃である。切先と右図の左側縁に古い欠損部がある。作用部の側縁が緩やかに外湾し、基部の挟りが深いことから、C-1類に属する。残存する最大長42.6mm、重さ3.8gである。大型品であり、本来は長原12/13層漸移帯に伴うものであろう。AD129は2区から出土した凹基無茎式石鏃である。左右の逆刺を欠損する。作用部の側縁が直線的で、基部の挟りが深いと推測されることから、A-2類に属するものである。残存する最大長15mm、重さ0.4gである。本来は長原12/13層漸移帯に伴うものであろう。

viii) 長原13A・B層出土遺物

削器(図28・29、図版34) AD66は幅広で縦長の剥片を素材とした削器である。表面基端部に見られる剥離面により打面を欠失している。主剥離と同時に割れの可能性がある。表面には主剥離と同方向の2つの大きな剥離面が残されており、その状況から、ほぼ同じ形状の剥片が素材剥片に先行して剥離されたと考えられる。表面末端部に残された平坦な剥離面は、この剥片を剥離した石核の素材に係わるもの

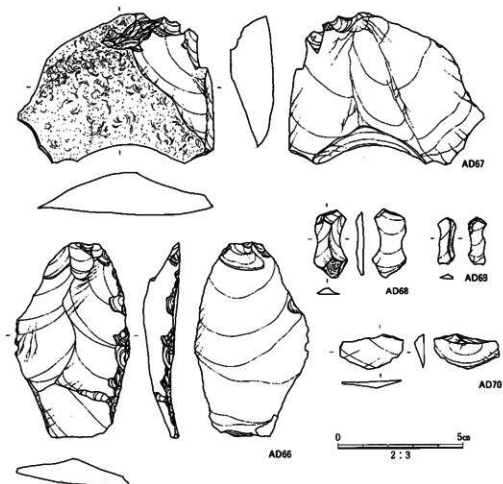


図29 長原13A・B層出土石器遺物実測図

とみられるが、ポジティブ面かネガティブ面か判然としない。また、剥片の末端を欠損しているが、これは主剥離の際に横折れを起したものであろう。刃部は表面右側縁に形成され、やや不規則ながら浅く微細な細部調整が裏面側から連続して施されている。表面左側縁下半部には原面を残している。最大長77mm、最大幅46mm、最大厚11mmである。

剥片(図28・29、図版34) AD67は分厚い大型の剥片である。表面は大半が原面に覆われている。表面に見られる剥離面の多くは主剥離に先行するものであるが、裏面基端部の剥離面は主剥離の後に剥離されたもので、これによって打面の大半が失われている。また、裏面末端の主剥離面とは剥離方向が逆の剥離面は潜在割れによるものであろう。石核などの素材として取得された剥片と考えられる。最大長60mm、最大幅79mm、最大厚19mmである。

AD70は横形剥片である。打面は2面のネガティブな剥離面で構成される。表面には平坦でネガティブな剥離面が残されているが、これは石核の素材に係わる剥離面である。石核調整剥片の可能性が高い。最大長13mm、最大幅25mm、最大厚3mmである。

AD68は縦長の剥片で打面を欠損する。表面には複数のネガティブな剥離面が認められ、末端部は原面を残している。石核調整剥片とみられる。最大長27mm、最大幅13mm、最大厚3mmである。AD69は縦長の剥片で打面を欠損する。表面には2面のネガティブな剥離面が認められるが、左側のものは石核の素材に係わる剥離面の可能性もある。石核調整剥片とみられる。最大長18mm、最大幅7mm、最大厚2mmである。

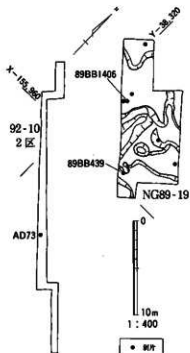


図30 2区長原14層出土
石器遺物分布図



図31 2区長原14層出土石器遺物実測図

石鏃(図26・28、図版36) AD63は長原13A・B層内に突き刺さっていた凹基無茎式石鏃である。切先が折れており、使用時に欠損したものと思われる。作用部の側縁が直線的で長く、基部の挟りが深いことから、B-1類に属する。残存する最大長36.9mm、重さ1.63gである。大型品の割に薄手で、作用部は鋸歯縁となる。本来は長原12/13層漸移帯に伴うものであろう。AD127は長原13A・B層内に突き刺さっていた凹基無茎式石鏃である。作用部の側縁が切先寄りで角度を変化させてはいるが、B-1類に分類しておく。残存する最大長20.7mm、重さ0.75gである。本来は長原12層に伴うものであろう。

有茎尖頭器(図26・28、図版36) AD64は長原13A・B層内の乾痕から出土した有茎尖頭器である。切先や逆刺以下を古い段階の折れで欠損する。作用部の側縁は緩やかに外湾し、横断面が紡錘形となる。残存する最大長28.4mm、重さ2.7gである。本来は長原12/13層漸移帯に伴うものであろう。

ix) 長原14層出土遺物

剥片(図30・31、図版34) AD73は横形剥片である。打面は平坦な剥離面で構成されるが、ポジティブ面かネガティブ面か判然としない。表面の剥離面はネ

ガティブ面で、横位方向から剥離が行われている。また、末端にも打面と同様の平坦な剥離面が認められるが、表裏両方の剥離面に切られている。石核底面の平坦な剥離面を取込んだものと考えられるなら、石核が剥片素材であった可能性が高い。目的的な剥片というより、石核作業面などの調整を目的とした剥片と考えられる。最大長16mm、最大幅31mm、最大厚5mmである。

3) 遺構とその遺物

本調査地では平安時代から江戸時代にかけての水田址や溝をはじめ、飛鳥時代の溝SD601、弥生時代前期の溝SD901・902・土壌SK901などの遺構のほか、弥生時代前期から中期初頭に埋没した流路NR903および縄文時代中期の流路NR1201・1202が検出された。また、長原13A層の上位および長原14層下部から旧石器時代の後半とみられる石器遺物が出土したほか、縄文時代中期の地層と想定されている長原12A層でも同時代の石鏃が点々と出土した。以下に、本調査地で検出された平安時代から江戸時代にかけての水田址、縄文時代中期・弥生時代前期・飛鳥時代の流路および溝について順を追って記述する。

i) 飛鳥～江戸時代の遺構と遺物

(1) 江戸時代の水田址(図32・33)

1・2区ともに長原2層の下面では、正東西および正南北方向の幅0.1～0.2mの溝群をはじめ、偶蹄類やヒトの足跡群が検出された。小溝群は東西方向のものが過半数を占めており、南北方向の小溝は数箇所が東西方向の小溝に切られていた。小溝群の時期は出土遺物からみて18世紀の後半代であり、巨視的にみれば南北方向の小溝群が東西方向の小溝群に先行するようと思われる。

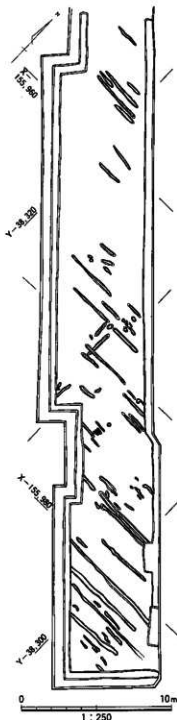


図32 2区長原2層下面検出
小溝群配置図

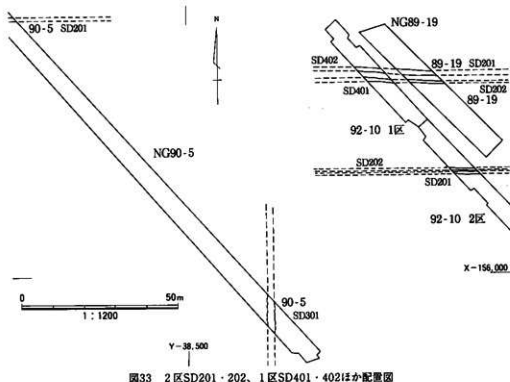


図33 2区SD201・202、1区SD401・402ほか配置図

た。小溝群の埋土は作土が主体であり、一部の小溝の底に残る鋤の窪み内には黄橙色の細粒砂が堆積していた。小溝群については従来から指摘されているように鋤による耕起の際に生じる溝と考えておく。なお、2区の南半分に分布する小溝群の中には、溝の間隔が約4mで東西に平行するものがあるが、これは鳥島のような畝の一種かもしれない。

1・2区では長原2層上・下面および長原4Biii層の上面で用水路とみられる東西方向の溝SD201・202・401・402が検出された。これらの溝は規模や方位が正東西であることから坪境溝に付随した溝と考えられる。

SD201(図33) 2区の中央部に位置する幅0.7～1m前後、深さ約0.1mの溝で、これの北側に平行して流れるSD202とともに長原2層の上面から検出された。溝内には灰オリーブ色砂礫混りシルトが堆積しており、江戸時代後期の陶磁器や瓦などの破片が出土した。本溝は方位も正東西で、当地域の長原2層準の水田の区画の方位と同じであった。

SD202(図33) 2区の中央部に位置する幅0.2～0.3mで、正東西方向の溝であり、南側には約0.6m離れて方向、規模ともにSD202と同様な溝が平行して検出された。両溝ともに溝内には長原2層に相当する水成層が堆積しており、溝の幅は異なるものの、方位や位置

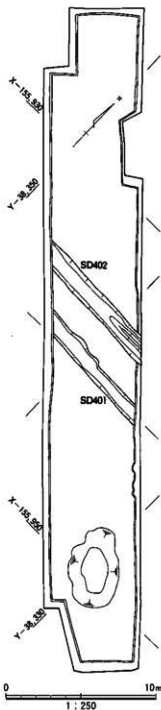


図34 1区長原4Biii層上面
検出遺構配置図



写真2 1区長原4Biii層上面水田址検出状況(北から)

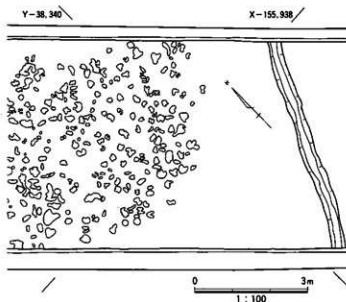


図35 1区長原4B層上面検出ウシ・ヒトの足跡群

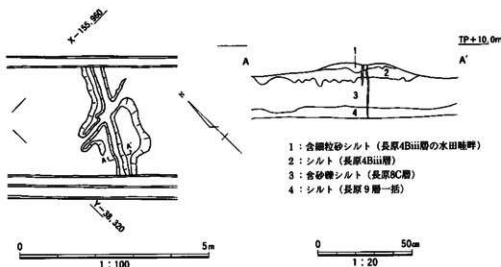


図36 2区SR401実測図

から判断して、既述したSD201と同様に江戸時代の用水路と考えられる。

(2) 平安～鎌倉時代の溝・水田址(写真2、図版4)

今回の調査で検出された平安～鎌倉時代の水田址は2面あり、このうち、長原4Biii層の上面および基底面をはじめ、長原4Biii層の上下面ではウシヤヒトの足跡群が確認された。2面ともに作土の大半が重複する上層の水田の耕作によって攪拌されており、畦畔は2区で1箇所確認されたにすぎない。なお、長原4Bii層準の作土の上面は1区がTP+9.8m前後で、2区がTP+10m前後あることから、本層準の水田址は調査地の南東から北西方向に向って低くなっていたようである。ここでは、1区の長原4Biii層上面で検出した用水路とみられる正東西方向の溝SD401・402、2区の長原4Biii層準の水田址に伴う畦畔SR401について記述しておく。

SD401・402(図33・34) SD401は1区の中央に位置する幅1m前後、深さ0.12m前後の、東西方向の溝である。本溝の北側には約1.7～2.0m離れてSD402が平行して流れており、ともに溝内には水成層が堆積していた。これらの溝の方位は正東西であり、調査地の東側のNG89-19次調査地で検出されている溝SD201・202の西延長部に当たっている。ところで、2区には江戸時代になってSD201・202が新たに掘られているが、これらの溝の方位はほぼ同じであることから、当地域に区画整理施行以前に残っていた江戸時代以後の埴境溝は遅くとも鎌倉・室町時代の埴境溝の方位を踏襲していたものと思われる。なお、当地域の長原2層準の埴境溝は1704(宝永元)年に施行された大和川の付替によって機能を

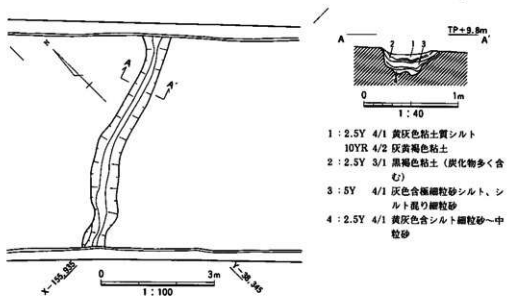


図37 1区SD601実測図



写真3 SD601全景(南東から)

失ったようであり、各所で坪境溝の中に灌漑用の野井戸が掘られている。このころ当地域では幅2～3mの平行する2条の溝の間を畝とした島畠が登場しており、それまで存続していた坪境溝が各所で改修されている。

SR401(図36) 2区の北部に位置する畦畔で、作土である黒褐色含砂礫粘土質シルト～シルトをベースにして形成されており、上幅0.1m、下幅0.3m、高さ0.1m前後ある。正東西に近い方向に延びる畦畔と、やや東寄りで南北方向の畦畔がクロスした部分のみであり、全体に残りが悪く、東接するNG89-19次調査地でも本畦畔の延長分は検出されていない。

(3) 飛鳥時代の溝

SD601(図37、写真3) 1区の北部に位置する東西方向の溝で、深さは検出面から約0.25mある。断面U字状の溝内には長原6B層に相当する灰色含シルト細粒砂・黄灰色粘土・黄灰色粘土質シルトが堆積しており、上部から古墳時代末～飛鳥時代の土師器の細片が出土した。本溝は出土遺物からみて飛鳥時代の溝で、調査地周辺の水田址に伴う用水路と考えられる。なお、溝底のレベルは東端に比べて西端が高いことから、水は西から東に流れていたようである。

ii) 弥生時代前期の遺構と遺物

(1) 溝

SD901・902(図38・39、図版5) 1区の北端に位置する溝で、長原9A層の下面から検出された。SD901はやや蛇行しながら南東から北西方向に流れる幅1.5m前後の溝で、深さは0.5m前後ある。溝内には下から黒褐色細粒砂混りシルト・黒色砂礫混りシルト・黒褐色粘土質シルト・黄褐色粘土質シルトが堆積しており、黒褐色粘土質シルトから弥生時代前期前半に属する土器片が出土した。本溝は調査地の北部に位置するNG89-23次調査地のSD901の一部であり、溝内から長原式土器に共伴して弥生時代前期前半の土器が出土している。

SD902はSD901から東に延びる幅0.65m、深さ0.2mの溝で、溝内には黒褐色粘土質シルトが堆積していた。本溝は東接するNG89-19次調査地に延びており、上述したSD901を含めて調査地の北東に想定される弥生時代前期前半の集落址に関係する溝と考えられる。

(2) 土壌

SK901(図38、図版5) 1区の北西部に位置するやや不整形な土壌である。遺構の東部は調査範囲外であるが、深さは検出面から約0.4mあり、埋土は炭化物を含む黒色シルト質粘土(長原9A層)である。遺物は出土しなかったが、長原9A層の下面で検出されたことや

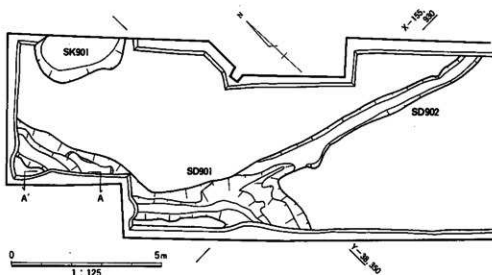


図38 1区SD901・902、SK901実測図

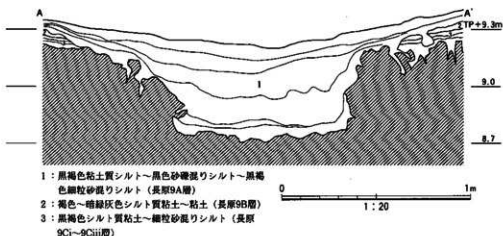


図39 1区SD901南壁断面実測図

埋土から判断して、弥生時代前期の遺構と考えられる。

(3) 流路

NR903(図40・41、写真4、図版6・30) 2区の東部に位置する幅6m前後、深さ1.5m前後で、北流する流路である。流路内にはおもに長原8Ci層準に相当する砂粒のラミナが顕著なオリーブ灰色砂礫・オリーブ黒色シルト・灰オリーブ色砂礫・黄褐色含シルト中粒砂～砂礫などが堆積していた。流路の中ほどに堆積した植物遺体の薄い層を挟むオリー

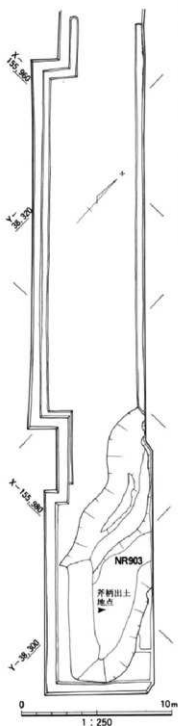


図40 2区長原9A層上面検出
遺構配置図



写真4 2区NR903斧柄出土状況(西から)

ブ灰色砂礫から斧柄および長原式土器の細片が出土した。本流路は、調査地域の南東部に位置する、NG82-41次調査地で最初に発見された長原8C~9A層準の水成層で埋没した自然流路(東川辺川)の続きである。NG82-41次調査では長原式土器や土偶に共伴して斧柄や丸木弓・板材など当地域の縄文時代晩期終末の特徴を保持した木製品が出土している。

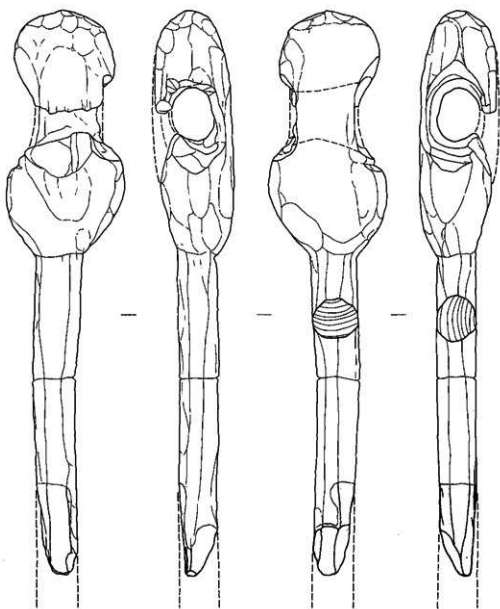
47は全長約45cmで、握りの一部が破損した斧柄である。

着装部は両側から削込んでおり、側面観は「ひさご形」を呈する。石斧の挿入孔は楕円形に抉っており、刃部の側は幅約6cmで、反対側の幅は約4.4cmある。挿入孔の形状から判断して、体部が丸みのある両刃石斧が装着されていたものと思われる。柄部は円形に削り出されており、用材はコナラ亜属のクヌギまたはコナラである。

iii) 縄文時代の遺構と遺物

(1) 流路

NR1201~1204(図42、図版7・8) 1区の西部および東部に位置する流路で、長原12A層の上面から確



47

0 10 20cm
1:3

图41 2区NR903出土斧柄实测图

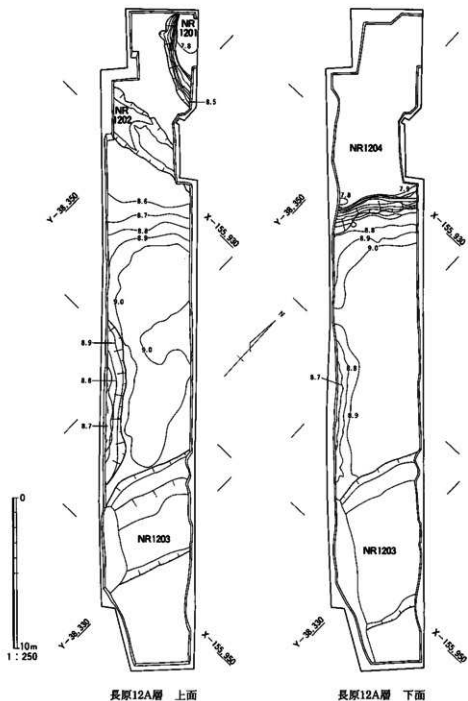


图42 1区遺構配置图

認められた。NR1201は遺構の大半が調査範囲外のため規模は明らかでないが、東西方向のNR1202は溝幅が2.5m前後あり、南北方向のNR1203の幅は約6mある。このうち、NR1201・1202の深さは1m前後あり、もっとも規模の大きいNR1203の深さは1.5m以上ある。いずれの流路内にも長原10・11層に相当する暗灰黄色砂礫・オリーブ褐色および灰オリーブ色砂礫～含シルト砂礫が堆積しており、NR1201・1202では底の近くに落葉樹とみられる流木群が堆積していた。一方、1区の西部では、NR1201・1202の下位から幅が15m以上もある流路NR1204が検出された。NR1204は調査地域を南西から北東へ流れていたと想定されている古川辺川の前身に当る流路の一部であり、溝内には長原12A層準の灰～黒色極細粒砂混りシルトをはじめ、長原12Bi～12Biv層に相当する灰色シルト混り細粒砂～シルト混り極細粒砂・灰色砂礫などが堆積していた。

流路の底面から縄文時代前期から中期とみられるサヌカイト製石鏃3点や、細部調整のある剥片1点を含む剥片4点が出土した。

AD132・133はともにNR1204を埋積した河成の長原12Biv層下底面付近から出土した剥片であり、長原12/13層漸移帯かそれ以下の地層から2次堆積したものと思われる。

使用痕のある剥片(図28、図版34) AD132は原面打面である。表面は主剥離と逆方向の打撃による剥離面と主剥離と同時に割れた剥離面とで構成される。裏面の基端部および右側縁に小さな複数の剥離面があり、使用時の欠けかと思われる。最大長51mm、最大幅43mm、最大厚15mmである。

剥片(図28、図版34) AD133は原面打面の横形剥片であり、垂直割れをおこなっている。表面は主剥離と同方向の打撃による剥離面である。主剥離面の先端はヒンジフラクチャーである。最大長29mm、最大幅40mm、最大厚6mmである。

石鏃(図26・28、図版36) AD128は古川辺川内の長原12Biv層から出土した凹基無茎式石鏃である。切先と一方の逆刺を欠損する。作用部の側縁が直線的で長く、基部の挟りが深いことから、B-1類に属する。残存する最大長25.5mm、重さ0.91gである。作用部は鋸歯縁となる。AD125は長原12Biv層から出土した凹基無茎式石鏃である。切先と側縁の一部を欠損する。作用部の側縁が緩やかなS字状を呈しており、基部の挟りが深いことから、D-1類に属する。残存する最大長13.3mm、重さ0.34gである。小型でやや薄手の石鏃である。AD126は古川辺川内の長原12Biv層から出土した凹基無茎式石鏃である。中央で縦方向に折れ、その片方が残る。作用部の側縁が緩やかなS字状を呈しており、基部の挟りが深いことから、D-1類に属する。残存する最大長18.6mm、重さ0.53gである。

iv)その他の調査

本調査地でも長原遺跡東南地区の後期旧石器時代の文化層である長原13A・B層および長原14層について、路線内のほぼ全域を対象とした調査を実施した。その結果、2区の東部に位置する流路NR903の西肩の近くと、これから西に約20m離れた地点で、長原13A層の上部から後期旧石器時代に属するものと考えられるサヌカイト製の剥片が出土した。しかし、出土した石器遺物は両地点合わせてわずか4点で、これまでに周辺で確認されている石器製作に伴う集中部の状況とはまったく異なっていた。

一方、1区に東接するNG89-19次調査地では、長原12/13層漸移帯から膨大な量の石器遺物を伴った集中部が発見されているが、本調査地では原位置をとどめた石器は1点も出土しなかった。以上の所見や発掘土の洗浄・篩別でもサヌカイト製の剥片がまったく捕収されなかったことを考慮して、ここでは、本調査地は旧石器時代の石器製作に関わる場所の外れに当たるものとみておきたい。

4)小結

本調査地では、縄文時代中期以前の流路や弥生時代前期の溝・土壌をはじめ、飛鳥時代から江戸時代にかけての水田址やこれに付随した溝が検出された。また、出土遺物の量は調査面積の割には少なかったが、旧石器時代後期のサヌカイト剥片、縄文時代早・前期の有茎尖頭器や石鏃、縄文時代中期の石鏃、長原式土器および斧柄、弥生時代中期の磨製石庖丁をはじめ、古墳時代中期から江戸時代にかけての土器類などが出土した。また、調査地の基本層序は長原遺跡南部の標準層序に対応することが確認されたが、これは長原遺跡と八尾南遺跡の層序の比較検討を行う上での補足資料となった。ところで、今回の調査でもこれまで長原遺跡で最古と推定されている長原14層準の旧石器がわずかに1点ながら出土した。これはサヌカイト製剥片で、多数の乾痕が見られる長原15層の上面に堆積した長原14層の最下層から出土した遊離資料であるが、磨滅していないことから、近隣の石器製作に係った場所から流入したものと考えられる。これまで長原14層準の調査は対象とする地層が深いこともあって、周辺ではあまり実施されなかったが、本調査でも旧石器の出土が確認(調査地域で本例を含めて3地点で石器遺物が出土)された以上、周辺部における今後の発掘調査にかかる期待は大きい。

第3節 92-24次調査

1) 層序

調査地の基本層序は長原遺跡の標準層序にほぼ対応するが、図示したように長原4A層より上位の地層は土取りにあっており確認されなかった(図43、図版9)。

長原4A層は明黄褐色砂礫混りシルトを主体とする水成層で、層厚は10cm前後ある。

長原4Bii層は灰褐色シルト～砂礫混りシルトで、層厚は10～30cm前後ある。本層は平安～鎌倉時代の土器類を包含しており、上面および下面で溝や土壌が検出された。

長原4Biii層は黄灰色粘土質シルト～砂礫混りシルトで、層厚は10cm前後あり、平安時代の土器類が出土した。本層は調査地のほぼ全域に分布しており、上面および下面で柱穴や土壌が検出された(図版10)。

長原5A層は灰黄色砂礫を主体とする水成層で、層厚は10～30cm前後ある。

長原6A層は黄灰色粘土質シルトで、層厚は20cm前後ある。本層は調査地のほぼ全域に分布する水田の作土であり、上面および基底面からヒトや偶蹄類の足跡が確認された(図版9)。

長原6B層は黒褐色シルト質粘土で、層厚は10～30cmあり、古墳～飛鳥時代の土器類が出土した。

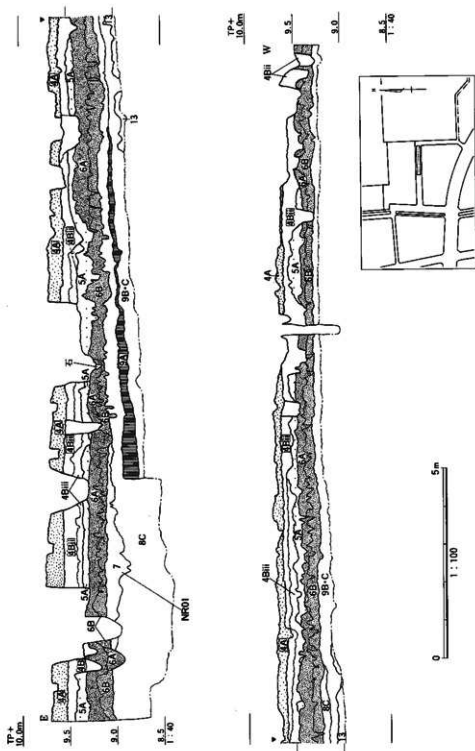
長原7層は黒褐色細粒砂混りシルトおよび黒灰色粗砂～シルトで、層厚は20cm前後ある。本層は調査地の東端に位置する浅い窪地NR01の周辺に分布しており、古墳時代後期の土器類が出土した。

長原8C層は灰黄色粗砂・砂礫からなる水成層で、層厚は10～20cmあり、調査地の東部に位置する流路内では最大層厚が約80cmあった。

長原9A層は褐色粗砂混りシルト質粘土で、層厚は10～20cmあり、調査地の中央部から東部に向かって層厚を増す。本層の上面で流路が検出され、周辺から多数の長原式土器の細片が出土した(図版10)。

長原9B・C層は灰黄褐色シルトで、層厚は20cm前後ある。

長原13層は含細礫にぶい黄橙色シルトである。調査地の中央部のみで確認されており、上面はTP+9.1m前後ある。



2) 各層出土の遺物

i) 長原4Bii層出土遺物(図44、図版27)

48は口径8.8cm、器高1.4cmで、口縁部が「て」字状の土師器皿である。49は口径9.2cm、器高約2cmの土師器皿で、口縁端部をやや尖りぎみにおさめている。50は口径9.8cm、器高2.7cmで、口縁部は体部からいったん開いた後、外反する土師器皿である。51は口径10.2cm、器高3cm前後で、口縁部は体部から外上方に開く土師器皿である。以上の土師器皿のうち、49-51は体部の外面をユビオサエで整えている。52は口径12.6cm、器高4.0cmの土師器碗で、口縁部は頸部からわずかに直立した後、外上方に開く。頸部以下の器表面をユビオサエで整えており、底部は小さな平底をなす。54は体部の下半を欠損しているが、口径12.4cmの土師器碗である。口縁部はわずかに開いており、体部の外面をユビオサエで整えている。62・63は口径27.4-27.6cm、器高8.5cmの土師器鉢で、前者は底部を欠損しているが、後者は径約10cmの貼付け高台を有する。ともに口縁部に強いヨコナデを加えており、端部を面取る。以上の土師器の色調は橙色および黄橙色を基調としており、焼成は良好で、胎土中に長石・チャート・雲母を含むものが多い。

53は口径12.6cm、59は口径15.6cm、器高5.2cm、60は口径14.0cm、器高6.2cm、66は口径14.8cmの黒色土器碗である。口縁端部の内面に沈線が巡る53、端部が内傾する59、端部を丸くおさめる60・66がある。いずれも器体の内面に炭素を吸着した黒色土器A類であり、胎土中に微細な長石・雲母を含み、焼成は良い。高台径5.8cmの58も黒色土器A類の碗の底部片である。以上の黒色土器A類および土師器は11世紀の前半代に属するものと思われる。

55は底部の中央を欠損しているが、口径8.2cm、器高1.6cm前後の瓦器皿である。器面がやや磨滅しており、形態からみて後世の混入品かと思われる。

56は底径が5cm前後の須恵器壺の底部片である。裏面に静止糸切り痕がある。色調は灰色で、胎土中に長石を多く含む。61は口径13.2cmの須恵器広口壺である。口縁部は緩やかに外反する頸部から水平に開き、端部をつまみ上げている。全体をヨコナデ調整しており、色調は灰白色である。56・61ともに9世紀の後半代に属するものであろう。

57・69は龍泉窯系の青磁碗で、前者は高台径5.7cmの底部片、後者は口径17.3cmの体部片である。ともに11世紀代に属するものであろう。

70・71は口径15.4-17.2cmの土師器甕で、口縁部はともに短く開くが、前者は端部を面取っており、後者は上端が浅く凹む。11世紀の前半に属するものであろう。

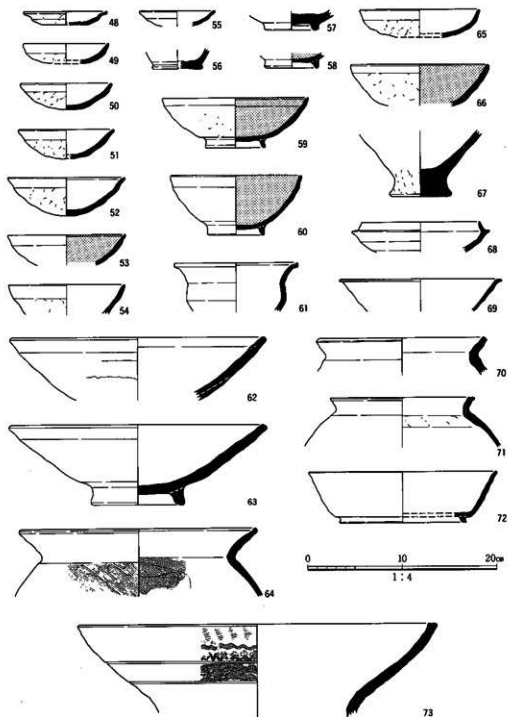


図44 長原4Bii、4Biii層出土遺物実測図

ii) 長原4Biii層出土遺物(図44・45、図版27)

64は口径25.4cmの土師器甕で、口縁部は外反しており、端部をわずかにつまみ上げている。体部の内外面を左上がりのやや粗いハケで整形している。色調は浅い黄橙色で、胎土中に長石・雲母・チャートを含む。65は口径12.8cm、器高2.9cmの土師器杯で、口縁部は体部から外上方に開いており、端部は丸い。

67は底径6.6cmの弥生土器甕の底部である。色調は橙色で、胎土中に長石・角閃石・チャートを含む生駒西麓産の土器である。

68は口径12.5cmで、立上がりりがやや内傾する須恵器杯身である。器体の全体をヨコナデ調整している。72は口径約20cm、器高5.5cmの須恵器杯身で、底部にわずかに外傾する高台がつく。73は口径38.4cmの須恵器甕で、口縁部は外上方に開いた後、内湾しながら外上方に伸びる。口縁端部は強いヨコナデを加えて面取るが、上端面は浅く凹む。口縁部のほとんどを2条のぶい凹線文で区画して、上から薔薇刺突文および波状文を施している。以上の土器のうち、弥生時代中期後半の甕67、TK209に属する須恵器杯身68以外はMT21型式に属するものと思われる。

74~76は口径9.4~9.7cm、器高2.2~2.7cmの土師器皿である。いずれも口縁端部を丸くおさめており、76の体部の外面はユビオサエで整えている。77は口径13.2cm、器高約2cmで、口縁部が「J」字状の土師器皿である。84は体部を欠損しているが、口径27.2cmの土師器羽釜である。口縁部は頸部からわずかに内傾しながら立上がり、鐔は器体に貼付けられている。色調はぶい褐色で、胎土中に長石・角閃石・雲母を含む生駒西麓産の土器である。

78・79は口径14.8~15.0cm、器高5.6cmの黒色土器A類の碗である。口縁端部は78が丸く、79は内傾しており、後者の内面には暗文が施されている。

85は口径41.6cmに復元された須恵器甕である。口縁部は緩やかに外反しており、下端をわずかに垂下させている。口頸部の外面は平行タタキの後、ヨコナデ調整を施している。

以上の土器のうち、74~79・84は11世紀前半に、85は8世紀代に属するものであろう。

iii) 長原7層出土遺物(図45、図版27)

80は口径約13cmの須恵器杯身で、立上がりりはやや内傾しており、口縁端部は丸い。81~83は口径13.8~16.6cm、器高4.0~4.8cmの須恵器杯身である。いずれも口縁部と天井部の境界にはぶい凹線が巡り、口縁端部は内傾している。天井部を81・83は2/3以上、82は1/3をヘラケズリ調整している。色調は灰~灰白色で、焼成は良い。80~83はTK10型式に属するもので、これらは調査地東部の窪地内から出土した。

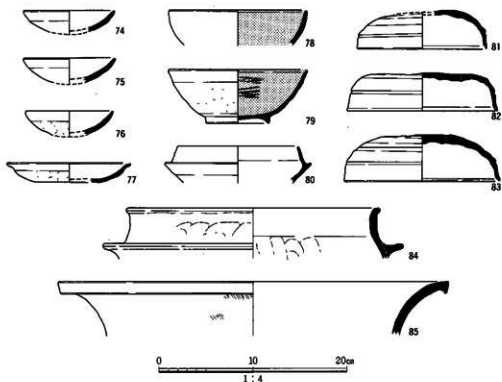


図45 長原4Biii、7層出土遺物実測図

3) 遺構とその遺物

i) 平安時代の遺構と遺物

(1) 溝

SD501(図46・47、図版28) 調査地の東部の西に位置する南北方向の溝で、幅0.6m前後、深さは約0.2mである。溝内には黒色シルトが堆積しており、土師器や黒色土器A類碗などが出土した。

86は口径10.0cm、器高1.6cmで、口縁部が「て」字状の土師器皿である。色調は黄橙色で、胎土中に長石・赤色粒を含み、焼成は良い。87は口径10.3cm、器高2.6cmの土師器皿である。口縁端部は浅く凹む。

93は口径14.6cm、器高5.0cmの黒色土器A類碗である。口縁端部がわずかに内傾しており、細い沈線が巡る。高台は径7.6cmで、下端は丸い。88は高台径約6cmの黒色土器A類碗の底部である。以上の土器類は11世紀の前半代に属するものと思われる。

SD502(図46・47) SD501の西側に位置する幅0.5m前後、深さ0.25mの南北方向の溝である。溝の上部を後世に削平されており残りは悪い。溝内には灰褐色シルトが堆積して

おり、軒丸瓦や土器類が出土した。

97は複弁蓮華文軒丸瓦の瓦当である。中房を欠損しているが、外区内縁に珠文、内区に複弁の蓮華文を配置している。8世紀末ごろの長岡宮式複弁7葉蓮華文軒丸瓦に酷似している。

SD503(図46・47、図版27) SD501の東側に位置する幅0.8~1.3m、深さ約0.2mの南北方向の溝である。溝内には灰褐色シルトが堆積しており、土師器が出土した。

91は口径13.8cm、器高4.2cmの土師器碗である。口縁部は体部から外上方に伸びており、端部は丸い。体部の外面はユビオサエで整えている。色調は灰褐色で、胎土中に長石・雲母を含み、焼成は良い。96は土師器の把手で、器面に煤が付着することから鍋の把手と思われる。以上の土器は11世紀の前半に属するものである。

(2)土壌

SK501(図46・47、図版28) SD503の東側に位置する長辺が2.5m前後、深さ0.3m前後の土壌状の遺構である。調査の過程で輪郭を確認しがたかったこともあって、全体の形状や規模は明らかでない。土壌の西側をSD504に、北東部をSK502の掘込みで破壊されている。埋土は灰褐色シルトで、黒色土器をはじめ、土師器の細片や瓦が出土した。

89は縄タキが施された平瓦である。色調は灰白~にぶい黄橙色で、焼成はあまい。

92は口径13.0cm、器高4.9cmの黒色土器B類碗で、口縁端部がわずかに内傾している。高台は径6.4cmで、下端を丸くおさめている。11世紀の前半代に属するものである。

SK601(図46・47、図版27) SK501の北東に位置する直径約0.8m、深さ約0.2mの土壌である。埋土は灰褐色砂礫混りシルトで、土師器が出土した。

90は口径12.6cm、器高3.7cmの土師器杯で、緩やかに内湾する体部から口縁部は外上方に

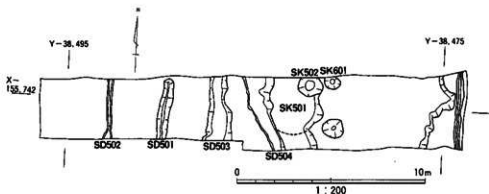


図46 調査地東部長原5A層上面検出遺構配置図

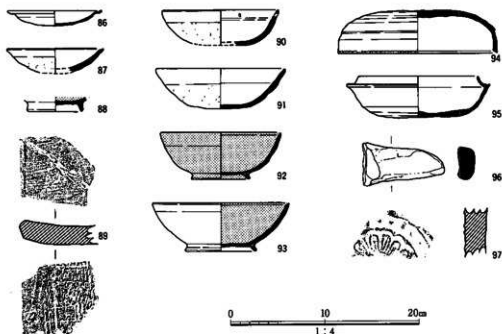


図47 SD501～503、SK501・601、NR01出土遺物実測図

開いており、内面に沈線が巡る。口縁端部はわずかに内傾しており、下端に紐穴を穿つ。色調は2次的に火を受けて浅い橙色を呈しており、胎土中に長石・雲母を含む。11世紀の前半に属するものである。

ii) 古墳時代の遺構と遺物

(1) 窪地

NR01(図43・47、図版28) 調査地の東部に位置する窪地で、黒褐色細粒砂混りシルトが堆積しており、古墳時代後期の須恵器が完形で出土した。

94は口径17.0cm、器高4.5cmの須恵器杯蓋である。口縁部と天井部の境界を幅広くヨコナデ調整しており、にぶい稜をなす。口縁端部は内傾して浅く凹んでおり、外端部にはキザミが施されている。天井部の1/3をヘラケズリ調整する。95は口径12.6cm、器高4.3cmの須恵器杯身で、立上がりは受部から内傾しており、口縁端部は丸い。底部の1/3をヘラケズリ調整している。ともにTK10～MT85型式に属するものである。

4) 小結

調査地は縄文時代晩期～弥生時代前期の墓地をはじめ、飛鳥～室町時代にかけての集落址や水田址が検出された大阪市立平野養護学校[大阪市文化財協会1983]に隣接することか

ら、同様な遺構が確認されるものと思われた。しかし、調査地中央部から以西については、近世以後の土取りによって削平されており、主たる調査は東部のみとなった。ただし、地層については断続的ながら追求することができ、長原遺跡の標準層序との検討も実施された。また、遺構に伴ったものではないが、11世紀の前半代の黒色土器A類碗や土師器皿・碗をはじめ、6世紀中葉の須恵器杯身・蓋などが完形で出土しており、これらは当地が古墳時代および平安時代の集落の一画に当ることを示唆している。

第4節 92-34次調査

1) 層序

本調査地は北に張出す舌状台地の先端部に当り、南から北へと緩やかに落込む。したがって、層序も北部に行くほど良好に遺存していた(図48・49、図版11)。

長原1層は現代の作土である。

長原2層は灰色含粘土粗粒砂で、調査地南部で部分的に遺存する。出土遺物から判断して江戸時代の作土と思われる。

長原4A層は暗オリーブ色中～細粒砂からなる水成層であり、下位の水田面を覆うとともに、踏込み内に堆積していた。

長原4Bi層は暗灰黄色含砂粘土で、調査地のほぼ全域に分布する。下位ほど砂を多く含む水田の作土である。サヌカイト製剥片(磨滅剥片)が1点出土した。

長原4Biii層は暗オリーブ褐色砂質粘土で、調査地のほぼ全域に分布する水田の作土である。

長原6-7層は黄灰～黒褐色含砂粘土で、調査地全域に分布しており、北部ほど黒味が強くなり粘性を増す。本層は2分されるべき地層であるが、層理面が不明瞭であり分層できなかった。長原6-7層最下部からサヌカイト製石核1点・剥片(小剥片)1点、風化したサヌカイトの剥片(小剥片)が1点出土した。

なお、調査地の北端部のみで長原7層に相当する黑色粘土を確認したが、上層との層理面は不鮮明であった。

長原8Ci層は黄褐色粗粒砂を主体とする水成層で、調査地の中央以北においてのみ層厚10cm以下で堆積していた。

長原8Cii層は褐灰色粘土からなる水成層で、調査地北部に分布しており、上面には足跡状の窪みが多数認められた。

長原9A層はオリーブ黒～黒褐色粘土および粘土質シルトで、調査地の北端にのみ薄く堆積していた。サヌカイト製の石鏃3点、風化した安山岩製の砥石が1点出土した。

長原9B層は灰黄褐色粘土質シルトで、調査地北部に部分的に薄く堆積していた。

長原9C層は黒褐色含粘土粗粒砂～粗粒砂で、調査地の北端にのみ分布していた。

長原10・11層は暗灰黄色粗粒砂を主体とする水成層で、調査地北部では連続的に、南部では部分的に堆積していた。長原10層上乾痕(長原9層?)からサヌカイト製剥片が1点出土

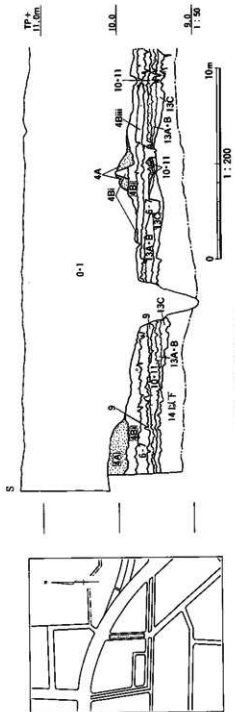
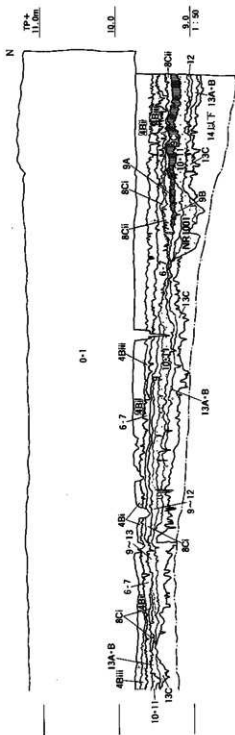


图48 西墙断面模式图

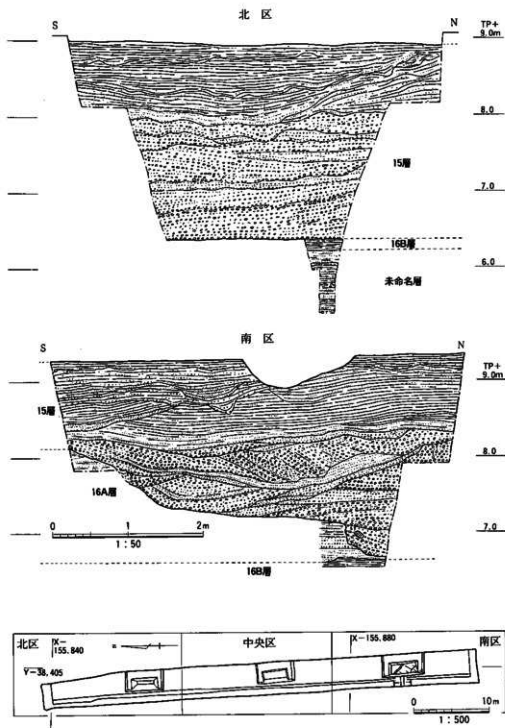


図49 北・南区深掘りトレンチ西壁断面実測図、地区割り図

した。

長原12層は暗オリーブ褐色細粒砂質シルトで、調査地の北端と南端にのみ薄く堆積していた。

長原13層は灰黄色細粒砂質シルトを基調とする。しかし、調査地中央部以南の高所では、長原9層以下本層までの地層が風化して古土壌となっていた。このような地層は調査地の周辺の微高地でも確認されており、上層と下層との境が不明瞭であるという特徴がある。以下に長原13層が細分できた部分について記述する。

長原13A・B層はにぶい黄褐色シルト～シルト質粘土で、本層よりサヌカイト製の剥片が1点、風化したサヌカイト製の横形剥片が2点出土した。

長原13C層は黄褐色シルト質粘土である。

長原14層は黄褐色粘土～含砂粘土で、調査地南部に薄く堆積していたが、下層との区別が困難であり、明確に区分することはできなかった。

長原15層以下の層序については本調査では掘削深度の関係上、南区に設定した深掘りトレンチのみで確認した。

長原15層は黄褐色含砂粘土～緑灰色礫で、層厚約100cmの粘土質優勢の部分と、下位の砂礫優勢の部分とに大きく区分できる。下位の砂礫層は南区に設定した深掘りトレンチ以北で長原16B層まで大きく削込むように堆積していた。

長原16A層は緑灰色粘土質細粒砂～細粒砂からなる水成層である。

長原16B層は緑灰色粘土～粘土質シルトで、植物遺体を少量含む。層厚は約15cmあった。NG91-1次調査では本層の上面付近で化石林が検出されている。なお、本層以下で未命名層の灰～緑灰色細粒砂・粘土の互層を確認した。このうちの砂質粘土層は火山灰を含む。

2) 各層出土の遺物

i) 長原4Bi層出土遺物(図50)

98・99は口径9.8cm、器高1.7～2.5cmの土師器甕である。99は98より体部が深く、外面にはユビオサエが残る。100・101は黒色土器碗で、ともにA類に属する。102・103は口径11.8～16.2cmの土師器甕である。ともに口縁端部を面取っており、小型の102は体部の外面をユビオサエ、内面をヘラケズリで整えている。104は口径17.3cmの須恵器甕で、口縁部は頸部から短く開く。体部の外面に粗い平行タタキが残る。色調は灰色で、焼成は良

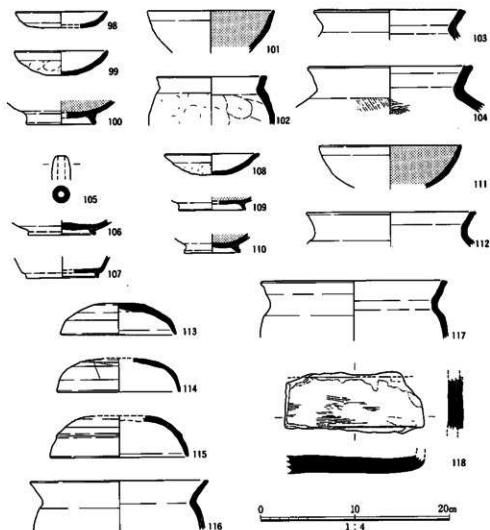


図50 長原4Bi、4Biii、7層出土遺物実測図

い。以上の土器類のうち、黒色土器は11世紀の後半に属するもので、須恵器も平安時代中ごろのものであろう。

ii) 長原4Biii層出土遺物(図50)

105は土師質の土鉢の破片で、孔の径は直径8mm前後ある。106は高台の径が7.2cmの土師器碗である。107は高台の径が7.5cmの須恵器杯身である。高台は体部の端近くに貼付けられており、長方形を呈している。108は口径10.0cm、器高2.2cmの土師器皿で、口縁端部はわずかに開く。109・110は黒色土器A類碗の底部である。111は口径15.2cmの黒色土器A類碗で、口縁端部を丸くおさめている。112は口径18.0cmの土師器甕で、頸部上半にヨ

コナデを加えて口縁部を外反させている。色調はにぶい橙色で、胎土中に長石・雲母を含む。

iii) 長原7層出土遺物(図50)

113は口径12.4cm、器高3.2cmの須恵器杯蓋で、口縁部と天井部の境界は丸い。天井部をヘラ起しの後、ナデている。114は口径13.2cm、器高3.5cmの須恵器杯蓋で、口縁部と天井部の境界は丸い。天井部の2/3を右回りのヘラケズリで調整しており、ヘラ記号が見られる。口縁部の外端面をヘラ先で調整している。115は口径14.6cm、器高4cm前後の須恵器杯蓋で、口縁部と天井部の境界はにぶい稜をなし、天井部の2/3以上をヘラケズリで調整している。口縁端部は沈線状に内傾している。以上の須恵器のうち、113はTK217型式、114はTK43型式、115はMT85型式に属するものである。

116・117は18.8~19.7cmの土師器甕で、ともに口縁部は外反するが、116は口縁端部をわずかに肥厚させており、117は上端面が沈線状に凹む。ともににぶい橙色を呈しており、胎土中に長石・雲母を含む。6世紀の後半から末ごろに属するものであろう。

118は家形埴輪の壁の一部と思われる破片で、器表面にヨコハケの後、粗いナデが施されている。色調は橙色を呈しており、焼成は野焼きによっている。

iv) 長原9A、9C、13層出土遺物

石鏃(図51・56、図版35・36) AJ94は長原9A層から出土した凸基無茎式石鏃である。切先をわずかに欠損する。全体の形が木葉形を呈しておりG類に属する。残存する最大長29mm、重さ1.5gである。小型であるが、厚手の石鏃である。AJ114は長原9A層から出土した凹基無茎式石鏃である。完形で、作用部の側縁が緩やかなS字状を呈しており、基部の挟りがやや浅めであることから、D-2類に属する。最大長24.2mm、重さ0.53gである。本来は長原12層に伴うものであろう。AJ109は長原13層内にできた長原9A層準の乾痕から出土した。一方の側縁を欠損する凹基無茎式石鏃である。作用部の側縁が直線的で長く、逆刺が丸みをもつことから、B-2類に属する。残存する最大長27mm、重さ1.61gである。本来

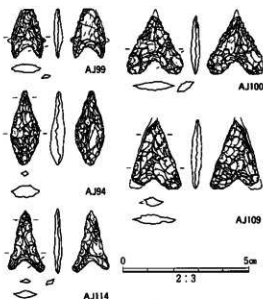


図51 長原9A、9C、13層出土石器遺物実測図

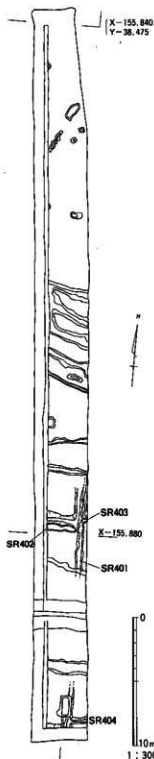


図52 長原4Bi層上面検出
遺構配置図

は長原9C層に伴うものと思われる。

AJ100は長原9C層の乾痕から出土した凹基無基式石鏃である。切先が折れており、使用時に欠損したものと思われる。作用部の側縁は直線的で、基部の挟りが深く、逆刺に丸みがあることから、A-2類に属する。残存する最大長22.7mm、重さ1.16gである。この型式としては大型品であり、本来は長原12層に伴うものと思われる。

AJ99は長原13層から出土した凹基無基式石鏃である。切先と一方の側縁を欠損する。作用部の側縁下部に横方向の突起を有する。側縁は鋸歯状となる。残存する最大長18.9mm、重さ0.65gである。片面に先行剥離面を広く残す。

3) 遺構とその遺物

i) 平安～室町時代の遺構

(1) 水田址(図52、図版11)

南区以南で、長原4Bi層上面から南北方向の畦畔SR401と東西方向の3条の畦畔SR402～404を伴う水田址を検出した。おもな畦畔の幅は約0.5m、高さは0.1m程度である。SR402には水口が設けられており、本畦畔の北側と西側には導水に係わるものであろうと思われる溝状の窪みがあった。また、水田面にはヒトや偶蹄類による多数の踏込みが認められた。この踏込みは調査地北部でも認められたため、畦畔こそ失われてしまったものの、北部でも水田面はさほど削平を受けていないことがわかった。

本水田址は調査地の近隣に位置するNG14次調査地およびNG91-21次調査地で検出された室町時代の水田址に続くものである。

一方、中央区では長原4Bi層の下面において、耕作に伴うものとみられる南北方向の鋤溝群を、さらに本層直下の長原6-7層の上面で、作土を踏込んだ偶蹄類の足跡群を検

出した。

ii) 古墳時代末～飛鳥時代の遺構と遺物

調査地全域で、長原6～7層の下面から溝・土壌・路込みなどを検出した。なお、SD702～704は長原8C層上面で確認された遺構であるが、埋土からみて長原7層準の遺構と判断される。

(1) 溝

SD701(図53・図版11) 北区の北部に位置する南東から北西方向の溝である。幅約0.5m、深さ約0.1mあり、断面の形態は台形である。底面には凹凸が見られる。遺物は出土しなかった。この溝はNG91-20次調査地に続いており、ここでは溝内からTK209型式の須恵器杯蓋が出土している。古墳時代後期末の水田に伴う溝であろう。

SD702(図53、図版11) SD701の南側に位置する南東から北西方向の溝である。遺構そのものはほとんど失われており、検出面である長原8C層の粗粒砂に溝の埋土が染み込んだ状態で確認された。

SD703(図53、図版11) SD702の南側に位置する東西方向の溝である。幅約0.4m、深さは0.10m以下であり、底面には凹凸が見られる。

SD704(図53、図版11) SD703の南側に位置する南西から北東方向の溝であるが、SD702と同様に後世の削平を受けており残りは悪い。

(2) 倒木痕跡(図53)

調査地全域で、長原6～7層の基底面から大小さまざまな不整形な土壌状の窪みを検出した。特に北区の南寄りでは大きなものが多く、深さも0.15m以上のものがあった。いずれも窪みの側面や底面には凹凸が見られ、形も不整形であることから、人工のものというよりも倒木痕跡、あるいは木の根など自然の要因によって形成されたものと考えられる。若干

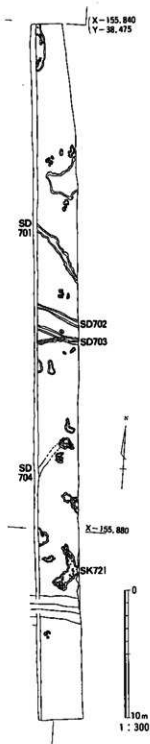


図53 長原6～7層下面検出遺構配置図

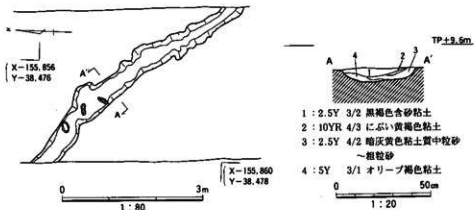


図54 SD701実測図

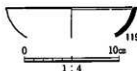


図55 SK721出土遺物実測図

の須恵器片が出土した。また、図示していないが踏み込み状の窪みも全域で確認された。特に南区において顕著に見られ、なかには偶蹄類と判断できるものもあった。

(3) 土壌

SK721(図53・55、図版11) 南区の南部に位置する平面形が不整形な土壌で、長さ約2.4m、幅1m前後、深さ0.1mあり、長原6～7層の下面で検出した。埋土は黒褐色含砂粘土で、少量の土器片が出土した。

119は口径13.8cmで、口縁端部が内傾する土師器杯である。器面が磨減しており、調整は不明である。色調は黄褐色で、胎土は精良である。飛鳥ⅡないしⅢに属するものであろう。

iii) 後期旧石器～縄文時代の遺構と遺物

(1) 流路

NR1001(図56、写真5) 北区の長原12層の上面から検出された幅約1.3m、深さ約0.2mで、南西から北東方向に流れる流路である。流路内には長原10・11層準に相当する暗灰黄色粗粒砂が堆積しており、風化したサヌカイト製の横形剥片が1点出土した。

このほかにも流路の周辺では、南端で浅い流路状の窪み、南部で倒木の痕跡と思われる径2m前後の窪みを検出したが、これらにもNR1001と同様の砂礫が堆積していた。

(2) その他の遺構と遺物(図56)

長原8C～13A・B層からはサヌカイト製の剥片・石鏃が出土した。小規模な石器遺物の集中部と思われるものもあったが、出土範囲は調査地全域にわたり、特に集中する個所は見られなかった。周辺の調査結果からも、この付近はやや石器遺物の希薄な地点といえよう。



写真5 NR1001(北から)

4) 長原15層以下の調査

本調査地に近接するNG91-1・92-5次両調査では、これまでに長原15層基底面および長原16A層上面でナウマンゾウの足跡が検出され、当層準で人類の生活痕跡が発見される可能性を示した。そのため、今回も当層準の調査を試みることにして、長原16A層上面の堆積状態を観察するため、北より北区・中央区・南区の3個所において試し掘りを実施した(図49)。

北区・中央区では長原16B層まで長原15層の砂礫によって大きく削込まれていた。長原16B層上面のレベルはともにTP+6.4mであった。また、北区においては長原16B層以下までさらに掘下げ、TP+5.8m付近の未命名層中より火山灰を採集した。この火山灰はNG91-1次調査では認識できなかったものである。現在も分析中であり、結果によっては同様な火山灰が確認されている山之内遺跡との対比を含めた年代の決定につながる期待がもたれる。

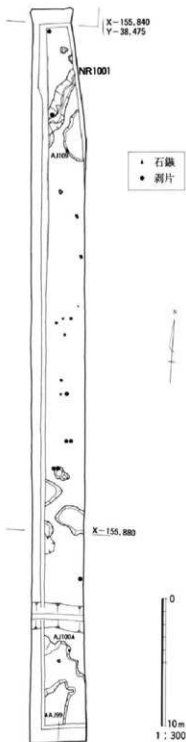


図56 長原12層上面検出遺構配置・出土石器遺物分布図

南区では長原15層準の流路の肩部付近を検出した。長原15層の流路はこの部分より北東に存在するものと考えられる。長原16A層の上面はTP+8.1mで、長原16B層はTP+6.6m前後であった。調査地の南西に位置するNG91-1次調査地では、長原16A層上面はTP+8.3mであり、今回の調査地でも同様なレベルで検出されるものと思われた。以上の深掘りの結果から、当調査地においては長原16A層はほぼ全面に渡って浸食されているものと判断されたため、全面におよぶ調査は断念した。

5) 小結

本調査地では長原4Bi層上面の水田址を比較的良好な状態で検出できた。しかも、従来確認されていた北部ではなく、これまで当該期の水田址が稀であった南部で確認された意義は大きい。

一方、長原6-7層下面で検出した溝は、当地域の飛鳥~奈良時代にかけての水田址に関係する溝であろうが、周辺部でこれまで調査されている一連の溝とのつながりについては本調査では明らかにされなかった。同様な溝は調査地の南西部に位置するNG91-1次調査でも数多く検出されており、今後、周辺部の調査が進めば当地域での導水のようなすがり明らかなるであろう。なお、本調査では長原16A層を対象とした人類活動の有無についての基礎的な資料を得ることを目的とした調査を実施したが、既述したように地層そのものが上位層準の水流などによって浸食されていたこともあって明らかにできなかった。今後の調査に期待したい。

第5節 92-47次調査

1) 層序

調査地の基本層序は長原遺跡の標準層序に対応するが、長原4層より上部の地層については後世の土取りにあっており確認されなかった。また、長原4層についても遺構内で確認されたのみであるため細分できていない(図57、図版12)。

長原4層は灰～灰オリーブ色シルトで、層厚は10cm前後あり、調査地の北部では平安～鎌倉時代の土器類が出土した。本層の下面では溝や土壌が検出された。

長原5A層は黄褐～灰オリーブ色シルト混り粗砂および砂礫を主体とする水成層で、層厚は20cm以上ある。調査地の南部では砂礫層の下に、長原5B層と思われる極細粒砂の薄い層があった。

長原6A層は灰色粘土質シルトで、層厚は10～20cmある。本層の上面では一部で水田の畦畔が検出された。

長原7層はオリーブ黒色シルト混り粗砂で、層厚は約20cmあり、調査地の中央部の窪みの周辺で確認された。

長原8C層は黄褐色細粒砂および中・粗粒砂に2分される。ともに水成層で、層厚は10cm前後ある。

長原9A層は暗オリーブ色シルト質粘土で、層厚は10～30cmあり、調査地の南部から北部に向って徐々に層厚を増している。

長原9B・C層は黒色シルト質粘土で、層厚は10～20cmあり、調査地の北部では下部に砂礫を多く含む。

長原10・11層は明黄褐色細～中粒砂で、層厚は60cm前後ある。調査地の中央部で確認された下位層準の流路内では層厚が約100cmあった。

長原12A層はオリーブ黒色砂混りシルト質粘土で、層厚は10～20cmある。本層はトレンチ内でのみ確認されており、調査地の中央部に位置する流路に向って堆積しているようであった。

長原12B・C層は灰オリーブ色細粒砂およびオリーブ灰色粘土で、上下の地層のつながりからみて本層準としたが確証はない。

長原13A・B層は浅い黄色粘土である。地層観察用のトレンチ内でのみ確認した。

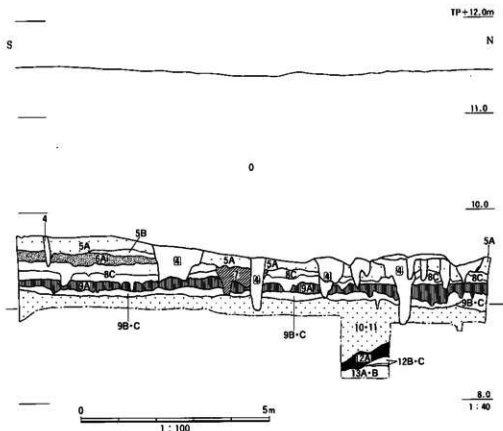


図57 西壁断面模式図

2) 各層出土の遺物

i) 長原4層出土の遺物(図58、図版28)

120～123は口径10.0～14.6cm、器高1.4～2.6cm前後で、口縁部が「て」字状の土師器皿である。色調は灰白色の122以外は黄橙色を基調としており、胎土中に長石・雲母を含むものが多い。焼成はいずれも良好である。124～126は口径9.6～10.3cm、器高2.1～2.4cmで、浅い体部から口縁部が外上方に開いた土師器皿である。126の体部の外面はユビオサエで整えている。色調は124・125が灰白色で、126はにぶい黄橙色である。胎土・焼成ともに上述した土師器皿と変わらない。127～129は口径10.8～14.0cm、器高2.9～3.8cmで、体部から口縁部が上方あるいは外上方に開いた土師器碗である。いずれも口縁端部は丸く、体部の外面をユビオサエで整えている。色調はにぶい橙色を基調としており、127は胎土中に赤色粒を多く含む。136～138は口径13.8～15.4cm、器高3.2～3.4cmの土師器皿である。口縁端

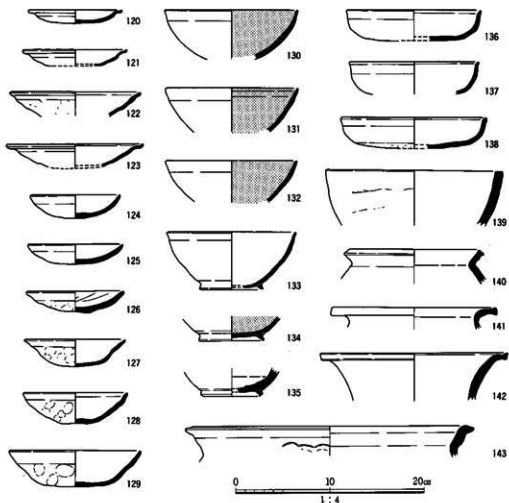


図58 長原4層出土遺物実測図

部を136・137は内傾させており、138は丸くおさめている。色調は橙色で、焼成は良い。139は体部の中ほど以下を欠損した口径18.8cmの土師器鉢である。口縁部の上端が浅く凹む。色調は浅い黄橙色で、胎土中に長石・チャートを含み、焼成は良い。140・141は口径14.9～17.6cmの土師器甕である。口縁部を140は短く外反させており、141は水平におさめている。色調は140が明黄褐色、141は明赤褐色で、ともに胎土中に角閃石を含み、焼成は良い。143は口径30.8cmの土師器羽釜の口縁部で、全体にヨコナデ調整しているが、下端部にはユビオサエが残る。色調は明褐色で、胎土中に角閃石・雲母を含む生駒西麓産の土器である。

130～132は口径14cm前後の黒色土器A類碗である。口縁端部を130は丸くおさめており、

131・132はわずかに内傾させている。134は高台径が約7cmの黒色土器A類碗の底部である。以上の土器の焼成はいずれも良好である。

133は口径13.8cm、器高約6cmの瓦器碗である。口縁部は内湾する深い体部からわずかに開いており、端部を丸くおさめている。器面が磨滅しており、調整は不明である。焼成はややあまい。

135は高台径が6.6cmの須恵器壺の底部である。やや外反した高台は壺の体部に貼付けられている。142は口径約20cmの須恵器広口壺である。口縁部は緩やかに外反する頸部から水平に開き、端部をつまみ上げている。135・142ともに色調は灰色で、焼成は良い。以上の土器類のうち、11世紀の後半代の土師器124～126、瓦器碗133以外は、11世紀の前半代に属するものであろう。

3) 遺構とその遺物

i) 平安時代の遺構と遺物

(1) 溝

SD07(図59・60、図版28) SK01の南に位置する幅0.4m前後、深さ0.2mの東西方向の溝である。溝内には暗オリーブ色砂礫混りシルトが堆積しており、土師器や黒色土器が出土した。

158は口径17.6cm、器高14.2cmで、口縁部が頸部から外上方に開いた土師器甕である。体部の外面はユビオサエで、内面は左上がりのナデおよびヨコナデ調整を施している。色調はにぶい橙色で、胎土中に長石・雲母を含み、焼成は良い。10世紀の後半から11世紀の前半に属するものであろう。

(2) 土壌

SK01(図59・60、図版12・28) 調査地の北部に位置し、最大幅が約1m、深さは0.7m

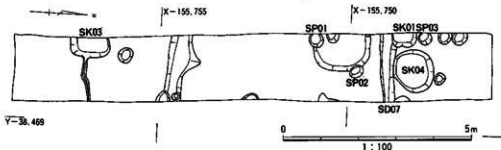


図59 長原4層下面検出遺構配置図

前後である。遺構の上面に長原4B層と思われる暗オリーブ色シルトがあり、内部は暗オリーブ色砂礫混りシルトで埋戻されており、土師器および黒色土器の破片が出土した。

144は口径12.8cmの土師器甕で、口縁部は外反しており、上端面が浅く凹む。145・146は口径9.2～9.4cm、器高1.2～2.4cmの土師器皿である。ともに口縁端部を丸くおさめている。以上の土師器の色調は144が橙色で、145・146は浅い黄橙色である。胎土中に長石・雲母を含み、焼成は良い。11世紀の前半から中葉に属するものであろう。

147・148は高台径が6.6～7.0cmの黒色土器碗の底部である。前者はA類、後者はB類、ともに11世紀の前半に属するものである。

SK03(図59・60) 調査地の南に位置する南北約1m、深さ0.4m前後の土壌で、遺構の東側から幅0.2m前後の溝が東に延びている。埋土は暗オリーブ灰色砂礫混りシルトで、土師器が出土した。

149は口径13.2cm、器高2.2cmで、口縁部が「て」字状の土師器皿である。色調は浅黄橙色で、胎土中に雲母を含み、焼成は良い。11世紀の前半に属するものである。

SK04(図59・60、図版12・28) SK01の東に位置する径約1.2m、深さ0.4m前後の土壌である。埋土は暗オリーブ色砂礫混りシルトで、土師器や須恵器が出土した。

150～152は口径11.6～17.2cm、器高2.5～3.2cmの土師器皿である。150の口縁部は短く

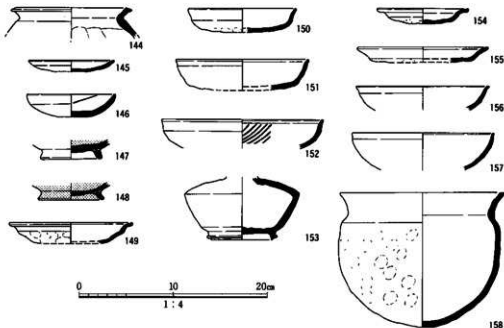


図60 SD07、SK01・03・04、SP01～03出土遺物実測図

開き、151・152は口縁端部の内面が浅く凹む。152の体部の内面には暗文が施されている。これらの色調はにぶい橙色で、胎土中に長石・雲母を含み、焼成は良い。8世紀の後半代に属するものであろう。

153は口頸部を欠損しているが、高台径7.5cmの須恵器細頸壺である。体部の上半に最大径があり、高台は外方に張る。色調は灰白色で、焼成は良い。8世紀の前半に属するものである。

(3) 柱穴

SP01(図59・60) 調査地の中央に位置する径0.35m、深さ約0.2mの柱穴である。柱は抜かれたようであり確認されなかった。

157は口径15.2cmの瓦器碗で、器面はやや磨滅している。体部は緩やかに内湾しており、口縁端部は丸い。13世紀の前半に属するものであろう。

SP02(図59・60、図版12) SP01の北東に位置する径約0.3m、深さ0.2mの柱穴である。柱は上述した柱穴と同様に抜き取られていた。

155は口径14cm前後の土師器皿である。口縁部は浅い体部から大きく開く。156は口径14.2cm、器高2.6cm前後の土師器皿で、口縁端部はわずかに外反している。ともに色調はにぶい橙色で、胎土中に長石・雲母を含み、焼成は良い。11世紀の前半に属するものであろう。

SP03(図59・60、図版28) SK01の北に位置する径0.3m、深さ0.2mの柱穴である。柱痕跡は確認されなかった。

154は口径9.8cm、器高1.6cmで、口縁部が「て」字状の土師器皿である。色調は灰白色で、胎土や焼成は上述した土師器と変わらない。11世紀の前半に属するものである。

4) 小結

本調査では11世紀の前半代を中心とする遺構・遺物が検出され、当地が平安時代の集落内に当ることが明らかになった。しかし、遺構の上半が後世の耕作や土取りによって削平されているため、柱穴については一つの建物としてまとめられなかった。また、一部で長原6A1層準の水田址を確認したが、調査範囲内では水田一筆ごとの区画については明らかにしえなかった。なお、本調査では11世紀の前半に属する土器類が比較的多く出土したが、これらは長原遺跡における平安時代の土器の研究を行う上で良好な資料といえよう。

第6節 92-51次調査

1) 層序

本調査地は川辺町線の道路敷内に当ることから、長原4層までの各層は一部を除いて削取られていたほか、長原5、6層についても後世の水田耕作の擾乱を受けており、一部で確認できたにすぎない(図61)。

長原2層はオリブ褐色(2.5Y4/3)砂礫混りシルトで、1・2区とも下層の水田作土の上面の踏込み内で見られた。

長原4Bi層はオリブ褐色(2.5Y4/3)砂礫混り粘土質シルトで、層厚は10cm前後あり、上面および下面でヒトやウシの足跡群や耕作痕跡などが確認された。

長原4Bii層は灰オリブ色(2.5Y4/3)砂礫で、下層の水田作土の上面の踏込み内のみで見られた。

長原4Biii層は灰オリブ～オリブ褐色(2.5Y4/4)砂礫混りシルトで、層厚は10cm前後あり、上面および下面でヒト・ウシの踏込み群が見られた。

長原6Bii層は黄褐色(10YR4/3)シルト混り砂礫で、層厚は10cm前後あり、2区から1区にかけて堆積する水成層である。

長原7A層は暗灰黄～暗褐色(2.5Y4/2)砂礫混りシルトで、層厚は10cm前後あり、1区では基底面から古墳時代中期の掘立柱建物や土塋をはじめ、ピット群が検出された。

長原7Bi層は灰色(5Y5/1)砂礫層で、層厚は15cm前後あり、砂礫のラミナが観察された水成層である。

長原7Bii層は暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒砂混りシルトを基調とする層厚10cm前後の水成層である。

長原7Biii層は暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘土で、層厚は10～15cmあり、1・2区のほぼ全域に分布する。2区では上面から畦畔や溝をはじめ、ヒトの足跡群が検出された。本層では弥生土器の細片が少量出土したことから、当地域でこれまでに確認されている弥生時代後期末ごろの水田作土と思われる。

長原8A層は暗黄褐色(10YR4/2)シルト混り砂礫および黄褐色シルト質粘土で、層厚は10～15cmある。本層は砂粒のラミナが観察された水成層である。

長原8B層は褐色(10YR4/4)シルト質粘土を基調とする水成層であるが、全体に暗色帯

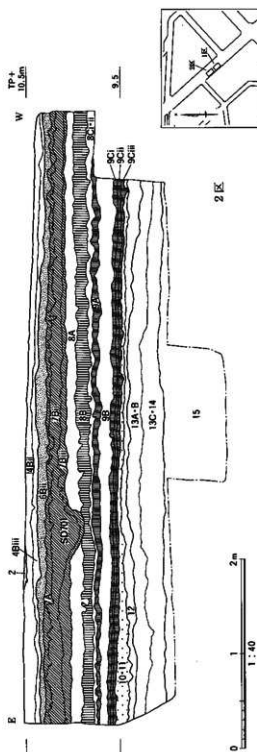
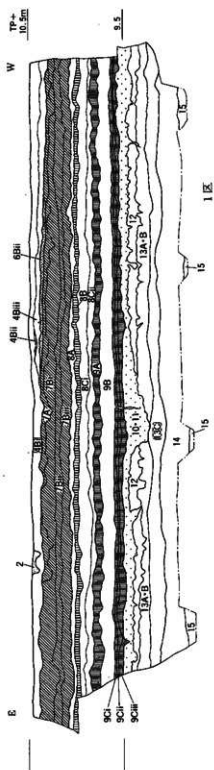


图61 南壁断面实测图

化しているほか、乾痕も見られることから旧表土面と考えられる。

長原8C層は黒褐色(10YR4/4)シルト混り砂礫および暗灰黄色(2.5Y4/4)シルト質粘土～粘土からなる水成層で、層厚は20cm前後ある。本層は砂礫を主体とする上位層とシルト・粘土を主体とする下位層に2分され、前者が長原8Ci層、後者は長原8Cii層に相当する。

長原9A層は灰色(5Y4/1)粘土～暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土で、層厚は10cm前後あり、2区では上部から弥生時代前期の土器片が出土した。

長原9B層は灰(10YR4/1)～暗オリーブ色(5Y4/3)シルト質粘土～粘土層で、層厚は10～15cmあり調査地のほぼ全域で確認された。

長原9C層は黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土～極細粒砂質シルトで、層厚は10～15cmある。本層は3層(長原9Ci～長原9Ciii層)に細分され、上面では植物の根跡や乾痕が見られた。長原9Ci層下部からはサヌカイト製の石鏃2点、長原9Ciii層下部からサヌカイト製の石鏃2点が出土した。

長原10・11層は灰オリーブ色(5Y4/2)粘土混り砂礫～極細粒砂混りシルトで、層厚は5～25cmある。本層は砂礫のラミナが観察された水成層である。

長原12層は灰オリーブ色(5Y4/2)極細粒砂質シルトで、層厚は10cm前後あり、上面には多数の乾痕が認められたほか、2区では本層の上面から流路が検出された。また、1区では本層の上部から縄文時代のサヌカイト製の石鏃が3点出土した。

長原13A・B層はオリーブ灰色(2.5GY6/1)粘土質シルトで、層厚は5～15cmあり、2区では下層との境界が不明瞭である。本層の上面はTP+9.3m前後あり、当地域では後期旧石器時代の文化層とみられている。

長原13C層は暗オリーブ色(5Y4/3)粘土で、層厚は約15cmあり、多数の亀甲状の乾入が見られた。

長原14層は褐色(10Y5/1)～オリーブ灰色(5GY5/1)粘土で、層厚は25cm前後ある。

長原15層は緑灰色(10GY6/1)シルト混り極細粒砂～シルト質粘土で、層厚は60cm以上ある。本層は水成層であるが全体によくしまっており、上面には多数の乾痕が確認された。

2)各層出土の遺物

i)長原2層出土遺物(図62)

159は口径11.2cmで、口縁部を水平に折り曲げた後、端部を玉縁状におさめた瀬戸美濃系の皿である。18世紀の後半代に属するものであろう。160は口径14.8cmで、短く外反し

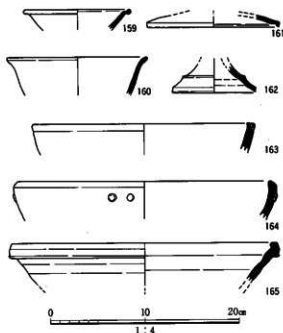


図62 長原2、4Bi層出土遺物実測図

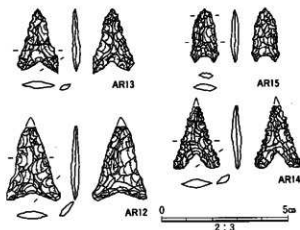


図63 長原9Ci、9Ciii層出土石器遺物実測図

た口縁部の端部を丸くおさめた青磁碗である。内外面に明オリブ灰色の釉を施している。国産の青磁である。

ii) 長原4Bi層出土遺物(図62)

161は口径14.2cmの須恵器杯蓋で、口縁部に強いヨコナデを加えている。9世紀初頭に属するものであろう。162は底径8.8cm、裾部が大きく開いた須恵器高杯の脚部である。脚裾の中ほどににぶい稜線が巡る。ON46段階に属するものである。

163は口径23.6cmで、直口の口縁部を有する弥生土器鉢である。口縁部にヨコナデを加えており、内端をつまみ上げている。164は弥生土器鉢で口径26.8cm、口縁部は体部から内湾しており、端部を丸くおさめる。口縁部の外端面に一对の円形浮文が見られる。色調は163がにぶい黄褐色で、164は黄褐色を呈しており、後者は胎土中に角閃石を多量に含む。163・164ともに畿内第IV様式に属するものである。

165は口径28.2cmで、口縁部を上下に肥厚させた東播系須恵器鉢である。体部から口頸部の内外面をヨコナデ調整している。13世紀に属するものであろう。

iii) 長原9Ci層出土遺物

石鏃(図63、図版35) AR13は凹基無茎式石鏃である。逆刺の一部を欠損する。作用部

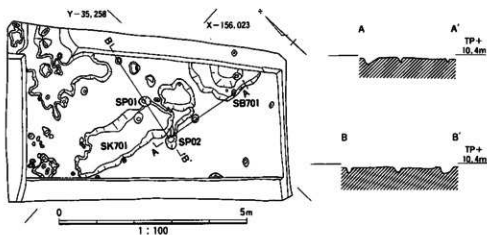


図64 1区長原7A層基底面検出遺物配置図

の側縁が緩やかなS字状を呈し、基部の挟りがやや浅めであることから、D-2類に属する。残存する最大長25.3mm、重さ0.71gである。逆刺の先端は尖る。AR12は凹基無茎式石鏃である。切先と側縁の一部を欠損する。切先は使用時に欠損したものと思われる。作用部の側縁が直線的で長く、逆刺が丸みをもつことから、B-2類に属する。残存する最大長29.1mm、重さ1.67gである。

iv) 長原9Ciii層出土遺物

石鏃(図63、図版35) AR15は凹基無茎式石鏃である。完形で、全体の形が五角形であることから、F類に属する。最大長21.1mm、重さ0.62gである。AR14は凹基無茎式石鏃である。切先を欠損する。作用部の側縁が直線的で長く、逆刺が丸みをもつことから、B-2類に属する。残存する最大長25.1mm、重さ1.02gである。側縁は鋸歯状となる。本来は長原12層に伴うものと思われる。

3) 遺構とその遺物

i) 弥生～古墳時代の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

SB701(図64、図版13) 1区の北東部に位置する掘立柱建物であるが、建物の大半が調査範囲外であるため、全体の規模や構造については明らかでない。柱間寸法は南側柱筋が0.9m、1.2mで西側柱筋は1.2mあり、やや不揃いである。西側柱筋のSP01・02では直径約0.15mの柱痕跡が確認された。建物の時期は柱穴の埋土や建物の周辺から出土した初期須恵器・土師器の細片からみて、古墳時代中期と思われる。

(2) 土壌

SK701(図64、図版13) 1区のはほぼ中央部に位置する長さ3.7m、幅1m前後のやや不整形な土壌で、深さは検出面から約0.2mある。埋土は黒褐色(10YR2/3)砂礫混りシルトで、初期須恵器や土師器の細片が出土した。土壌の時期は掘立柱建物SB701とさほど変わらないと思われる。

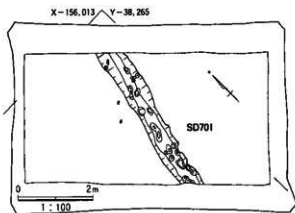


図65 2区長原7Biii層検出遺構配置図

(3) 水田址および溝

調査地のはほぼ全域で水田址が確認された。作土は暗褐色(10YR3/3)含砂礫粘土質シルトである。2区では南北方向の用水路と思われる溝SD701、1・2区では作土の上面に多数のヒトの足跡群が見られた。本水田址は東接する八尾南遺跡で確認されている弥生時代後期末の水田址と一連のものと考えられる。

SD701(図65、図版13) 2区中央部に位置する幅約0.6m、深さ0.2~0.3mの溝で、断面の形状はV字形を呈している。溝内にはにおい黄褐色(10YR4/3)シルト、暗灰黄色(2.5Y4/4)砂礫が堆積していた。砂粒のラミナの方向や、溝底のレベルが北端に比べて南端が高いことから、水は南から北に流れていたようである。

4) 小結

今回の調査では、古墳時代中期の掘立柱建物や土壌をはじめ、弥生時代後期末の水田址や溝が検出されたほか、縄文時代前期ごろかと思われる石鏃なども出土した。これらの遺構・遺物は調査地が八尾南遺跡で確認されている古墳時代中期の集落あるいは弥生時代後末の水田址の一画に当ることを示している。また、八尾南遺跡に東接する調査地の基本層序は長原遺跡南部の標準層序に対応するものであり、これは長原遺跡と八尾南遺跡の層序の比較検討を行う上での基礎資料となった。

第7節 92-62次調査

1) 層序

本調査地では、長原4A層に相当するオリブ灰色砂礫混りシルトより上位の地層は現代の土取りで削平されており確認されなかった。また、基本層序は長原遺跡の標準層序に対応するが、幾つかの地層については耕作などで攪拌されており見られなかった。ここでは、長原4B層以下について記述する(図66、図版14)。

長原4B層はオリブ灰色シルト～細粒砂を基調にしており、層厚は15～45cm前後ある。本層の上面は13世紀代、下面は11～12世紀代の遺構の掘込み面と考えられた。

長原5層は緑灰色細粒砂～シルトおよび灰白色の中・粗粒砂からなる上部層と、暗オリブ灰色シルト質粘土および黄褐色粗砂・細粒砂からなる下部層に2分される。層厚は20～40cm前後あり、砂粒のラミナが顕著に観察された水成層である。本層の上面は後述する主要な遺構の調査面である。

長原6Ai層はオリブ黒色砂質シルトで、層厚は10cm前後あり、上面および下面で耕作痕跡が確認された。奈良時代以後の水田作土である。

長原6Bi層は灰オリブ色粗砂混りシルトで、層厚は10cm前後あり、上面では上位層準の耕作痕跡が認められた。

長原6Bii層は黒褐色シルト質粘土で、層厚は10cm前後ある。2区のみで確認された。

長原7A層はオリブ黒色粘土で、層厚は10cm前後あり、上面および下面で耕作痕跡が確認された。飛鳥時代の水田作土であろう。

長原8Ci層は暗灰黄色の粗砂・砂礫を主体とする水成層で、層厚は40cm前後ある。

長原8Cii層はオリブ灰色シルト質粘土からなる水成層で、層厚は10cm前後ある。

長原9A層は黒～オリブ灰色粘土で、層厚は5～10cmあり、2区の中央部に位置する浅い窪み内では層厚が20cm前後あった。

長原9B層は暗灰黄色シルト質粘土で、層厚は5cm前後ある。本層は上述した長原9A層と同様に、2区中央部の浅い窪み以南で確認された。

長原9C層は黒色粘土で、層厚は10～15cmある。2区の中央部に位置する溝状の窪み内では層厚が30cm前後あった。

長原13A・B層は灰色シルト質粘土で、層厚は10cm以上ある。本層上面はTP+8.15～8.75

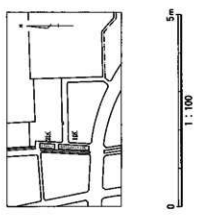
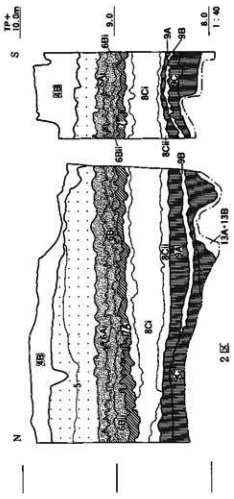
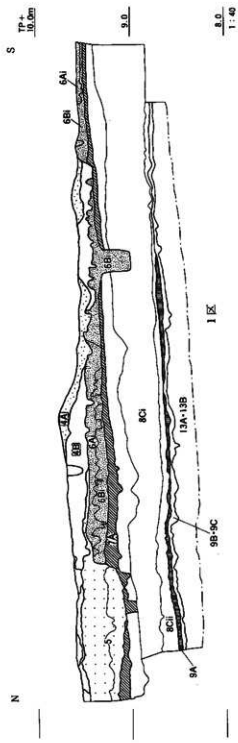


図66 東横断面模式図

mあり、調査地の南から北に向って低くなっている。

2) 各層出土の遺物

i) 長原4B層出土遺物(図67)

166は口径9.4cm、器高約1cmで、口縁部が「て」字状の土師器皿である。167・168は口径9.2~9.4cm、器高2cm前後で、口縁部が体部から外上方に短く開く土師器皿である。ともに体部の外面にユビオサエが残る。169は口径11.2cm、器高2.8cmの土師器杯で、口縁端部がわずかに開く。体部の内面に暗文を施している。170は口径約13cm、器高2.6cmの土師器皿である。口縁部は体部から外上方に伸びる。171は口径約16cmの土師器皿で、口縁部は大きく開く。以上の土器の色調は、浅い黄色の166以外は黄橙色系で、胎土中に長石・赤色粒を含む。焼成は総じて良好である。166~168・170・171は11世紀の前半代、169は飛鳥Ⅲに属する。

172は口径約15cmの瓦器碗で、体部は緩やかに内湾しており、端部はわずかに内傾している。器体の内外面に横方向のヘラミガキを密に施している。12世紀の後半に属するものである。

178・179は高台径6.8~7.8cmの黒色土器A類碗の底部である。11世紀の前半から中ごろに属するものであろう。

ii) 長原5層出土遺物(図67)

173は口径9.0cm、器高5.4cmの土師器小型丸底壺である。口縁部は頸部から外反しており、端部を丸くおさめている。口頸部はヨコナデ調整で、体部の内外面はナデ整えている。174は口頸部を欠損しているが、底径約4cmの土師器小型高杯である。脚部はユビオサエで整形されており、杯部は内外面をナデ仕上げている。ともに色調は橙色で、胎土中に長石・シャモット・雲母を含み、焼成は良い。8世紀の後半代に属するものであろう。

iii) 長原7A層出土遺物(図67、図版28)

175は口径11.7cm、器高3.4cmの須恵器杯蓋である。口縁部と天井部の境界の後はにぶいが、天井部の約2/3をヘラケズリ調整している。口縁端部は内面が浅く凹んでおり、口縁部から天井部にかけてヘラ記号がある。176は天井部の中央を欠損しているが、口径12.6cmの須恵器杯蓋である。口縁部の外端面にヘラでキザミを施している。177は口径10.4cm、器高3.6cmの須恵器杯身である。立上がりは短く内傾しており、口縁端部は細い。底部の約1/3をヘラケズリ調整しており、体部の外面にヘラ記号がある。以上の土器は色調が灰白

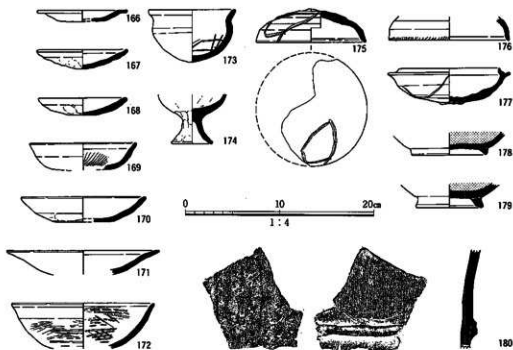


図67 長原4B、5、7A層出土遺物実測図

色で、焼成は良い。TK217型式に属するものである。

180は外面をタテハケ、内面を縦方向のユビナデ調整した円筒埴輪の破片である。色調はにぶい黄橙色で、胎土中に長石・チャートを含み、焼成は窖窯によっている。V期に属するものである。

3) 遺構とその遺物

i) 平安～室町時代の遺構と遺物

(1) 土坑

SK02(図68・69、図版14・29) 1区の中央に位置する径約0.8m、深さ約0.3mの土坑である。埋土はオリーブ黒色シルトで、瓦器が出土した。

198は口径14.8cm、器高約4cmの瓦器碗である。口縁部は体部から外上方に伸びており、端部は丸い。高台径は5.1cmあり、ナデ付けられている。体部の外面はユビオサエで整形しており、内面は横方向のやや粗いヘラミガキが施されている。13世紀の中葉に属するものである。

SK03(図68・69、図版14・29) 1区のSK02の北側に位置する短辺約0.8m、長辺1.2m

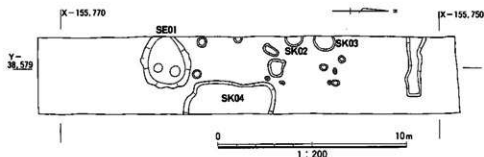


図68 1区SK02~04、SE01実測図

の隅丸長方形の土壌で、深さは0.3m前後ある。埋土は暗オリーブ灰色シルトで、瓦器・白磁が出土した。

194は口径15.8cmの白磁碗である。玉縁状をなす口縁部の内外面および体部の外面に灰白色の釉が施されている。貫入が部分的に見られる。

197は口径15cm前後、器高4.9cmの瓦器碗である。口縁端部は丸く、体部の内面にやや粗い螺旋状の暗文を施している。高台は粘土紐をナデ付けており低い。以上の土器は13世紀の後半に属するものであろう。

SK04(図68・69、図版14・29) 1区の中央に位置する南北約4.8m、東西1.8m以上、深さ約0.2mの土壌で、遺構の東側は調査範囲外に延びている。埋土は黒褐色砂質シルトで、土師器・瓦器などが出土した。

182は口径8.8cm、器高1.7cmの土師器皿で、口縁端部の上面が浅く凹む。183・184は口径9.2~9.4cm、器高1.3cmで、口縁部が「て」字状の土師器皿である。185も底部を欠損しているが、口径12.6cmの口縁部が「て」字状の土師器皿である。以上の土師器の色調は182・185が灰白色、183は淡い赤褐色、184は淡い黄褐色で、胎土中に長石・シャモット・チャートを含み、焼成は良好である。186は口径13.4cm、器高3.5cmの土師器杯である。口縁端部を丸くおさめており、体部の下半をヘラケズリ調整している。色調はにぶい赤褐色で、胎土中に長石・雲母を含み、焼成は良い。187は口径19.6cm、器高3.3cmの土師器盤である。体部から外反する口縁部の端部を丸くおさめており、口縁部から体部の内外面をヨコナデ調整、底部の裏面はユビオサエで整形している。色調は橙褐色で、胎土中に雲母・角閃石を含み、焼成は良好である。

190は口径3.5cm、器高1.7cmの土師器ミニチュア碗で、体部の外面に上下2帯のヘラ描の線刻がある。祭祀用の土器と思われる。色調は褐灰色で、胎土中に長石・チャートを含み、

焼成は良い。

188・191・193・195は瓦器碗である。このうち、完形の195は口径15.5cm、器高5.8cmで、内湾しながら外上方に伸びる体部から口縁部はわずかに開く。高台径は約7cmあり、外方に張る。体部の内外面に横方向の暗文を密に施している。188・193は口縁端部が内傾して浅く凹む。191は混入品と思われるもので、器面が磨滅しており調整はわからない。189は高台径が6.4cmの瓦器碗の底部である。内面にヘラミガキを施している。

192は口径9.2cm、器高3.5cmの須恵器杯身で、短頸壺の蓋かとも思われたが火に掛けた形跡があることから身とした。体部の内外面をヨコナデ、底部をヘラケズリ調整している。色調は灰黄褐色で、焼成はややあまい。

以上がSK04から出土したおもな土器類である。これらのうち、須恵器192・土師器186は7世紀代、土師器187は8世紀の後半代に属するもので、191以外の12世紀の前半に属する土師器皿や瓦器碗がSK04の時期を示すものであろう。

(2) 井戸

SE01(図68・69、図版14・15・29) 1区のSK04の南側に位置する井戸である。掘形

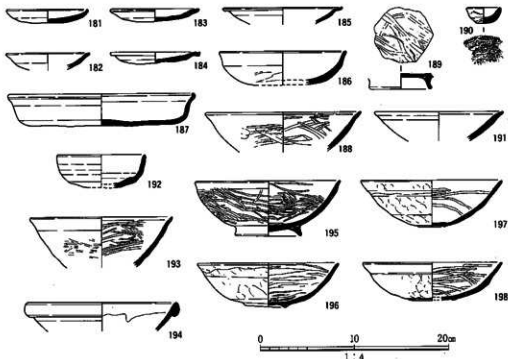


図69 SK02～04、SE01出土遺物実測図

はやや不整形であるが、径2m前後あり、中央より東寄りで2個所の曲物を転用した井筒が検出された。井筒内には水成のシルトや極細粒砂が堆積しており、北側の井筒から瓦器や土師器が出土した。

181は口径8.6cm、器高1.4cmの土師器皿で、口縁端部を丸くおさめている。色調は灰黄色で、胎土中に雲母を含み、焼成は良い。

196は口径15.0cm、器高4.6cmの瓦器碗で、口縁部はわずかに内湾する体部から短く外上方に伸びており、端部は丸い。体部の外面はユビオサエで整形しており、内面は横方向、見込みは縦方向のヘラミガキが密に施されている。以上の土器類は13世紀の中ごろに属するものである。

SE02(図70～73、図版16・29) 2区の中央に位置する井戸である。掘形は長方形を呈するようであるが、全体の形状や規模は遺構の東側が調査範囲外のため不明である。掘形の北側に土師器羽釜を転用した井筒が2基あり、東側が2段分、西側は3段分が確認された。

199～201はSE02の西側の井筒に転用された土師器羽釜で、いずれも底部を打ち欠いており、口径28.4～30.4cm、器高は24cm以上ある。口縁部は内傾した端部の内側が段状を呈する199・201と、幅広い面をなす200がある。鈎は端部を丸くおさめており、200はわずかに上を向いており、199・201はわずかに下を向いている。いずれも体部の上半以下を縦方向にヘラケズリ調整しており、口頸部の内面は横方向のやや強いナデを施している。202・203はSE02の東側の井筒に転用された土師器羽釜で、ともに底部の中央を打ち欠いており、口径約29～31cm、器高27cm前後ある。口頸部は内傾しており、端部は短く開く。鈎はともに端部を丸くおさめているが、203はやや上を向いている。体部外面の上半以下を縦方向にヘラケズリ調整しており、内面は横方向にナデ整えている。以上の土師器羽釜の色調はに

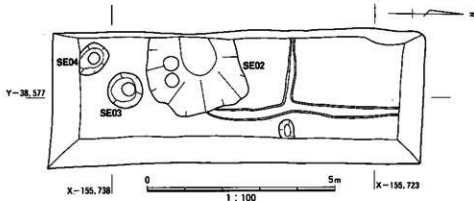


図70 2区SE02～04実測図

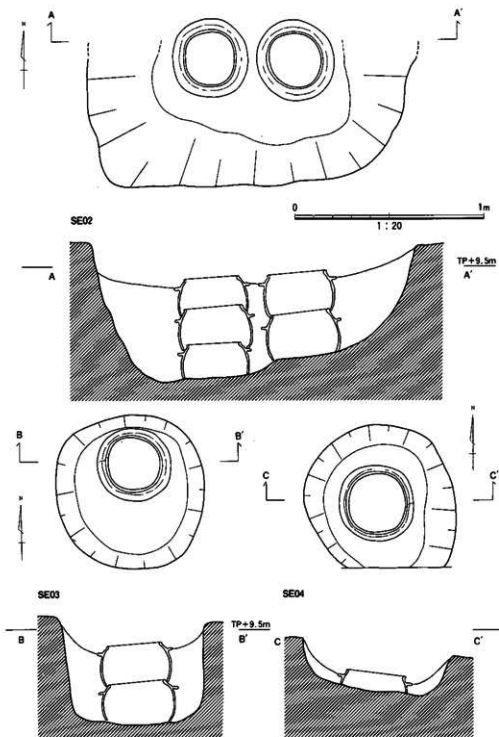


图71 SE02~04实测图

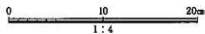
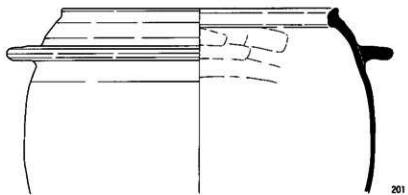
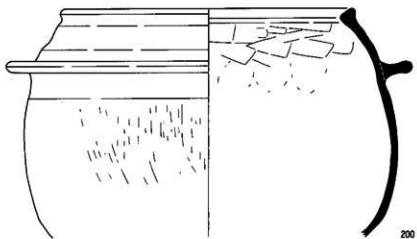
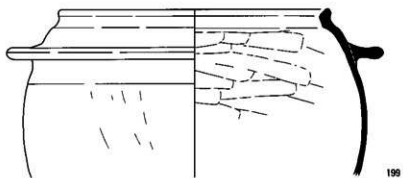


图72 SE02出土器物实测图

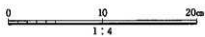
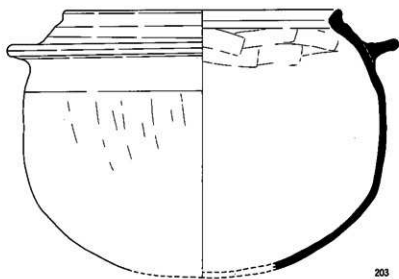
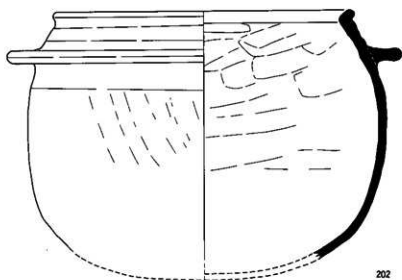
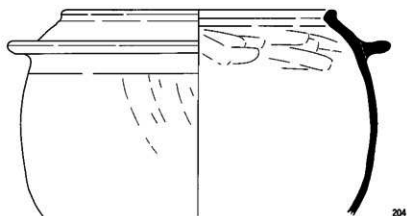
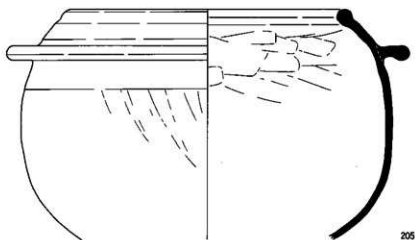


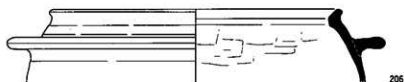
图73 SE02出土遗物实测图



204



205



206

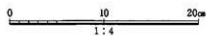


图74 SE03·04出土器物实测图

ぶい橙～明褐色を呈しており、胎土中に長石・雲母・角閃石を含み、焼成は良好である。13世紀の中ごろに属するものであろう。

SE03(図70・71・74、図版16・29) 2区のSE02の南側に位置する井戸である。掘形は径約0.8mで、中心よりやや北寄りに土師器羽釜2個体を転用した井筒があった。

204・205は底部の大半が打ち欠かれているが、口径約28～29cmの土師器羽釜である。ともに口頸部は内傾しており、205の口縁端部は丸くおさめている。鈎は口頸部の下端に水平に貼付けられており、205の端部は丸い。体部外面の上半以下を縦方向にヘラケズリ調整しており、口頸部の内面は横方向に粗くナデている。色調は灰白色を呈しており、胎土中に長石・チャートを含み、焼成は良い。14世紀の前半代に属するものであろう。

SE04(図70・71・74) SE02の南西部に位置する井戸で、遺構の大半を後世に破壊されていた。掘形は径約0.8～0.9mで、ほぼ中央に土師器羽釜を転用した井筒を設けている。

206は口径31.2cmで、体部の大半を欠損した土師器羽釜である。口縁部は頸部から内傾した後、短く開いており、端部は丸い。口頸部はヨコナデ調整で、頸部の内面は横方向の強いナデである。鈎は頸部の下端に貼付けており、端部を丸くおさめている。

井戸の時期は上述したSE03とほぼ同じで、14世紀の前半代と思われる。

4) 小結

本調査では、11世紀から13世紀代を中心とする遺構・遺物が検出された。これは、調査地が、これまでに実施されている周辺の調査地と同様に、平安時代から鎌倉時代にかけての集落の範囲内に当たることを示している。また、1・2区ともに井戸が集中する個所が確認されたが、これは井戸を設ける際に水脈の位置が念頭に置かれた結果と考えられる。なお、SE01・02では1つの掘形内に2個所の井筒が設置されており、希有な例として注目される。

第8節 92-81次調査

1) 層序

本調査では、当地域の沖積層下部層に相当する長原13層の上部までの各層は、地下鉄谷町線建設時および近年の農地の整備の際の土取り工事で削平されており確認されなかった(図75)。

長原0層は現代の整地層で、上面はTP+11.0m前後ある。

長原1層は灰色(7.5Y4/1)砂礫混りシルトで、層厚は15cm前後あり、現代の水田の作土である。本層の直下で部分的に認められた層厚10cm前後の灰オリーブ色(7.5Y5/2)砂礫混りシルトも水田の作土であり、基底面でSD901が検出された。

長原13A・B層はにぶい黄色(7.5Y6/4)粘土質シルトを主体とする地層で、層厚は30cm前後ある。本層は上層水田の造成時に削平されており、おもに調査地の中央部以西で確認された。

長原14層は層厚が20~60cmあり、にぶい黄色(2.5Y6/4)含砂礫シルト質粘土(上部)お

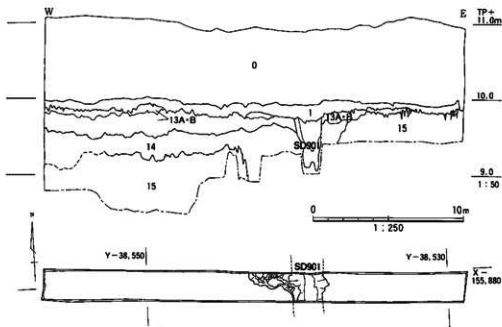


図75 南壁断面模式図、長原1層基底面検出遺構配置図



写真6 SD901南壁地層断面(北から)

よび灰オリーブ色(7.5Y6/2)粘土混り砂礫(下部)に2分される。本層は調査地中央部に位置する下層の流路に向って厚く堆積しており、下部は砂礫のラミナが発達した水成層であるが、上部は鉄分を多く含み、乾痕が見られることから、一時期、地表面になっていたようである。

長原15層は緑灰色(7.5GY4/1)シルト混り砂礫で、層厚は80cm以上あり、全体によくしまっている。本層は上部が粘土層で、下部に向って徐々に砂礫に変化する。

2) 遺構とその遺物

i) 弥生時代前期～中期初頭の遺構

(1) 溝

SD901(図75、写真6、図版17) 調査地中央部に位置する南北方向の溝で、幅2.0～2.5m、深さ約0.7mあり、断面の形状は逆台形を呈する。溝内には下から灰色(5Y6/1)砂礫、暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト～砂礫混り細粒砂が堆積していた。本溝は調査地の南側のNG91-1次調査地から北側のNG91-20次調査地に延びる溝の延長上に位置しており、溝内の堆積物も長原8C層に相当することから弥生時代前期から中期初頭の水路の一部と思われる。

3) 小結

今回の調査では、弥生時代の水路とみられる溝SD901以外、さしたる遺構・遺物は出土しなかった。これは、既述したように調査地が農地の整備に伴って大きく改変されたことに起因する。また、調査地に残存していた長原13層については、旧石器を対象とする調査を実施したが、発掘土の洗浄を含めて旧石器時代の遺物は出土しなかった。

第Ⅲ章 長原遺跡南・西南地区、瓜破遺跡東南地区の調査

第1節 92-13次調査

1) 層序

調査対象となるのは当路線の全域であったが、生活道路の確保のため調査できたのは北部30mと南部10mのみであった。ここではそれぞれ北区、南区と呼称する(図4・76・77、図版18)。

〈北区〉

長原0・1層は盛土および現代の作土である。

長原2層は水田の作土および調査地の北部に位置する東除川に関連するSD104・105の堆積層に2分される。このうち、水成層の明黄褐色(10YR6/6)礫~にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂は、東除川の主要な埋土で、層厚は100cm前後ある。また、SD106の周辺に堆積する暗緑灰色(7.5GY4/1)細粒砂~極細粒砂も水成層であり、江戸時代の遺物を含むことから長原2層に相当するものと思われる。

長原6Ai層は明黄褐色(10YR6/8)含砂粘土で、層厚10cm前後の水田の作土である。本調査地では砂粒にかたよりが見られ、あまりこなれていない。風化の著しいサヌカイト製の横形剥片が1点出土した。

長原6Aii層はにぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂~粗粒砂の水成層で、SD607の周辺に堆積していた。

長原6B-7層は黒褐色(10YR2/2)粘土で、層厚は約10cmある。

長原13A・B層は灰白色(5Y7/2)シルトである。

〈南区〉

長原0・1層は盛土および現代の作土である。

長原2層はにぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質細粒砂および、にぶい黄橙色(10YR6/3)含粘土粗粒砂~にぶい黄色(2.5Y6/4)粗粒砂で、SD201の埋土である。

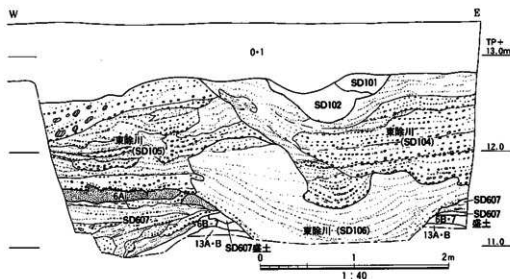


図76 北区北壁断面実測図

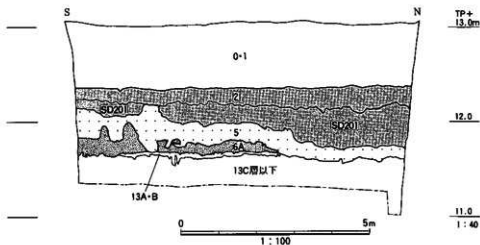


図77 南区西壁断面模式図

長原5層はにぶい黄色(2.5Y6/4)粗粒砂～礫の水成層である。

長原6A層は暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土で、水田の作土である。

長原13A・B層は灰白色(5Y7/2)シルトである。本層以下の層序については調査深度との関係もあって、長原遺跡の標準層序との対応は明確ではないが、灰黄色(2.5Y7/2)シルト質粘土～粘土は長原13C層以下に相当する地層と思われる。

2) 遺構とその遺物

〈北区〉

i) 鎌倉～江戸時代の遺構と遺物

現代作土の基底面検出遺構としてSD101・102、長原2層下面検出遺構としてSD203があるほか、東除川に関連するSD104～106がある。

(1) 溝

SD101(図76・78) 北区の中央を南北方向に流れる幅約0.5～1m、深さ約0.3mの溝である。本溝は下層のSD102にはほぼ重複することからこれの掘直しと考えられる。溝内の上部には黄色細粒砂が、下部には黄褐色含礫粘土質シルトが堆積していた。

SD102(図76・78) 北区の中央を南北方向に流れる幅約1.2～1.7m、深さ約0.4mの溝である。溝内には黄褐色粘土質シルトが堆積しており、切合い関係からSD101はSD102より新しいが、同じような位置にあることからあまり時期差はないものと思われる。

SD203(図78) 北区の南部に位置する幅約2m、深さ約0.2mの南東～北西方向の溝で、埋土は黄橙色粗粒砂である。瓦器・土師器の細片が出土した。

以上の溝の時期は出土遺物や埋土の層準からみて江戸時代と考えられるが、ここではSD101・102・203の関係について述べておく。SD203の北側約1.5mには高さ0.3m前後の段差がある。長原2層はこの段より南側の低い場所のみに分布していたことから段差は江戸時代までさかのぼる可能性がある。また、当地域の区画整理事業施工以前の図面によれば、この部分に本調査で検出した段差に相当するものが明示されており、図面と対照するとSD101・102・203は段差に並行することから、これと関係があるものと思われる。つまり、SD101・102は段の高い部分に、SD203は段の低い部分に掘られた溝であり、これは段の高所・低所で行われたであろう耕作の内容に関係しているのかもしれない。

(2) 東除川SD104～106(図76・78、図版19)

長原2層の上部を除去すると北区の全面に明黄褐～黄橙色の砂礫層が認められた。これは東除川の主要な堆積物で、北区の東部では地山層まで削込むように堆積しており、西部では下位の長原5層を削って長原6A層を覆っていた。砂礫層はラミナの切合いから大きく2時期に分けることができ、そのうちの新しいSD104に堆積した砂礫層は北北西→北→北北東と方向を変えている。古いSD105に堆積した砂礫層の方向はラミナの観察から調査地の北部で北西方向に流れを変えていることが判明した。東除川は本来1本の河道として北流していたものと考えられるが、この周辺には流れに沿って複数の小規模な流路状の溝

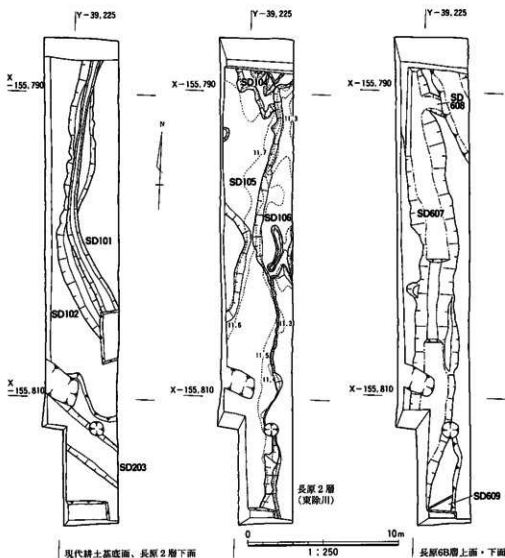


図78 北区遺構配置図

が存在しており、SD104・105も流路の一部と推定される。また、発掘調査時にはSD104とSD105は新旧の関係があると思われたが、両溝の出土遺物には時期差が認められなかったため、短期間に改修されたものであろう。この部分の下層には細粒砂で埋没したSD106が存在していたが、溝内の細粒砂の大半は東除川の水 flow によって流失したようであり、遺物は確認されなかった。

SD106は北区の北部に位置する幅3.3m以上、深さ1.0m以上の溝で、溝内には緑灰色細粒砂が堆積していた。本溝は長原6Ai層を掘込んでおり、方向や層準からみて、調査地の

北東に位置するNG91-30次調査で検出されたSD401に続く溝と思われた。埴輪片とともに室町時代を上限とする瓦器の細片が出土したが、層位からみて長原2層準の遺構と考えられる。

SD104~106出土遺物(図79、図版25) 212は底部を欠損しているが、口径14.2cmの瓦器碗である。口縁端部を丸くおさめており、体部の内面は横方向の暗文を施している。216は高台の径が5.4cmの瓦器碗の底部で、内底面に平行暗文と横方向の暗文を密に施している。212・216ともに13世紀代に属するものである。207~211・214・215も口径12.0~13.8cm、器高3.0~3.5cmの瓦器碗である。いずれも口縁部に強いヨコナデを加えており、端部は丸くおさめている。体部の外面の整形はユビオサエで、内面にはやや粗い暗文が施されている。213は口径9.4cmで、内面に乱れた螺旋状の暗文が施された瓦器皿である。以上の瓦器のうち、207・214は13世紀末から14世紀、208~211・213・215は14世紀に属するものであろう。

217・218は口径8.6~9.2cm、器高1.0~1.5cmの土師器小皿である。217の口縁部は体部から大きく開いており、218は2段に開く。220は口径14.0cmの土師器皿で、短く開いた口縁部の端部を内側に丸くおさめている。219は口径6.9cmで、口縁部が直立した土師器壺で

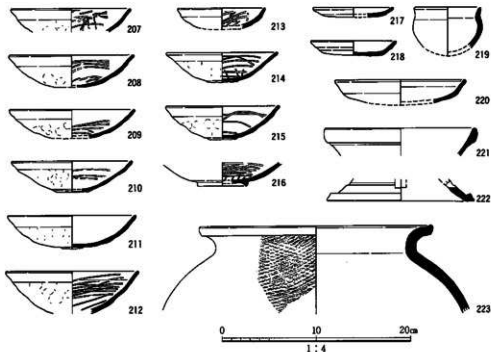


図79 北区SD104~106出土遺物実測図

ある。以上の土師器のうち、平安時代にさかのぼる219以外は13世紀末から14世紀代に属するものと思われる。

221は口径16.3cmの白磁碗で、口縁部を幅のある玉縁状におさめており、器体の内外面に淡黄色の釉をかけている。11世紀中葉に属する輸入磁器であろう。

222は底径15.8cmの須恵器高杯の脚部である。裾部ににぶい凹線が巡っており、長方形スカシ孔を穿つ。TK43型式に属するものである。

223は体部の上半以下を欠損しているが、口径約25cmで、口縁部が緩やかに外反した須恵器甕である。体部から口頸部の外面に粗い平行タタキを施しており、口頸部はタタキの後、緩やかに折り曲げて形成している。13世紀代に属する東播系の須恵器である。

以上、SD104～106から出土した土器類のうち、須恵器高杯を除く土器類は時期からみてもおおむね中世の東除川に伴うものと思われる。このほか、横形剥片2点を含む5点のサヌカイト製の剥片が出土したが、その多くは磨減しておりすべて遊離した資料である。

ii) 飛鳥時代の遺構と遺物

(1) 溝

SD607(図78、図版19) 北区全域に広がる南北方向の溝で、NG13次調査のSD01、NG18次調査のSD03と一連の溝である。掘削深度の関係から中央部約5mのみ底まで調査した。幅約2.8m、深さ約1.2mである。両側に幅1.5m以上の盛土をしている。埋土は、上部が長原6Aii層の粗粒砂、下部が粘土であり、当初は緩やかな流れであったものが長原6Aii層によって急激に埋没したものと考えられた。遺物は少量の須恵器片が出土したのみで、時期のわかるものはない。また、調査地北部に位置するSD608は断面の観察から、SD607に東側から取付く溝であることが判明した。

SD609(図78) 北区南部の長原6B層の下面で検出した溝である。幅1.0m以上、深さ約0.1mあり、底面はやや凹凸がある。遺物は出土しなかった。

〈南区〉

i) 江戸時代の遺構と遺物

(1) 溝

SD201(図80・81、写真7、図版25) 調査区が狭く、たまたま当遺構内に設定されたことから、遺構であると認識したのは長原6Aii層準の水田面まで掘下



図80 SD201出土遺物実測図

げた後のことであった。したがって、図示した輪郭は長原6Ai層上面でのものである。断面観察および底面の形状から幅1.2m以上、深さ約0.6mの北でやや西に振る溝に復元できる。埋土は含粘土粗粒砂および粗粒砂で、須恵器・土師器の細片が出土した。

224は口径20.8cm、器高2.8cmの土師器盤で、口縁部は体部から緩やかに開く。体部の裏面をユビオサエ、口縁部をヨコナデで調整している。色調はにぶい橙色で、胎土中に長石を含む。奈良時代末～平安時代初期に属するものと思われる。

ii) 奈良時代の遺構と遺物

(1) 畦畔(図81、写真7)

南区の南端で2条の東西方向の畦畔SR601・602を検出した。ともに東側はSD201によっ

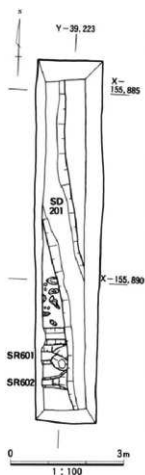


図81 南区長原6Ai層上面検出
遺構配置図



写真7 SD201、SR601・602(南から)

で削られており、残っていない。高さは0.2m弱である。畦畔の間は約0.4mで、この間は水路として利用されたものと考えられる。また、北側の畦畔に北接して幅約0.5mの溝状に窪む部分がある。水田の導水に関連するものと考えられる。

3) 小結

今回の調査は狭小な範囲であったが、当地域の開発を考える上でいくつかの興味深い事実がわかった。導水に係わると考えられる規模の大きな溝状の遺構を検出したことも成果の一つといえよう。特に、SD607は層序からみても長原6Ai層の水田址より古いため、当水田に水を供給したものではない。したがって、長原6Ai層準の水田の経営に当ってはほかに水源を求めなければならず、導水の方法が変わった可能性もある。この問題については今後、周辺部の調査事例の増加を待って検討したい。

東除川は、今回の調査地内で西岸が確認できるのではないかと考えていたが、西岸はより西側に位置することがわかり、掘削時期を層位的に押さえることができなかった。東除川の掘削時期は、当地域の開発を考える上で重要な問題であり、その解明は今後の調査の重要な課題の一つといえる。

第2節 92-18次調査

ここでは、I章で既述したとおり調査予定の南北道路のうち、調査が実施された西南部（網掛け部分）についてのみ報告する（図82）。

1) 層序

調査地の層序は基本的には長原遺跡の標準層序に対応しているが、一部の地層については後世の水田の耕作に伴って攪拌されており確認されなかった（写真8）。

長原0層は現代の整地層である。

長原1層は黒色(2.5Y5/2)砂礫混りシルトで、層厚は10cm前後ある。現代の水田の作土である。

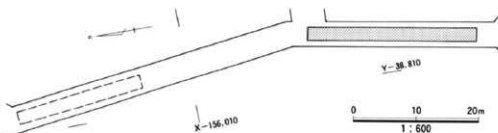


図82 調査地位置図



写真8 東壁地層断面(西から)

長原2層は黄色(2.5Y7/3)砂礫混りシルトで、層厚は10cm前後ある。SK05・06は本層下面の遺構である。

長原4Bi層は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂礫混りシルトで、層厚は15～20cmある。鎌倉～室町時代の水田の作土である。

長原5層は灰黄色(2.5Y7/2)シルト混り砂礫および明黄褐色極細粒砂質シルトで、層厚が20～40cmの水成層である。前者が長原5A層、後者は長原5B層に対比されるものと思われる。

長原6Ai層は黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルトで、層厚は10cm前後ある。奈良時代の水田の作土である。調査地の北部では本層の上面で畦畔が検出された。

長原7A層は黒色(2.5Y3/1)粘土で、層厚は10cm前後ある。

長原13A層は明黄褐色粘土質シルトである。本層は上部のみの調査に終わったため、層厚および以下の層序については明らかにできなかった。

2) 遺構とその遺物

i) 江戸時代の遺構と遺物

(1) 土壌

SK05(図83・84) 調査地の中央西寄りに位置する長辺が約2.6mの土壌である。遺構の西側は調査範囲外であり、完掘していないため深さについては明らかでない。土壌内は褐色砂礫混りシルトで埋戻されており、江戸時代後期に属する瓦・土師器・瓦質土器などが出土した。

225～228は口径9.5～11.1cm、器高5.4～6.3cmの肥前系磁器碗である。225～228は体部の外面に藍および暗青灰色の軸葉で草花文や直線文が絵付けされている。229は口径12.6

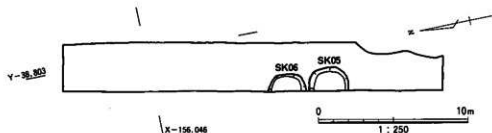


図83 長原2層下面検出遺構配置図

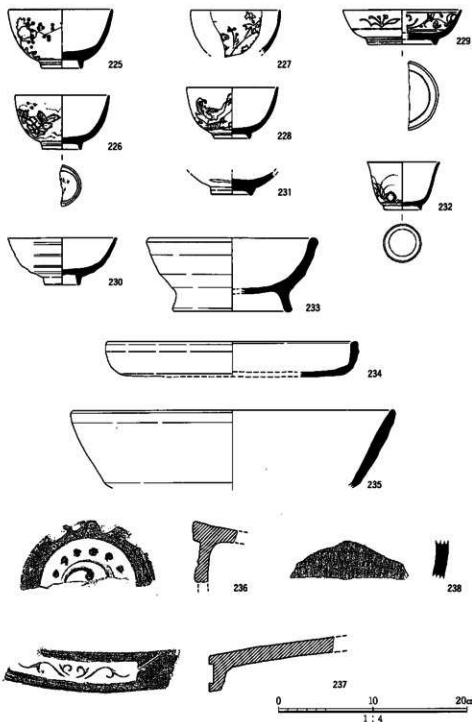


图84 SK05出土文物实测图

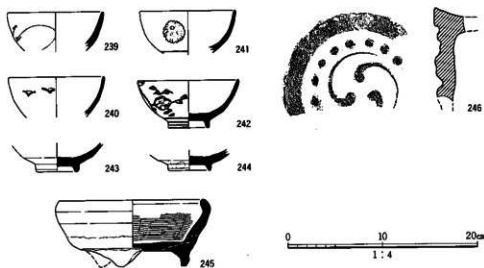


図85 SK06出土遺物実測図

cm、器高3.6cmの肥前系磁器皿である。体部の内外面に暗青灰・暗緑灰色の釉薬で草花文や直線文が、内底面の中央にも五弁花文が絵付けされている。232は口径7.7cm、器高4.9cmの肥前系磁器小碗である。体部の外面に暗青灰色の釉薬で草花文が絵付けされている。

230は口径11.6cm、器高4.9cmの唐津碗である。器体の内外面に黄褐色の施釉がなされており、内面の見込みには蛇の目軸刺ぎが見られる。体部の外面には3条のにぶい稜線が巡る。231は高台径4.4cmの唐津碗底部で、高台は削り出している。内外面ににぶい黄橙色の釉が施されており、内面の見込みには蛇の目軸刺ぎが見られる。

233は口径18.2cm、器高7.8cmで、底径12.6cmの高台を有する土師器火舎である。口縁端部を丸くおさめており、器体の全体をヨコナデ調整している。色調は橙色で、胎土中に微細な長石・雲母・チャート・角閃石を含む。234は口径26.6cm、器高3.7cmの土師器炮烙で、口縁部は体部から直立する。体部および口縁部の内外面をヨコナデ調整している。色調はにぶい黄橙色で、胎土中に微細な長石・雲母を含む。

235は口径34.2cm、器高8.5cm前後に復元される瓦質土器鍋で、口縁部は体部から直線的に開く。口縁部および体部のほぼ全体をヨコナデ調整している。色調は黒色で、胎土中に長石・雲母を含む。

236は瓦当の約1/2が欠損しているが、内区に頭が大きく尾が比較的長い三巴文、粒の大きな珠文を配した軒九瓦である。周縁は素文の直立縁で、瓦当裏面は平滑にナデ整えている。237は瓦当面の左半部が欠損しているが、唐草文C字対向の中心飾りの左右に一巻半

の均整唐草文を配した軒平瓦である。

238は滑石製鍋の体部片で、外面には加工痕が残る。以上の遺物の時期は17世紀の後半から18世紀の初頃ごろと思われる。

SK06(図83・85、図版25) SK05の北側に位置する長辺が約2.5mの土壌である。本土壌もSK05と同様に遺構の西側は調査範囲外になり、深さは完掘していないため明らかでない。土壌内は褐色砂礫泥りシルトで埋戻されており、瓦・土師器・瓦質土器・陶磁器・壁土などが出土した。

239～242は口径10.0～10.6cm、器高5.0cm前後の肥前系磁器碗である。239・240・242の体部の外面には青灰色の草花文や直線文が絵付されており、242の内面の見込みには軸剥きが見られる。241の体部の外面には明青灰色の印判による菊文が施されている。

243・244は高台径4.4cmの唐津碗の底部である。ともに灰白色の釉が施されており、内面の見込みには蛇の目軸剥きが見られる。

245は口径15.2cm、器高6.9cmの瓦質土器火舎である。口縁部は体部から内側に折り曲げられており、底部には三方に扁平な足が付く。体部の内面は粗いヨコハケ、口縁部はヨコナデが施されている。色調は黒褐色で、胎土中に長石・雲母・チャートを含む。

246は内区に尾の長い三巴文、粒の大きな珠文を配した軒丸瓦である。周縁は素文の直立縁で、瓦当面の裏面はナデ整えている。以上の遺物の時期は、印判による染付磁器を含むことから既述したSK05の出土遺物に比べてやや後出するもので、18世紀の初頃ごろと思われる。

3)小結

本調査では、江戸時代の遺構・遺物以外にはさしたるものは出土しなかったが、SK05・06から出土した陶磁器ほかの資料は、長原遺跡の南部を西流する宝永元(1704)年の大和川付替時に近い時に属するものである。当地域の農地や水利関係も大和川付替で変貌したと伝えられていることから、今後調査地の周辺でもそれを裏付ける資料が検出されるものと思われる。

第3節 92-11・49次調査

1) 層序

第1章でも述べたように、ここでは92-11次調査(1・2区)と49次調査(3区)をまとめて報告することにする。したがって、両地区の基本層序についても総合して記述するが、ともに地層は中世以後の水田などの開発で攪拌されて残りが悪く、厚さ約70cm前後の現代の整地層および長原1層の下は長原2、4層となり、これらの直下は一部を除いて長原13A・B層であった。なお、後述する飛鳥時代の遺構の多くは長原13層の上面で検出されたものであり、遺構に対応する地層は残っていなかった(図86・87・90、図版20)。

長原1層は黒色砂礫混りシルトで、層厚は10～30cmあり、現代の作土である。

長原2層は黄褐～にぶい黄橙色小礫混り極細粒砂で、層厚は10cm前後ある。本層の上面および下面では鋤溝群が見られた。

長原4層は暗黄褐色極細粒砂～細粒砂で、層厚は15cm前後ある。本層は全体に上層水田の耕作の影響を受けており、残りは悪い。13～14世紀代の瓦器や土師器の細片を含むほか、本層の基底面で検出された飛鳥時代の遺構に伴うものと思われる須恵器や土師器が出土した。また、2区では遊離した状態でサヌカイト製の有茎尖頭器が1点出土している。

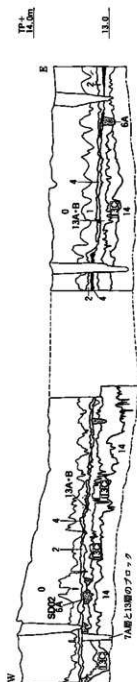
長原6A層は灰黄褐色シルト～極細粒砂で、層厚は10cm前後あり、SD14の周辺を中心に分布していた。奈良時代以降の水田の作土であろう。

長原6B-7A層は、褐灰色粘土質シルト、灰黄褐色極細粒砂質シルト、にぶい褐色偽礫などで、飛鳥時代の遺構の埋土以外には単一の地層としては確認されなかった。

長原13A・B層はにぶい黄色シルト質粘土～シルトで、最大層厚は10cmある。本層は全体にシルト質の部分が薄く、上位層準の耕作によって削平されているようであった。2区で砂岩製の砥石が1点出土している。なお、2区の東側から3区にかけては下位の長原15層準の砂礫層が本層の直下まで盛り上がっている状況が観察されたが、これは地震の影響を受けたものと考えられた。

長原13C層は、明黄褐色シルト質粘土で、部分的に砂礫を含んでおり、層厚は10～30cmある。なお、本層は層厚が30cm前後ある1・2区の中央ではやや暗色化が進んでいるように思われた。

長原14層は明黄褐～明緑灰色シルト質粘土で、層厚は10～30cmあり、2区の中央部以東



1 区

12.0
1:50

TP+ 14.5m



2 区

12.0
1:50



図86 1・2区南壁断面模式図

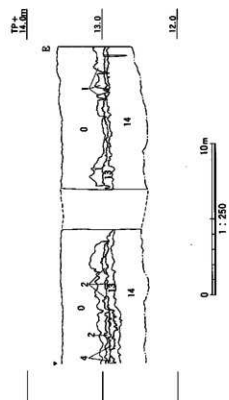
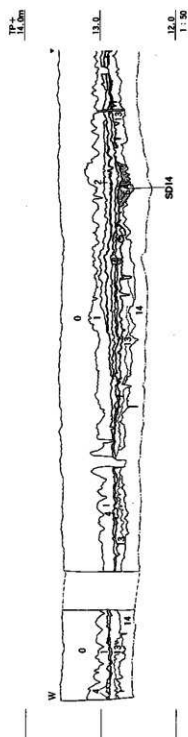


图87 3区南壁断面模式图

では下部が灰黄色の砂礫であった。なお、本層は2区の西部では上層の長原13C層との層理面が不明瞭であった。

長原15層はオリブ黄色砂礫混りシルトで、層厚は20cm以上ある。本層は2区のみで確認されたが、1・3区では上層の長原14層との層理面が不明瞭であり、区分されなかった。

2) 各層出土の遺物

i) 長原2、4層出土の遺物(図88、図版25)

247～260は長原2、4層から出土したものであるが、その多くは後世の耕作によって下位の遺構や包含層から混入した遊離資料である。なお、250の須恵器はSD14、259の土師器はSD06の直上から出土しており、ともに遺構に伴うものと考えられる。

247は口径12.0cmの瓦器碗で、内面に粗い螺旋状の暗文が施されている。14世紀の後半ごろに属するものであろう。

248は口径10.8cm、器高3.4cmの須恵器杯身である。口縁部は体部から直線的に開く。249は口径14cm前後の須恵器広口壺で、口縁部は頸部から水平に開く。250は口径13.2cmの須恵器長頸壺で、口頸部は細長い頸部の下端から口縁部に向けて緩やかに開く。頸部の上端には2本ののびい凹縁が巡る。251～253は天井部の中央を欠損しているが、口径8.0～9.4

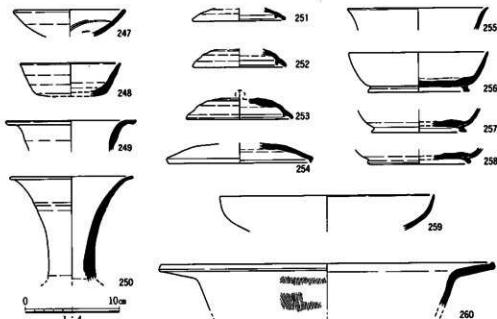


図88 長原2、4層出土遺物実測図

cmで、口縁部の内面にかえりをもつ須恵器杯蓋である。254は口径15.2cmで、口縁部の内面にかえりのない須恵器杯蓋である。天井部をヘラケズリのあとヨコナデ調整している。255～258は口径15cm前後、高台径10～11cm前後の須恵器杯身である。口縁部は255が短く開いており、256は直線的におさめている。高台の形態は256・257が台形で、258は長方形である。

259は口径23cm、器高4cm前後に復元された土師器鉢である。口縁端部を丸くおさめており、体部の下半は丸い。器面が磨減しており、調整は明らかでない。色調は黄橙色を呈しており、胎土中に微細な長石・雲母を含む。260は口径36cm前後で、口縁部が頸部から水平に開いた土師器の鍋である。口縁部は幅広くヨコナデ調整しており、端部を面取る。体部はやや粗いタテハケで整形している。色調は橙～明褐灰色で、胎土中に長石を含む。以上の土器類のうち、須恵器杯身248・255～258、杯蓋254、広口壺249、長頸壺250は飛鳥Ⅳに属するものと思われる。土師器鉢259、鍋260も飛鳥Ⅳに属するものであろう。なお、口径が小さく、かえりのある須恵器杯蓋251～253は飛鳥Ⅲに属するものである。

有茎尖頭器(図89、写真9) AE2は長原4層に相当する地層から出土した有茎尖頭器で、



写真9 長原4層出土石器遺物

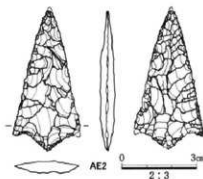


図89 長原4層出土石器遺物実測図

残存する最大長54.4mm(幅31.8mm、厚さ5.9mm)、重さは6.39gある。

身部は幅広で薄く、側面は直線的である。茎部は幅広で短く、逆刺のえぐりは深い。先端と逆刺の一方は新しく失われている。

A面(実測図の左図)左側では先端から体部にかけて、横方向あるいは右斜め上方への細長い剥離面が規則的に並んでいる。一部には、槌状剥離以前の剥離面が残されている。この剥離と同方向の剥離が最終的に施されたため、左側の剥離が規則的な細かいものに見えていると考えられる。右側では左斜め下方への剥離が主体であるが、この剥離は左側よりも幅広で粗く見えている。B面(実測図の右図)では、特に右側で左斜め下方への槌状剥離が顕著であり、左側の先端付近にも右斜め上方への規則的な剥離が見られる。なお、体部の槌状剥離は、両面とも一部

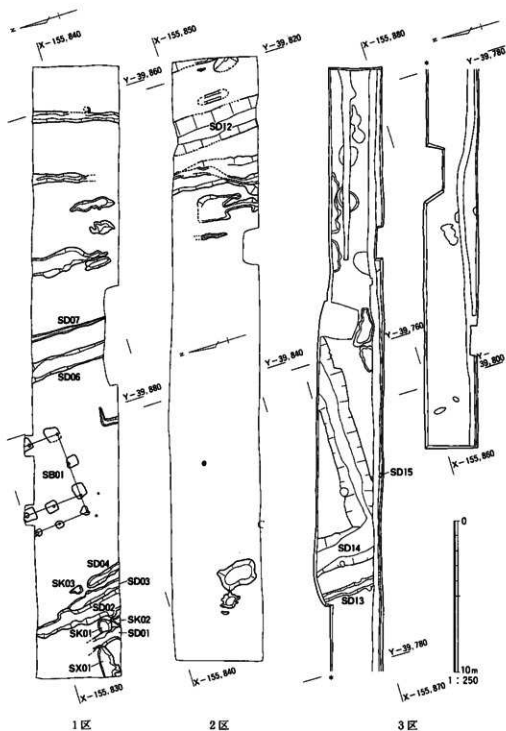


图90 1~3区长原13层上面検出遺構配置図

を除いて先端に向っている。また、B面体部中央の下部に残る横長の大きな剥離面は、打点位置は不明だが素材の背面側の可能性がある。基部は、A面では左右ともに2回の剥離によって、B面右側では大きな剥離が見られるが、左では細かな剥離によって基部と逆刺が加工され、逆刺のえぐりは両方ともA面の一番体部よりの剥離で作られている。

先端には両面ともに、主として左側刃に細かい加工が見られる。体部ではB面に細かな加工が顕著である。またA面右側刃を見ると、体部加工の剥離間にある稜線の末端部におもに細かな調整が施されていることがわかる。同様の現象は左側刃の一部にも見られる。基部はA面に細かな加工がていねいに施され、B面では末端のみ細かな加工が行われている。残された一方の逆刺は、B面ではていねいな調整が見られるが、この剥離は体部と一連の加工であろう。A面では体部の加工の際の大きな剥離面がそのまま残されている[田島富慈美1993]。

3) 遺構とその遺物

遺構検出は長原4層基底面で行い、おもに飛鳥時代と奈良時代の遺構が検出された。以下時代ごとに主要な遺構・遺物について記述する(図90)。

i) 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

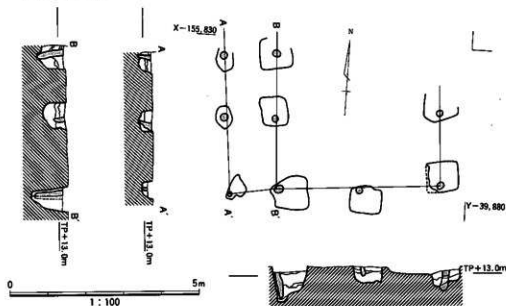


図91 1区SB01実測図

SB01(図90・91) 1区西側に位置する掘立柱建物で、身舎は梁行2間(4.3m)、桁行2間(3.8m)以上が確認され、西面に庇が付く。各柱間の寸法は、梁行が2.1m、桁行は1.8～1.9mあり、庇は1.6～2.0mであった。身舎の柱穴掘形は0.7～0.9mと大型で、深さも0.4～0.9mと深いものが多く、遺存状況は良い。掘形内は長原7A、13、14層の偽礫で埋戻されており、いずれも直径約0.15mの柱痕跡が確認された。柱痕跡内には暗褐～黒褐色粘土質シルトがあり、一部のものにはぶい黄～灰褐色の極細粒砂や砂礫の入った柱の抜き穴と思われる窪みが見られた。建物の棟の方角はN-4°-Wである。遺構周辺の長原4層からは飛鳥時代(7世紀中葉から後半)の土器が出土しており、この時期の建物である可能性が強い。

(2) 溝

SD03(図90・92) 1区の西端に位置する南北方向の溝で、幅約0.9m、深さは0.15m前後ある。溝内には灰褐色粘土質シルトが堆積しており、飛鳥時代の須恵器や土師器の細片が出土した。

266は体部の中ほど以上を欠損しているが、底径約10cmの須恵器鉢である。267は口径8.7cmの須恵器杯蓋で、かえりは短い。ともに飛鳥Ⅲに属するものであろう。

SD06(図90・92・93、写真10、図版25)

1区のSB01の東側で検出された溝で、幅1.1m、深さ約0.15mである。埋土の上層は褐灰色粘土質シルト、下層は長原13層の偽礫と上層の混合土で、下層上面に正置した状態で土師器高杯265が出土したほか、周辺から土師器杯・須恵器杯蓋などの細片が出土した。溝の方角はN-1°-Wである。

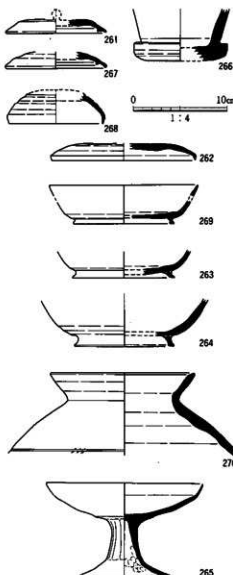


図92 1区SD03・06・07、2区SD12、3区SD14出土遺物実測図



写真10 1区SD06遺物出土状況(南から)

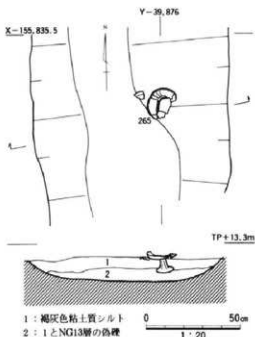


図93 1区SD06遺物出土状況図

261は口径8.9cmで、口縁部の内面にかえりのある須恵器杯蓋である。天井部をヘラケズリ調整している。265は口径16.6cm、器高9.9cmの土師器高杯である。杯部は全体に風化しており、調整は明らかでない。柱状部の外面は縦方向にナデており、脚裾部の内面にはユビオサエが残る。色調は浅い黄橙色で、胎土中に微細な長石・雲母・赤色粒を含む。以上の土器類は飛鳥Ⅲに属するものと思われる。

SD07(図90・92)

1区の中央部、SD06の東側に位置する南北方向の溝で、幅0.2～0.4m、深さは0.1m前後あり残りは悪い。溝内には灰褐色粘土質シルトが堆積しており、飛鳥時代の須恵器や土師器の細片が出土した。

263は器体の上半を欠損しているが、高台径11.0cmの須恵器杯身である。高台は外方にふんばったもので、杯底部のやや内側に貼付けられている。飛鳥Ⅳに属するものである。

SB01西方の溝群(図90) 1区のSB01の西方に位置する遺構群で、SD01・02・04およびSK01～03、SX01など遺構の輪郭のはっきりしないものである。これらの多く

は南北方向で、深さが0.1～0.15mあり、埋土が褐灰色粘土質シルトであることから、本来は溝であったと思われる。ここでは遺構の方位や埋土、遺物から判断して、SB01やSD03・06・07と同様に飛鳥時代に属するものと考えておきたい。

SD12(図90・92・94) 2区の東方に位置する幅約2.1m、深さ約1mの溝で、方位はN-2°-Wである。溝内の上層は長原7A、13層の偽磔や灰色粗砂混りシルトなどで埋戻され

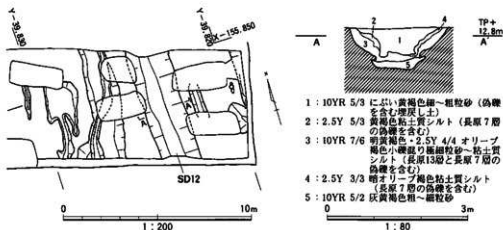


図94 2区SD12実測図

ており、下層は灰色中粒砂を主体とする水成層である。本溝では上層から須恵器杯蓋・台付壺が出土した。

262は口径15.3cmの須恵器杯蓋である。口縁部を面取っており、天井部はヘラケズリ調整している。264は器体の中ほど以上を欠損しているが、底径10.6cmで逆台形の高台を貼付けた須恵器台付壺と思われる。以上の須恵器は飛鳥Ⅳに属するものであろう。

SD13(図90・図版20) 3区の中央部、SD14の西側に位置する南北方向の溝である。幅0.3m前後、深さは約0.15mあり、溝内には長原7Aii層準の黑色シルトが堆積していた。後述するSD14に先行する溝と考えられる。

SD14(図90・92・95、図版20) 3区の中央部以東に位置する、幅1.9～2.2m、深さ0.3mで、直角に曲る一連の溝と考えられる。溝内の埋土は灰黄褐色極細粒砂～シルト、にぶい黄褐色粘土質シルトと上下2層に分かれるが、いずれもラミナが観察できることから、水成層と思われる。また、溝の斜面や底にはヒトや偶蹄類の無数の踏込みが見られた。北・東側の斜面には流れ込んだ状況で多くの須恵器や土師器片が出土したが、これは溝に囲まれた内側になんらかの施設があったことを示唆している。溝の方位はN-1°-Wで、1区に位置するSD01やSB01などの飛鳥時代の遺構の主軸に近似している。また、SD14の上層からサヌカイト製の石鏃が1点出土した。

268は口径10.0cm、器高3.2cm前後の須恵器杯蓋である。口縁部と天井部の境界に強いヨコナデを加えており、天井部の頂部はヘラ切り未調整である。口縁部は内傾しており、同端部は丸くおさめている。269は同一個体とみられる口縁部片と体部片を復元した須恵器杯

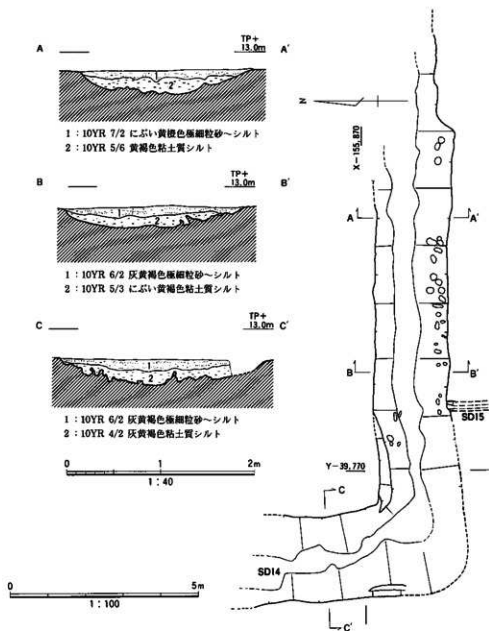


図95 3区SD14・15実測図

身である。口径15.8cm、器高4.1cm前後あり、口縁部は体部から外上方に開く。杯底部のやや内側に外方にふんばる径10.8cmの高台が貼付けられている。270は口径15.4cmで、口頸部が体部から外上方に開いた須恵器甕である。最大径は体部の中ほどにあり、体部の上半には平行タタキのあと浅い凹線が施されている。以上の須恵器のうち、杯蓋268は飛鳥Ⅱに、

杯身269・甕270は飛鳥Ⅳに属するものである。

SD15(図90・95、図版20) 3区の東部、SD14の北西コーナーの東側に位置する南北方向の溝であるが残りは悪い。幅・深さともに0.1m前後あり、溝内には長原7Aii層に相当する黒色シルトが堆積していた。遺物はサヌカイト製の石鏃が1点出土した以外には何も見られなかった。

石鏃(図96、図版35) AQ58は長原7Aii層の遺構であるSD15から出土した凹基無基式石鏃である。切先と側縁の一部を欠損する。作用部の側縁が直線的で長く、逆刺が尖ることから、B-1類に属する。残存する最大長22.2mm、重さ0.63gである。側縁は鋸歯状となる。本来は長原12層に伴うものと思われる。

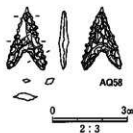


図96 3区SD15出土
石器遺物実測図

4)小結

今回の調査で検出されたSB01・SD06などの遺構は、UR86-11次調査地に位置する飛鳥時代の建物群と同時期のものである。しかし、両調査地の間で行われた数次に及ぶ一連の調査(NG90-50・91-9・UR92-6次)では飛鳥時代の建物跡は確認されていない。このような建物のない空白地帯は、本調査地で確認された長原6Ai層の作土を考慮すると、飛鳥時代以後に水田化されたことを示唆している。また、NG89-67次調査では数棟の飛鳥時代の掘立柱建物が検出されている。以上の遺構群から飛鳥時代の当地域は、郭構造をもつ大規模な建物群(UR86-11次調査)の東方に水田が拡がり、さらに水田の周辺に掘立柱建物の小群が点在する景観が復元される。

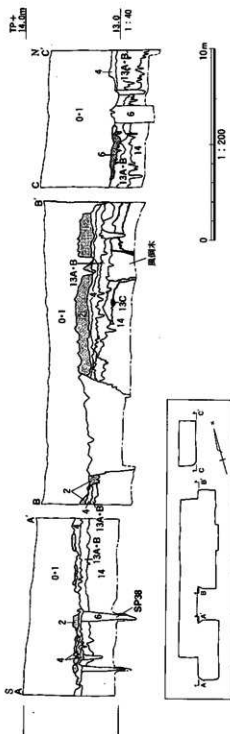


図97 西壁断面模式図

第4節 92-46次調査

1) 層序

地層は調査地中央から北寄りで良く残っており、南側は削平が激しいらしく盛土を除去すると地山が現れた。基本的な層序は長原0層の現代の盛土・長原1層作土の下が長原2、4層、その下が長原13A・B層となり、調査地中央付近では部分的に長原13C層が観察された。長原13A・B層上は南端でTP+13.4m、北端ではTP+13.1mであり、おおむね北下がりの地形といえる(図97)。

ここでは長原2層以下の層序について記述する。

長原2層は黄褐色粗砂混り細粒砂で、層厚は最大15cmあり、部分的に2層に分かれる。本層の下面では東西方向の鋤溝群が検出された。頁岩製の磨製石器が1点出土した。

長原4層はにぶい黄色シルト～細粒砂で、層厚は最大で15cmある。本層は部分的に2層に分層可能であり、基底面では掘立柱建物群の一部が検出された。上・下部からサヌカイト製の石器遺物が出土した。

長原6層は遺構内の埋土としてのみ確認されており、単一の地層としては見られなかった。

長原13A・B層はにぶい黄褐色シルトで、層厚は10～30cmある。本層は比較的遺存状況のよい調査地北部でもA・Bの2層に細分することはむずかしかった。本層中よりサヌカイト製の

石核が1点出土した。

長原13C層は明黄褐色粘土質シルトで、層厚は最大で10cmある。

長原14層は灰白色シルト質粘土で、乾痕が顕著であった。

2) 各層出土の遺物

本調査では長原2、4、6層から土器類が出土したが、おもな遺物は長原4層に相当する地層の下位から出土したものである。なお、長原4層の上部からサヌカイト製の剥片が2点、下部よりサヌカイト製の石刃と石鏃が各1点出土した。以下長原2層から順を追って記述する。

i) 長原2層出土遺物(図98、図版26)

271は口径8.4cmの須恵器杯蓋である。天井部の約2/3をヘラケズリで調整しており、口縁部の内面には短いかえりがある。飛鳥Ⅲに属するものであろう。

ii) 長原4層下部出土遺物(図98、図版25・26)

273・274は口径8.3～8.6cmの須恵器杯蓋で、ともに天井部の約1/3をヘラケズリで調整している。274の口縁部のかえりは受け部からわずかに下方に伸びている。280～283は口径11.0～12.8cm、器高3.7cm前後で、口縁部の内面にかえりのつかない須恵器杯蓋である。口縁端部は280～282が丸く、やや口径の大きな283は内傾している。いずれも口縁部と天井部の境界は丸くおさめられており、281・282の天井部はヘラケズリ調整

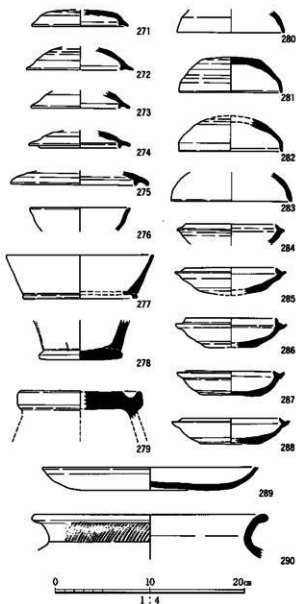


図98 長原2、4、6層出土遺物実測図

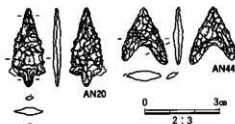


図99 長原4層、SP35出土石器遺物実測図

している。277は口径15.6cm、器高4.7cmで、底径12.2cmの高台を底部の端に有する須恵器杯身である。口縁部は体部から直線的に開いており、端部を面取る。284～288は口径9.3～10.5cm、器高2.6～3cm前後の須恵器杯身である。いずれも立上がりは短く、受け部からわずかに内

傾している。285は底部の約1/3をヘラケズリ調整しており、286～288の底部の裏面はヘラ切り未調整である。278は底径約9cmの須恵器鉢で、体部の内外面をヨコナデ調整しており、底部の裏面の調整は静止ヘラケズリである。なお、体部外面の下端には縦線のヘラ記号が見られる。279は脚台の大半を欠損しているが、口径13.2cmの須恵器円面碗である。陸および海の外面の調整はヨコナデで、内面はナデ整えている。色調は灰白色で、焼成はややあまい。胎土中に長石・チャート・シャモット・黑色粒を含む。290は口径25cm前後の須恵器甕である。口縁部は頸部から緩やかに外反しており、端部を丸くおさめている。口頸部のヨコナデ調整はやや粗く、外面には平行タタキが残る。

276は口径10.6cmで、口縁端部が内傾した土師器杯である。器面が磨減しており、調整は明らかでない。色調は明赤褐色で、焼成はややあまい。胎土中に微細な石英・長石・雲母を含む。289は口径22.9cm、器高2.4cmで、口縁部が体部から短く開いた土師器甕である。口縁部をヨコナデ調整しており、底部の裏面はユビオサエで整えている。色調は明赤褐色で、焼成は良く、胎土中に長石・雲母を含む。

石鏃(図99、図版35) AN20は平基有茎式石鏃である。一方の逆刺を欠損しており、作部部の平面形は五角形を呈する。残存する最大長30.2mm、重さ0.87gである。側縁は鋸歯状となる。本来は長原9C層に伴うものと思われる。

iii) 長原6層出土遺物(図98、図版26)

272は天井部の中央を欠損しているが、口径8.8cmで、内面にかえりのある須恵器杯蓋である。受け部は水平に開いており、やや丸みをもつ天井部の約2/3をヘラケズリ調整している。275は口径12cm前後に復元された須恵器杯蓋で、口径からみて碗の蓋の可能性がある。天井部の約1/3をヘラケズリで調整しており、口縁部の内面にはかえりがつく。

3) 遺構とその遺物

i) 飛鳥時代の遺構と遺物

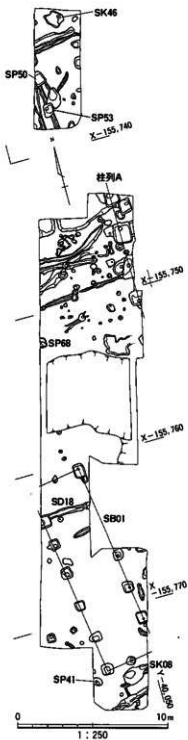


図100 長原4層基礎面検出遺構配置図

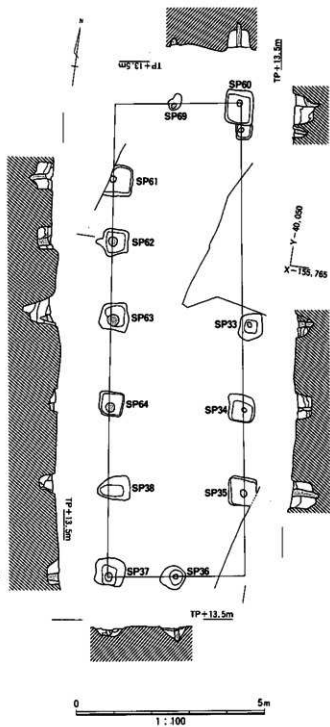


図101 SB01実測図

(1) 掘立柱建物・柱穴

SB01(図100・101、図版21) 調査地の南部に位置する桁行6間(12.9m)、梁行2間(3.6m)の掘立柱建物で、方位は真北から9°西に振る。個々の掘形の平面形は一辺0.7m前後の方形を呈するものが多いが、中には長辺約1m、短辺0.7mの長方形や径約0.4mのやや不整形なものもあった。掘形内は浅い黄色、黄橙色、灰黄褐色の偽礫および偽礫の混った粘土質シルト・シルトで埋戻されており、それぞれに直径約0.15mの柱痕跡が観察された。SP38・62・63では柱の抜き取り穴が確認されたほか、SP33・35・36・60・61・63の柱痕跡内には粘土質シルトがあり、すべてに柱の沈下した痕が見られた。遺物としては土師器・須恵器の細片が出土したほか、SP35からサヌカイト製の石鏃が1点出土した。

石鏃(図99、図版36) AN44はSP35から出土した凹基無茎式石鏃である。一方の側縁が欠損する。全体の形が正三角形で、基部の挟りが深く、逆刺がやや尖ることから、A-1類に属する。残存する最大長22.3mm、重さ0.84gである。この型式としては大型品であり、本来は長原12層に伴うものと思われる。

柱列A(図100・102・103、図版23・26) 中央北東寄りに位置する大型の柱穴の並びで、3間分が確認された。個々の掘形は一辺1.3m前後と大型で、直径約0.25mの柱痕跡が観察されたものもある。柱筋の方位は正方位で、ほかの建物とはやや異なる。当地域の飛鳥時代建物群の中心的建物の一つである可能性もあるが、調査地の東側に当るUR91-22次調

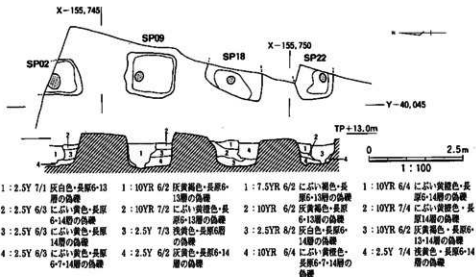


図102 柱列A実測図

査地ではこれに続きそうな柱穴は検出されておらず、不明である(図90)。またこの柱列に切られて一辺0.7~0.8mの柱穴3基が検出されている。

292・293はSP09から出土した須恵器杯蓋である。天井部の一部を欠損しているが、口径11.4~11.6cmで、天井部と口縁部の境界にはにぶい稜線が巡る。292の口縁端部はわずかに開いており、293の端部は短く外反している。天井部の調整は前者がヨコナデで、後者はヘラ切りのあとナデている。色調は灰~灰白色で、焼成は良い。ともにTK217型式に属するものであろう。

291はSP18から出土した口径約10.6cmの須恵器長頸壺の口頸部とみられるものである。口縁部の上端を水平におさめており、口縁部の下端には3条のにぶい凹線が巡る。色調は灰色で、焼成は良い。TK217型式に属するものであろう。

SP41(図100・103、図版21・26) 調査地の南端部、SB01の南西隅柱の西側に位置する短径約0.5m、長径約0.6m、深さ約0.45mの遺構である。掘込みのやや南よりに径0.1~0.15mの柱痕跡が検出されており、掘立柱建物の柱穴と思われる。調査範囲内ではこの柱穴に組み合うものは確認

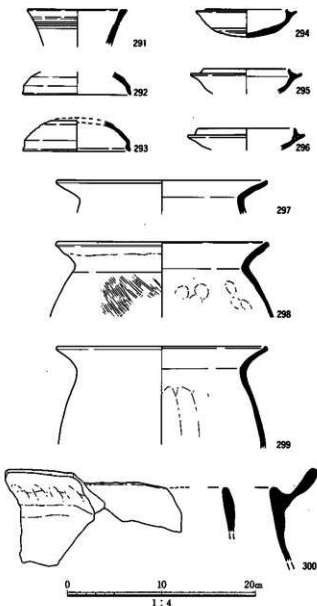


図103 柱列A、SP41、SK08・46出土遺物実測図

されなかった。

294は口径8.8cmで、短く直立した立上がり有する須恵器杯身である。口縁端部はわずかに内傾しており、底部はヘラ切り未調整である。色調は灰白色で、焼成は良い。TK217型式に属するものである。

SP50・53(図100、図版23) 調査地の北部に位置する遺構である。ともに平面形が隅丸長方形で、長辺0.9m、短辺約0.7m、深さ0.5～0.6m前後ある。ともに遺構内に径0.3～0.4mの柱の抜き穴があり、SP53の内底面には柱の沈下した痕跡が確認された。調査地の西側に位置するUR86-11次調査地の掘立柱建物SB7の東側柱の一部と考えられる(図107)。

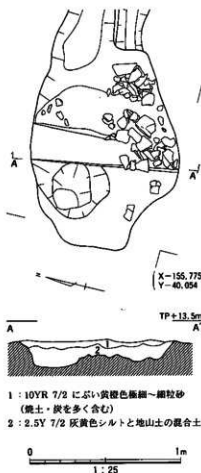
SP68(図100) 調査地中央の西壁際に位置する柱穴で、UR86-11次調査地の中心的建物SB17の庇東南隅の柱穴に相当する(図107)。この南に続く柱穴がないことから、SB17の底部分の桁行を5間と決定できた。

(2)土壌

SK08(図100・103・104、図版21・22・25)

SB01の南で検出された東西1.6m、南北1.0m、深さ0.15mの不整形な土壌である。埋土は上下2層に分かれ、上層はにぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂で、焼土・炭を多く含み、これらによる汚染が激しい。上層から土師器甕・移動式甕の破片が出土した。下層は地山土と灰色シルトとの混合土で埋戻されているようである。SK08は出土遺物などから煮炊きに係わる遺構である可能性がある。

297～299は口径22.5～22.8cmの土師器甕で、口縁部は外反している。297・298は口縁端部を面取っており、299はわずかにつまみ上げている。298の体部上半の器表面には左上がりのハケが施されており、298・299の体部の内面の調整はユビオサエおよび縦方向のナデである。色調はにぶい橙色あるいは浅い黄橙色で、焼成は良く、297・298は胎土中に長石・雲母を、299は長石・雲母・角閃石を含む。



- 1: 10YR 7/2 にぶい黄橙色極細砂～細粒砂
(焼土・炭を多く含む)
2: 2.5Y 7/2 灰黄色シルトと地山土の混合土

図104 SK08実測図

300は土師器移動式竈の破片である。底の
上端は上方を向いており、焚口に当る底の裏
面には煤が付着している。底はユビオサエお
よびナデによって竈の体部に貼付けられてお
り、竈の口から底の上部はヨコナデおよび横
方向のナデで整えられている。色調はにぶい
橙～褐灰色で、焼成は良い。胎土中に多量の
角閃石を含みいわゆる生駒西麓地域の胎土を
用いている。以上の土師器は形態や製作手法
からみて、飛鳥Ⅱに属するものと思われる。

SK46(図100・103、図版23・26) 調査
地の北端部に位置する平面形がやや不整形な
長辺約1.2m、短辺約1m、深さ0.2m前後の
土坑である。埋土は灰黄褐色粘土質シルト～極
細粒砂で、須恵器・土師器の破片が出土した。

295・296は底部の大半を欠損している
が、口径9.2～10.4cmで、内傾した短い立上
がりを有する須恵器杯身である。ともに体部
をヨコナデ調整しており、色調は灰白色で、
焼成は良い。TK217型式に属するものであ
ろう。

(3) 溝

SD18(図100・105・106、図版21・22・25・26) 調査地の
南部に位置する幅約0.4m、深さ約0.15mの東西方向の溝で、掘
立柱建物SB01に切られている。溝内の埋土は上層が灰灰色粗砂
混り細粒砂で、下層は浅黄色シルト～極細粒砂であり、上層から
土師器甕の細片と完形の須恵器杯蓋が出土した。出土遺物からみ
て飛鳥時代の遺構と考えられる。

301は口縁部を欠損しているが、天井部の中央に乳頭状のつま
みを有する須恵器杯蓋である。302は天井部の大半を欠損してい

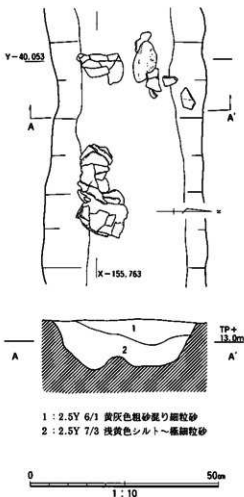


図105 SD18遺物出土状況図

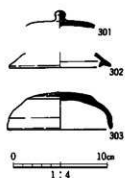


図106 SD18出土遺物実測図

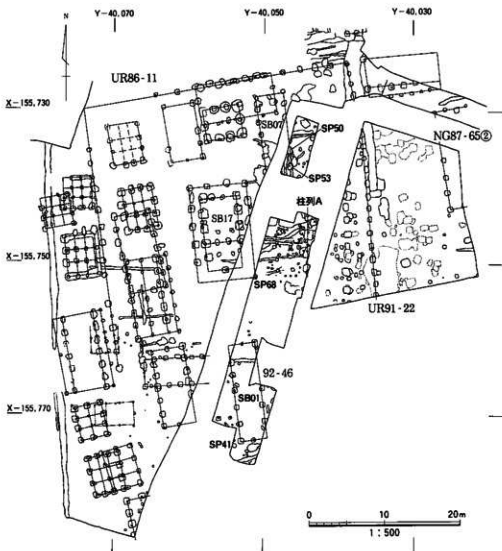


図107 掘立柱建物群検出状況図

るが、口径8.6cm前後で、口縁部の内面にかえりのある須恵器杯蓋である。303は口径11.2cm、器高3.9cmで、天井部の約1/3をヘラケズリ調整した須恵器杯蓋である。口縁部と天井部の境界は丸く、口縁端部はわずかに内傾している。以上の須恵器の色調は灰～灰白色を呈しており、焼成は良い。3点とも飛鳥Ⅱに属するものと思われるが、TK217型式とみられる303は301・302にやや先行する型式であろう。

4) 小結

本調査地で検出された遺構は、埋土や上位層準から出土した土器からみてUR86-11次調査地の飛鳥時代の掘立柱建物群と同時期のもので、その一部とみてよい[南秀雄1987]。今回新たに2棟の掘立柱建物の続きが検出されたことは、建物群の構成を知る上で重要である。また、柱列Aについては今のところ規模や性格は不明であるが、共伴遺物からみて飛鳥時代の遺構と判断される。図107に示したように柱列Aの東側に位置するUR91-22次調査地には、ほぼ平行する南北方向の柱列が検出されている。両者が一連の建物として組み合う可能性もあり、今後の調査が待たれる。

一方、SK08から出土した煮炊きに係わる遺物は、建物群の中心部での遺物相とはやや異なるようである。こうした遺物は北方のNG84-24次調査地付近[大阪市文化財協会1992]でも出土しており、煮炊きに係わる施設が建物群の中心から離れたところに設けられたとすれば、本調査地の南端は居住域の南の限界に近いのかもしれない。

第IV章 遺構・遺物の検討

i) はじめに

1992年度の長原・瓜破遺跡土地区画整理に伴う発掘調査では、既述したように旧石器時代から江戸時代の遺構や遺物が検出された。ただし、調査範囲が道路予定地内に限られたため、一部の遺構を除いて規模や性格の判明しないものもあった。また、長原遺跡東南地区の92-24・47・62次調査については調査地周辺の家屋の進入路の確保および現代の土取りの影響を受けていたこともあって、十分な調査が実施されなかった。本章では92-10次調査地のNR903(東川辺川)から出土した斧柄について若干の考察をしておきたい。

ii) 斧柄と部分名称

斧は身(斧身)と、これを装着する柄(斧柄)とからなり、柄は図108に示したように斧身を装着する頭部と握り部とに分けられる。また、斧柄はまっすぐな棒状の装着部に孔を穿って斧身をはめ込む直柄と、屈曲した装着部に斧身を固定するための斧台を作り出す曲柄がある[奈良国立文化財研究所1993]。以下、本章で用いる斧柄の部分名称はこれに従っておく。

一方、佐原眞氏は斧身の刃部が柄と平行するものを縦斧、直交するものを横斧と呼び分けており、斧身の刃部の形態から分類された両刃縦斧・片刃石斧は一般的に用いられたもので、両刃横斧も数はあるが、片刃縦斧については数が少なく珍しいものと指摘されている。石斧の使用痕についても検討されており、縦斧は主軸に対して斜行の線状痕が見られ、横斧は主軸に対して平行するものの、刃部の両面で差があり、前主面は弱く短い線状痕に、後主面では強く長い線状痕になるという[佐原眞1977・1982]。

iii) NR901出土斧柄と共存遺物

NR901(東川辺川)では92-10次調査地以外にもう1点斧柄が出土している。W1は長原遺跡東南地区の南方に位置するNG82-41次調査地で検出されたNR901

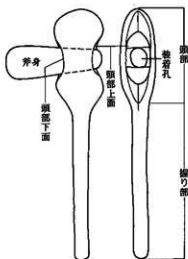


図108 縦斧直柄の各部名称

の流域内に設けられた杭列や落葉広葉樹の枝を用いたシガラミ状の遺構の近くから丸木弓・板材・加工木をはじめ、長原式土器に伴出したものである[大阪市文化財協会1982]、[田中清美・趙哲済1986]。また、W1の出土地点の南側に当るNG88-84次調査地でも流路内から、縦杵が長原式土器や弥生時代前期前半の土器に共伴しており、これらは長原遺跡の標準層序の9Bii~iv層準の水成層あるいはこれらの再堆積層に包含されていることから一括性の高いものと思われる。

W1は頭部が全体にヒビ割れており、その下半部も一部破損しているが、握り部の先端を含めてほぼ原形を留めている。斧柄の全長は58.1cm、頭部の長さ約22.5cmで、斧身の装着孔は頭部の上面側が約4cm、下面側は約7cmある。頭部は側面観が「ひさご形」を呈しており、47とはほぼ同形態といえる(図109)。斧柄に用いられた樹種はコナラ亜属のクヌギまたはコナラで、木取りは握り部に節の跡が残っていることから、1/3~1/4円周の丸木材の分割材を素材にして全体を削り出したものと思われる。

47は第II章第2節で述べたように頭部の側面観が「ひさご形」を呈する斧柄で、握り部の下半を焼損しているため、全体の長さは明らかでないが、頭部の大きさから判断してW1と同様なものと考えられる。樹種もコナラ亜属のクヌギまたはコナラで、1/3~1/4円周の丸木の分割材を素材にして全体を削り出している。これらの2点の斧柄はともに斧身を失っているが、頭部や装着孔の形態から判断して佐原分類の縦杵に属するもので、樹木の伐採用の両刃縦杵用の直柄と考えられる。

iv) 縦杵の系譜と時期

次に長原遺跡の斧柄と同様なものについて比較しておきたい。

現在管見によるかぎり、長原遺跡の斧柄と同形態のものは近畿地方以西で未製品を含めて9例あり、このうちの多くが縄文時代晩期終末に属するものである。以下に類例を挙げておく。

近畿地方では滋賀県大津市の滋賀里遺跡で、縄文時代晩期後半に属するものが未製品を含めて3点出土している(図109、W2~W4)。

W2は握り部の下端を欠損しているが、頭部の側面観は「ひさご形」を呈しており、装着孔の大きさは頭部上面が約5.5cm、下面が約8cmで、末広がりの断面になっている。

W3は握り部が付け根の近くから焼損しているが、頭部の側面観は「ひさご形」で、装着孔の大きさもW2と同大である。W2・W3ともに1/3~1/4円周の丸木の分割材を削って作り出されており、樹種はコナラ亜属という[奈良国立文化財研究所1993]。

W4は全長59cmの斧柄の完形品であるが、頭部に装着孔を穿ち、仕上げをする前の段階のものである。頭部の側面観は「ひさご形」を呈しており、形態や大きさも長原遺跡の47・W1に類似している。1/3～1/4円周の分割材から削り出されており、樹種はコナラかクスギとみられている[田辺昭三・加藤修ほか1973]。

近畿地方以西の斧柄の出土例は佐賀県と福岡県で未製品を含めて5点ある。

佐賀県唐津市の菜畑遺跡では縄文時代晩期後半の山ノ寺式に属する縦斧の直柄が3点(内1点は握り部の一部)出土している(図109:W5、図110:W6)。

W5は握り部の下端部を欠損した斧柄で、頭部はやや扁平な「ひさご形」を呈しており、装着孔は幅4.5cm、厚さ1.9cmある。報告者は「やや小ぶりの蛤刃石斧」の斧柄と考えている。

W6は頭部上端の片側を欠損しているがほぼ全形を留めた斧柄で、頭部の形態は側面観がやや扁平な「ひさご形」を呈しており、全長76cm、装着孔は幅5.8cm、厚さ2.8cmある。握り部の断面形は円形で、下端部はやや太い。報告者は「身幅が長く、やや扁平な蛤刃石斧」の装着を想定されている。以上のほかにも図示していないが断面形が楕円形で、太さ2.5cm×3.5cmの斧柄の握り部の断片が出土している。

これらの斧柄の樹種はいずれもカシで、芯持ち材ではなく、分割材を使用しているとのことである[中島直幸ほか1982]。

福岡県福岡市の雀居遺跡では自然の流路と考えられているSD003から縄文時代晩期終末の夜臼式土器に伴って未製品を含む2点の斧柄が出土している(図110:W7・W8)。

W7は斧柄の未製品で、全長は74.2cmある。頭部のみ削り出しており、握り部の基部は粗割のままで片面には樹皮が残っている。頭部の側面観は「ひさご形」を呈しており、装着孔は穿たれていない。樹種はクスギである。W8は握り部の中ほどを一部欠損しているが、全長76cm前後に復元されており、頭部の形態は側面観が「ひさご形」を呈している。装着孔は楕円形で、頭部下面の幅が6.7cmあり、上面の幅は一回り小さい。樹種については特に報告されていない[福岡市教育委員会1995]。

以上の2点は形態からみて縦斧の直柄であり、W7はこの種の斧柄の製作過程を知ることのできる希有な資料である。ともに素材は芯持ち材ではなく、分割材を用いている。

以上、近畿地方以西で確認されている長原遺跡の斧柄と同形態の例を挙げた。それらの所属時期は菜畑遺跡および澄賀里遺跡の縄文時代晩期後半の例を筆頭に、縄文時代晩期終末に属するものであることが確認された。一般に縄文時代晩期後半から終末に属する縦斧柄の頭部の形態は側面観が「ひさご形」であるのに対して、弥生時代前期になって新たに登

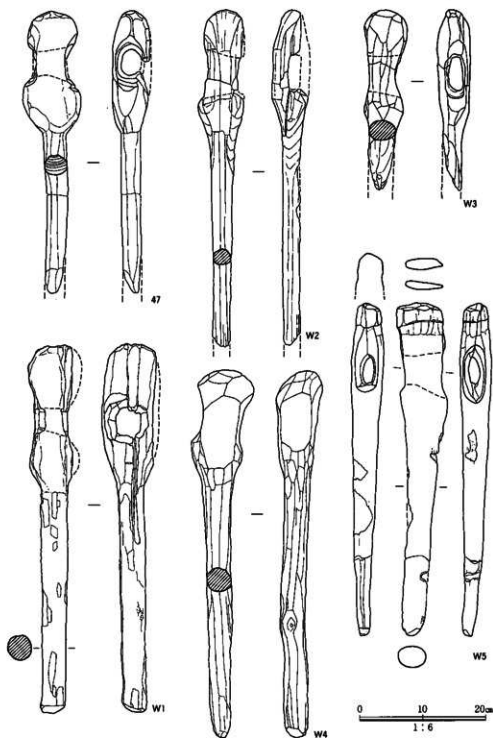
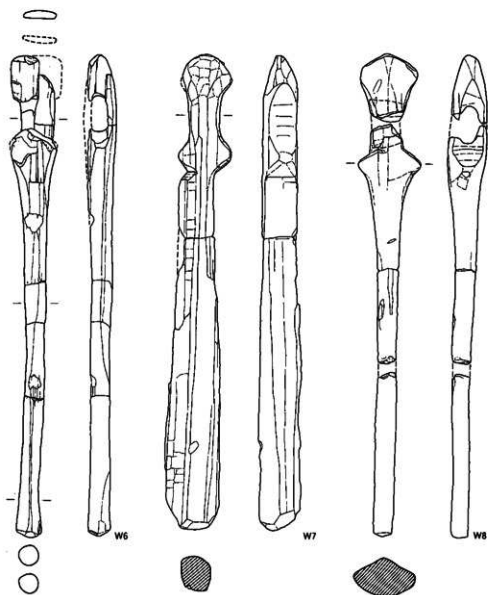


图109 斧柄实测图

47·W1: 长原遗址、W2~W4: 滋賀里遗址、W5: 秦畑遗址



0 10 20cm
1:6

图110 斧柄实测图

W6: 莱烟遗址、W7·W8: 雀居遗址

場する縦斧は頭部の形態が「扇形」に変わるという[佐原眞1985]。また、斧柄の用材も縄文時代晩期後半から終末のものは、一般にクスギやコナラなどの落葉広葉樹が使用されており、弥生時代前期以降になるとカシ類が多用されるという[金子裕之1984]。たしかに菜畑遺跡の2例を除く斧柄の樹種はコナラやクスギなどであることから、金子氏が指摘されたように弥生時代以前の縦斧柄の用材には落葉広葉樹が素材として選ばれたものと思われる。しかし、縦斧柄の形態は頭部の側面観が「ひさご形」が一般的といえ、これは用材の樹種を含めて縄文時代晩期後半・終末および弥生時代前期に属する縦斧の直柄を見分ける上で重要な点であろう。

近畿地方では弥生時代前期に属する縦斧の直柄は大阪府安満遺跡(Ⅰ期)・高宮八丁遺跡(Ⅰ期)・鬼虎川遺跡(Ⅰ期新～Ⅱ期)・山賀遺跡(Ⅰ期中段階)・四ツ池遺跡(Ⅰ～Ⅲ期)・京都府鶏冠井遺跡(Ⅰ期中～Ⅱ期)・奈良県唐古遺跡(Ⅰ期)・滋賀県川崎遺跡(Ⅰ期)・三重県納所遺跡(Ⅰ期中段階)などから出土しており、それらの多くは頭部の形態が下部の左右に張りのある「扇形」を呈するものである[奈良国立文化財研究所1993]。また、斧柄頭部の装着孔の形態は、縄文時代晩期の縦斧の装着孔が隅丸長方形か扁平な楕円形であったのに対して、円あるいは楕円形に近いものが多い。これは、縄文時代晩期の縦斧の斧身には、体部に最大幅のある定角式石斧が、弥生時代前期になって登場する頭部が「扇形」の縦斧の斧身には太型蛤刃石斧が装着されたことを示唆している[早川正一1983]。以上のような縄文時代晩期および弥生時代前期の縦斧直柄の頭部や装着孔の形態的な特徴と長原遺跡の斧柄を比較してみると、以下のような興味深い観察結果が指摘される。

長原遺跡の2点の斧柄は頭部の側面観が「ひさご形」を呈する縦斧直柄に分類されるものであり、型式学的には縄文時代晩期に属するものといえる。樹種についても縄文時代の縦斧直柄に多用されたコナラ亜属であり問題はない。異なる点は装着孔の形態である。長原遺跡の斧柄の装着孔の頭部上面と下面は円形に穿たれており、その大きさも上述した弥生時代前期の縦斧直柄の装着孔とさほど変わらない。これは、長原遺跡の2点の縦斧直柄に装着された斧身は菜畑遺跡で想定されているような身幅が長くやや扁平な蛤刃石斧とは違って、弥生時代前期に登場した両刃石斧に類するものであったことを示唆している。ところで、縄文時代晩期後半・終末の西日本地域に点在する側面観が「ひさご形」の縦斧直柄は、弥生時代前期の「扇形」の縦斧直柄が登場したあとも、頭部の張出しが省略されたものが未製品を含めて大阪府亀井遺跡(Ⅱ～Ⅲ期古)・思智遺跡(弥生?)・瓜生堂遺跡(Ⅱ～Ⅳ期)などで確認されており[奈良国立文化財研究所1993]、これらは太型蛤刃石斧が伐採斧として

命脈を保つ弥生時代中期後半ごろまで残るものと思われる。

以上のように東川辺川から出土した2点の斧柄について若干の考察を行ったが、このほかにも長原遺跡では東南部地区を中心に縄文時代晩期終末の突帯文土器の最終型式である長原式土器とともに縄文時代の伝統的な祭祀器物である土偶や石棒など、縄文色の濃い遺物が出土している[大阪市文化財協会1982・1983・1992]、[田中清美1992]。その一方で、初めの庄痕のある長原式土器が確認されたり、弥生時代前期前半の遠賀川式土器や土製紡錘車などの遺物も出土している。このような遺物相からみて、当地域の縄文集団は波状的に西方から伝播したであろう弥生文化を受け入れるに際して、従前の縄文色を短期間に払拭しないで徐々に吸収したものと思われる。

弥生文化の定着による生産様式の変化はそれに対応する石器や木器を生みだし、木器製作に使われる工具も変わるとともに従来は利用することの出来なかったカシのような堅緻な材も加工することを可能にしたと考えられている。したがって、葉畑遺跡のカシ材で作られた斧柄は、大陸系磨製石器、木製農具をはじめ、水田址などとともに葉畑遺跡の縄文集団が、近畿地方の同時期の縄文集団よりいち早く新来の大陸文化を受け入れたことを物語っている。また、縄文時代晩期の縦斧直柄の伝統は弥生時代中期後半ごろまで継承されたようであるが、これは縄文の木工技術が基本的には弥生時代に引き継がれたことを示している。

(田中)

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983、『長原遺跡(NG82-41)現地説明会資料』
大阪市文化財協会1982、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ
1983、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ
1990、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ
1992a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ
1992b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ
1995、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ
1997、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ
金子裕之1984、『石の刃の威力』：『縄文から弥生へ』(1984年7月シンポジウム資料) 帝塚山考古学研究所、
pp. 138-146
川西宏幸1978、『円筒埴輪総論』：『考古学雑誌』64-2 日本考古学会、pp. 95-164
佐藤隆1992、『平安時代における長原遺跡の動向』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp. 102-110
佐藤隆1994、『長原・喜連東遺跡の調査—輸入陶磁器を中心に—』：『古代末から中世前期における土器からみた貿易陶磁』 中世土器研究会第13回研究会資料、pp. 14-19
佐原真1977、『石斧論—横斧から縦斧へ—』：『考古論集』—慶祝松崎寿和先生六三歳論文集一、pp. 45-86
佐原真1982、『石斧再論』：『森貞次郎博士古希記念考古文化論集』、pp. 161-186
佐原真1985、『石斧』：『弥生文化の研究』5、pp. 37-42
菅原太郎1995、『石鏃資料の型式および製作技法の編年的検討』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、pp. 367-386
鈴木秀典1982、『瓦器埴輪の編年』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp. 278-284
田島富慈美1993、『有舌尖頭器における剥離面の検討—大阪市内の出土例から—』：『旧石器考古学』47 旧石器文化談話会、pp. 185-193
田中清美1992、『長原遺跡の土偶』：大阪市文化財協会編『葦火』38号、pp. 6-7
田中清美・趙哲済1986、『長原遺跡(川辺3丁目地区)出土の縄文時代の遺構・遺物について』：大阪市文化財協会編『葦火』3号、pp. 4-6
田辺昭三1981、『須恵器大成』 角川書店、p. 185
田辺昭三・加藤修ほか1973、『湖西線関係遺跡調査報告書』 滋賀県教育委員会、pp. 41-42、第46図
趙哲済1995、『長原遺跡の標準層序』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、pp. 19-34
中島直幸ほか1982、『葦火』 唐津市教育委員会、pp. 235-240
奈良国立文化財研究所1978、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』、pp. 92-100
奈良国立文化財研究所1993、『斧』：『木器集成図録』近畿原始編(解説)、pp. 11-22
奈良国立文化財研究所1993、『木器集成図録』近畿原始編(図版)、pp. 6-9
早川正一1983、『磨製石斧』：『縄文文化の研究』7、pp. 60-70

- 福岡市教育委員会1995、『雀舌遺跡』3－福岡市埋蔵文化財調査報告書第407集一、pp. 39－57
- 南秀雄1987、『瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群』：大阪市文化財協会編『葦火』8号、pp. 2－4
- 山中一郎1995、『用語解説』：『旧石器人のアトリエ』 羽曳野市遺跡調査会・京都大学文学部考古学研究室
編、pp. 92－95
- 家根祥多1982、『縄文土器』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp. 142－157

あ　と　が　き

「大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業」に伴う発掘調査がはじまって今年で17年を迎え、調査面積も1992年までに5万㎡以上に達している。この間に実施した調査は本書を含めて12冊の報告書として刊行したが、長原・瓜破遺跡は旧石器～江戸時代の複合遺跡であり、遺構や遺物は多岐にわたるため、遺跡の変遷を時代を追って理解するためには資料の系統的な分析が不可欠である。したがって、報告書の編集と刊行も継続的な作業の過程の中に位置づけられるべきものであるが、92年度調査を終えて6年余りの歳月を経ているため、本書では各調査ごとの事実記載に重点を置くことを心がけたことから、個別分散的な体裁になった感がある。IV章に長原遺跡東南地区で出土した斧柄に関する考察を収録したが、これは長原遺跡のみならず西日本における縄文時代の木製品の研究に寄与するものと思う。

現在、93～95年度の報告書も整理作業が行われており、本書で十分に検討できなかった部分や、解釈などは、これら続刊の中で補うとともに、今後とも調査成果を正しく踏まえる姿勢で対処したい。

(永島暉臣 撰)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と、地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

M	MT15型式	35	片刃石斧	135
	MT21型式	57	片刃縦斧	135
	MT85型式	60, 67	滑石製鍋	111
O	ON46段階	82	唐草文	110, 111
T	TK10型式	57, 60	唐津	110, 111
	TK43型式	67, 104	貫入	89
	TK209型式	18, 69	き 菊文	111
	TK217型式	67, 88, 129, 130, 131, 132	畿内第IV様式	82
あ	足跡	7, 13, 31, 33, 41, 44, 53, 62, 68, 71, 79, 84	く 隅踏類	13, 41, 53, 68, 70, 121
	飛鳥Ⅱ	70, 131, 132	凹み石	13, 26
	飛鳥Ⅲ	70, 87, 116, 119, 120, 122, 125	け 畦畔	44, 46, 68, 73, 79, 105, 106, 108
	飛鳥Ⅳ	116, 120, 121, 123	削り出し突帯文	19
	密竈	88	こ 小型丸底壺	87
い	家形埴輪	67	Ⅴ期(円筒埴輪)	88
	生駒西麓産	19, 57, 75, 131	黒色土器	14, 16, 55, 57, 58, 59, 61, 65, 66, 75, 76, 77, 87
	石皿	13, 23, 24	五弁花文	110
	石應丁	31, 36, 52	さ 細頸壺	78
	井戸	90, 91, 96	胴器	13, 21, 26, 27, 34, 38
	移動式竈	130, 131	し 刺突文	57
	印判	111	鳥島	42, 46
え	円筒埴輪	88	蛇の目軸刺ぎ	110, 111
	円面硯	126	珠文	59, 110, 111
お	四線	57, 104, 115, 122, 129	定角式石斧	140
	四線文	57	植物遺体	47, 65
	遠賀川式土器	141	す 鋤溝	31, 68, 112, 124
か	瓦質土器	34, 108, 110, 111	磨り石	13, 23
	火舎	110	せ 青磁	55, 82
	化石林	7, 65	石核	13, 21, 26, 27, 28, 38,

	39, 40, 41, 62, 125	軒平瓦	111
石刃	125	軒丸瓦	59, 110, 111
石蔵	11, 13, 14, 15, 26, 31, 33, 34, 36, 37, 38, 40, 41, 51, 52, 62, 67, 68, 70, 81, 82, 83, 84, 121, 123, 125, 126, 128	は 羽釜	57, 75, 91, 96
		白磁	89, 104
石棟	141	剥片	13, 14, 15, 21, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 33, 34, 37, 38, 39, 40, 41, 51, 52, 62, 65, 70, 99, 104, 125
石器製作址	6, 7, 8, 13, 14, 26, 27, 52	波状文	57
接合資料	27, 28	柱列	128, 129, 133
瀬戸美濃系	81	鉢	34, 55, 75, 82, 119, 126
線刻	89	埴輪	103
そ 草花文	108, 110, 111	蛤刃石斧	137, 140
た 台付壺	121	盤	89, 105, 126
高宮八丁遺跡	140	ひ 庇	119, 130
叩き石	13, 23	肥前系磁器	108, 110, 111
ち 沖積層下部層	97	平瓦	59
長頸壺	115, 116, 129	広口壺	55, 76, 115, 116
直線文	108, 110, 111	ふ 斧柄	48, 52, 135, 136, 137, 140, 141
沈線	34, 55, 58, 60	深鉢	19
つ 坪境溝	42, 44, 46	復弁蓮華文	59
と 砥石	62, 112	へ ヘラ描沈線文	19, 24
東播系	82, 104	ヘラ記号	67, 87, 126
土器埋納ビット	13, 18	ヘラミガキ	19, 21, 34, 35, 87, 88, 90, 91
土偶	48, 141	ほ 方形周溝墓	6
土鍾	66	紡錘車	141
突帯文	19, 141	方墳	6, 8
な ナウマンゾウ	7, 71	炮烙	110
長岡宮式複弁7葉蓮華文	59	掘立柱建物	9, 10, 13, 14, 15, 18, 79, 83, 84, 118, 119, 123, 124, 128, 129, 130, 131, 133
長原式土器	8, 13, 18, 19, 37, 46, 48, 52, 53, 136, 141	ま 曲物	91
鍋	59, 110, 116		
縄タタキ	59		
ね 楔石	16		
の 野井戸	46		

丸木弓	48, 136
み 三巴文	110, 111
水口	68
ミニチュア輪	89
も 初痕	26
や 山ノ寺式	137
弥生土器	13, 18, 19, 21, 23, 25, 57, 79, 82
ゆ 有基尖頭器	34, 40, 52, 112, 116
夜臼式土器	137
よ 横大路火山灰	33

り 龍泉窯	55
流路	7, 13, 18, 19, 33, 41, 47, 48, 51, 52, 53, 70, 72, 73, 81, 98, 101, 102, 136, 137
両刃石斧	48
両刃縦斧	135, 136
両刃横斧	135

〈地名・遺跡名など〉

あ 安満遺跡	140
い 一ヶ塚古墳	9
う 馬池	9, 10
瓜生堂遺跡	140
瓜破新池	9
お 恩智遺跡	140
か 鶴冠井遺跡	140
亀井遺跡	140
唐古遺跡	140
川崎遺跡	140
き 鬼虎川遺跡	140
こ 古川辺川	51
さ 雀居遺跡	137

し 滋賀里遺跡	136, 137
た 大正川	8
高宮八丁遺跡	140
な 葦畑遺跡	137, 140, 141
に 西川辺川	18, 19, 23, 25
の 納所遺跡	140
ひ 東川辺川	18, 48, 135, 141
東除川	8, 99, 101, 102, 104, 106
や 八尾南遺跡	7, 52, 84
山賀遺跡	140
大和川	8, 9, 44, 111
山之内遺跡	71
よ 四ツ池遺跡	140

**Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan**

Volume XII

**A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1992**

March 1999

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features and others in this text.

LC : Lithic concentration

NR : Natural stream

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SP : Posthole or pit

SR : Paddy field and Ditch

SX : Other features

CONTENTS

Preface

Explanatory notes

Chapter I Outline and progress of research work	1
S.1 The outline of excavations in 1992	1
1) Excavations	1
2) Procedure of publishing this report	4
S.2 Outline and progress of research work	5
1) South-eastern sector of the Nagahara Site	5
2) Southern sector of the Nagahara Site	8
3) South-western sector of the Nagahara Site and South-eastern sector of the Uriwari Site	9
Chapter II Results of research in the South-eastern sector of the Nagahara Site ..	11
S.1 Research area NG92-9	11
1) Stratigraphy	11
2) Finds from each stratum	14
3) Features and finds	15
i) Features and finds from the Asuka to Heian Periods	15
(1) Structures	
(2) Pottery burial pit	
ii) Features and finds of the first half of Early Yayoi Period	18
(1) Stream	
iii) Features and finds from the Early to the beginning of Middle Yayoi Periods	23
(1) Unknown features	
iv) Features and finds from the Late Palaeolithic to the beginning of the Jomon Period ...	26
(1) Lithic concentration	
S.2 Research area NG92-10	31
1) Stratigraphy	31
2) Finds from each stratum	34
3) Features and finds	41
i) Features and finds from the Asuka to Edo Periods	41
(1) Paddy fields of the Edo Period	
(2) Ditches and paddy fields from the Heian to Kamakura Period	
(3) Ditch of the Asuka Period	

ii) Features and finds of the Early Yayoi Period	46
(1) Ditches	
(2) Pit	
(3) Stream	
iii) Features and finds of the Jomon Period	48
(1) Streams	
iv) Other Periods	52
4) Conclusion	52
S.3 Research area NG92-24	53
1) Stratigraphy	53
2) Finds from each stratum	55
3) Features and finds	58
i) Features and finds of the Heian Period	58
(1) Ditches	
(2) Pits	
ii) Features and finds of the Kofun Period	60
(1) Depression	
4) Conclusion	60
S.4 Research area NG92-34	62
1) Stratigraphy	62
2) Finds from each stratum	65
3) Features and finds	68
i) Features from the Heian to Muromachi Period	68
(1) Streams	
ii) Features and finds from the Final Kofun to Asuka Period	69
(1) Ditches	
(2) Fallen tree depression	
(3) Pit	
iii) Features and finds from the Late Palaeolithic to Jomon Period	70
(1) Stream	
(2) Other features and finds	
4) Excavation below Nagahara bed 15	71
5) Conclusion	72
S.5 Research area NG92-47	73
1) Stratigraphy	73
2) Finds from each stratum	74
3) Features and finds	76
i) Features and finds of the Heian Period	76
(1) Ditch	
(2) Pits	

(3) Postholes	
4) Conclusion	78
S.6 Research area NG92-51	79
1) Stratigraphy	79
2) Finds from each stratum	81
3) Features and finds	83
i) Features and finds from the Yayoi to Kofun Period	83
(1) Structure	
(2) Pit	
(3) Paddy field and Ditch	
4) Conclusion	84
S.7 Research area NG92-62	85
1) Stratigraphy	85
2) Finds from each stratum	87
3) Features and finds	88
i) Features and finds from the Heian to Muromachi Periods	88
(1) Pits	
(2) Wells	
4) Conclusion	96
S.8 Research area NG92-81	97
1) Stratigraphy	97
2) Features and finds	98
i) Features from the Early to the beginning of the Middle Yayoi Periods	98
(1) Ditch	
3) Conclusion	98
Chapter III Results of research at Southern and South-western sector	
of the Nagahara Site and South-eastern sector of the Uriwari Site	99
S.1 Research area NG92-13	99
1) Stratigraphy	99
2) Features and finds	101
North section	
i) Features and finds from the Kamakura to Edo Period	101
(1) Ditches	
(2) The Higashiyoke River	
ii) Features and finds of the Asuka Period	104
(1) Ditches	
South section	
i) Features and finds of the Edo Period	104

(1) Ditch	
ii) Features and finds of the Nara Period	105
(1) baulks	
3) Conclusion	106
S.2 Research area NG92-18	107
1) Stratigraphy	107
2) Features and finds	108
i) Features and finds of the Edo Period	108
(1) Pits	
3) Conclusion	111
S.3 Research area NG92-11 and NG92-49	112
1) Stratigraphy	112
2) Finds from each stratum	115
3) Features and finds	118
i) Features and finds from the Asuka to Nara Period	118
(1) Building	
(2) Ditches	
4) Conclusion	123
S.4 Research area NG92-46	124
1) Stratigraphy	124
2) Finds from each stratum	125
3) Features and finds	126
i) Features and finds of the Asuka Period	126
(1) Building and Postholes	
(2) Pits	
(3) Ditch	
4) Conclusion	133
Chapter IV Investigation	135
i) Introduction	135
ii) Stone-axe handle and nomenclature	135
iii) Stone-axe handle from NR901 and associated finds	135
iv) Origin and development of stone-axes	136
References and Bibliography	142
Postscript and Index	
English Summary	
Reference Card	

ENGLISH SUMMARY

Introduction: development and excavation

This report details the achievements of the excavations undertaken at the Nagahara and adjoining Uriwari sites during fiscal 1992 (beginning April 1st). The sites are situated in the southeastern part of Osaka City, Japan, in one of the city's few remaining rural districts. Following improvement to both road and subway access, this area has experienced rapid residential growth which has been accompanied by increasing demands for water, sewerage and gas services. The sites lie within land being rezoned to accommodate the development of these services. Though emergency research prior to the rezoning and development of the area has been conducted since 1981, the area as a whole has been researched, almost continually since 1975. The Nagahara site itself, covers approximately 1,400,000 square metres, of which an estimated 5% has been excavated.

In fiscal 1992, a total of 14 excavations were carried out at the Nagahara and Uriwari sites, covering 2,983 square metres (Table 1, Fig 1). At the Nagahara site, there were eight excavations in the southeastern sector (Fig 2), two in the southern sector (Fig 2) and three in the southwestern sector (Fig 4). One further excavation was undertaken in the south-eastern sector of the Uriwari site (Fig 5).

Discoveries at the Uriwari and Nagahara sites

Finds from the south-eastern sector of the Nagahara site include a Late Palaeolithic stone-tool manufacturing site (Figs 21 & 22, Plate 33), a Jomon Period stream bed and a stone-tool concentration (Fig 28, Plates 7 & 8). Representing the Yayoi Period are both Nagahara-style and Yayoi pottery, remains of stone-tools and a stone-axe handle, all unearthed from an Early Yayoi Period stream (Plate 6 & 30). A ditch and paddy field dating to the Late Yayoi to Early Kofun Period were also unearthed (Plate 13). Features and remains related to an Asuka Period village were detected, additional features of which were found dating to both the Mid-Heian and Kamakura Periods (Plates 2, 14-16). Also found were paddy fields and ditches dating from the Nara to Edo Period. Traces of cattle as well as human activities were evident in the fields. (Figs 32-35, Plates 4 & 9). The Palaeolithic stone-tools were unearthed in Nagahara Bed 13 A and B, dating to approximately 15,000 to 20,000 years ago, and Nagahara Bed 14, approximately 25,000 years ago. The latter are the oldest stone-tools found in Osaka Prefecture the ages of which have been confirmed geographically.

The bed of the former Higashiyoke River was found in the southern sector of the Nagahara site. The river flowed northward along the western edge of this sector and was an important waterway in the initial development of Habikino Hill in the Asuka Period. Numerous irrigation ditches, dating from ancient to modern periods, running

out from the river, were unearthed during the investigation (Plates 18 & 19).

An Asuka Period village, comprised of large *hottatebashira* structures, each separated by a ditch, was located in the south-western sector of the Nagahara site as well as the south-eastern sector Uriwari site (Fig 101, 102 & 107, Plate 20 & 21). A circular inkstone was also unearthed (Fig 98, Plate 26). These features and remains will be important in the clarification of the characteristics of large-scale, Asuka Period structures.

In the 1992 excavations, investigation was limited to the fringe areas of the Nagahara and Uriwari sites. As a result, there were no features relating to the Nagahara kofun cluster uncovered. The other evidence, however, indicates uninterrupted habitation of the site since the Late Palaeolithic. Furthermore, the overall good condition of the strata and its incorporation in to the Nagahara standard allows for comparisons between this and other areas in the Nagahara and Uriwari sites.

From this point onwards, we aim at a holistic investigation of the Nagahara and Uriwari sites. To this end, a reconstruction of the geographical and environmental conditions of each period is being prepared.

Further Reading

- Aikens, C. M. and T. Higuchi,
1982 *Prehistory of Japan*. Academic Press, New York.
- Pearson, R. J., G. L. Barnes and K. L. Hutterer (eds),
1996 *Windows on the Japanese Past; Studies in Archaeology and Prehistory*. Center for Japanese Studies, University of Michigan, Ann Arbor.
- Tsuboi K., (ed.)
1987 *Recent Archaeological Discoveries in Japan*. UNESCO, Paris and Centre for East Asian Studies, Tokyo.
1992 *Archaeological study of Japan*. Acta Asiatica 63. The Institute of Eastern Culture.
- Tsude H.,
1988 Land exploitation and stratification of society: a Case Study in Ancient Japan. *Studies in Japanese Language and Culture*, Joint Research Report No. 4, pp 107-30. Faculty of Letters, Osaka University, Japan.
- The Osaka City Cultural Properties Association
1989-97 *Archaeological Reports of Nagahara and Uriwari sites* Vols. I-XI, Osaka.
(With English summaries except for Vols. I-III)
- The Osaka City Cultural Properties Association
1978-96 *Archaeological Reports of Nagahara sites* Vols. I-VI, Osaka. (In Japanese)

報告書抄録

ふりがな	ながはら・うりわりせきはつつちょうさほうこく 12							
書名	長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XII							
副書名	1992年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	田中清美・趙哲済・絹川一徳・櫻井久之・岡村勝行・小田木富慈美 永島輝臣愼							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪府大阪市中央区法円坂 1-1-35 TEL.06-6943-6833							
発行年月日	西暦 1999年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号					
ながはらいせき 長原遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 長吉川辺 1～3丁目 ながはらいせき 長吉長原西 2・4丁目	27126	—	34° 35° 40°	135° 34° 50°	1992.4.23 ～ 1993.2.27	2,253㎡	土地区画整理事業 (長吉瓜破地区) 施行に伴う調査
うりわりせき 瓜破遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 うりわりせき 瓜破東 8丁目	27126	—	34° 35° 45°	135° 33° 55°	1992.5.13 ～ 1993.1.12	730㎡	土地区画整理事業 (長吉瓜破地区) 施行に伴う調査
所収遺跡名	種別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		
長原遺跡	集落	旧石器時代		石器製作址		削器・剥片		
	田畑	縄文時代		石器集中部		有茎尖頭器		
	その他					石鏃・剥片		
		弥生時代前期		溝・土坑		長原式土器・斧柄・石鏃・磨り石・ 石皿・削器・弥生土器		
		弥生時代中期				磨製石廬丁		
		古墳時代		掘立柱建物・溝 土坑		須恵器・土師器・埴輪		
		飛鳥～奈良時代		畦畔・溝		須恵器・土師器		
		平安～鎌倉時代		井戸・土坑・ピット		須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・瓦		
	室町～江戸時代		溝・土坑		陶磁器・瓦質土器・瓦・滑石製網			
瓜破遺跡	集落	縄文時代				有茎尖頭器・石鏃		
	田畑							
	その他	飛鳥時代		掘立柱建物・柱列 土坑・溝		須恵器・土師器・円面硯		
		奈良～平安時代				須恵器・土師器・瓦		
		室町～江戸時代				土師器・瓦器		

圖 版

西区 西壁地層断面
(東から)



長原6-7層下面および8C層上位の2層基底面遺構検出状況(南東から)



SB402(北東から)



SB701(西から)



NR901(南東から)



NR901(北西から)



1区 長原4Biii層下面ウシおよび
ヒトの足跡群(南東から)

1区 長原8Ci層上面ヒトの足跡群(南東から)



1区長原9A層下面SD901・902、SK901(南東から)



1区SD901西壁地層断面(東から)

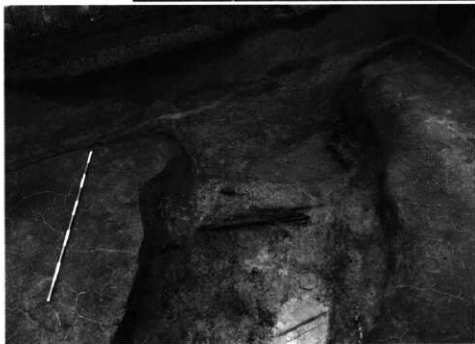


2区NR903(北から)



2区NR903斧柄出土状況(北西から)

1区長原12A層上面NR1201～
1203(北西から)



1区NR1202内流木出土状況(東から)



1区長原12A層上面の旧地形(北西から)



1区NR1204(南東から)



南壁地層断面(北から)



長原6A層上面偶蹄類の足跡群(北から)



調査地東部長原4Biii層上面
遺構(東から)



調査地東部長原9A層上面遺構(東から)



西壁地層断面(北端付近)



長原4Bi層上面水田址(南から)



長原6-7層下面遺構(北から)



調査地南部西壁地層断面(東から)



長原4層下面遺構(北から)



1区長原7A層基底面遺構(北西から)



2区SD701(北西から)



2区東壁地層断面(西から)



1区SK02～04、SE01(南から)